





一讀 三敷 當世書生氣質

目次

第一回

鐵石の勉強心も變るるらひに飛鳥山  
物いふ花を見る書生れ運動會

第二回

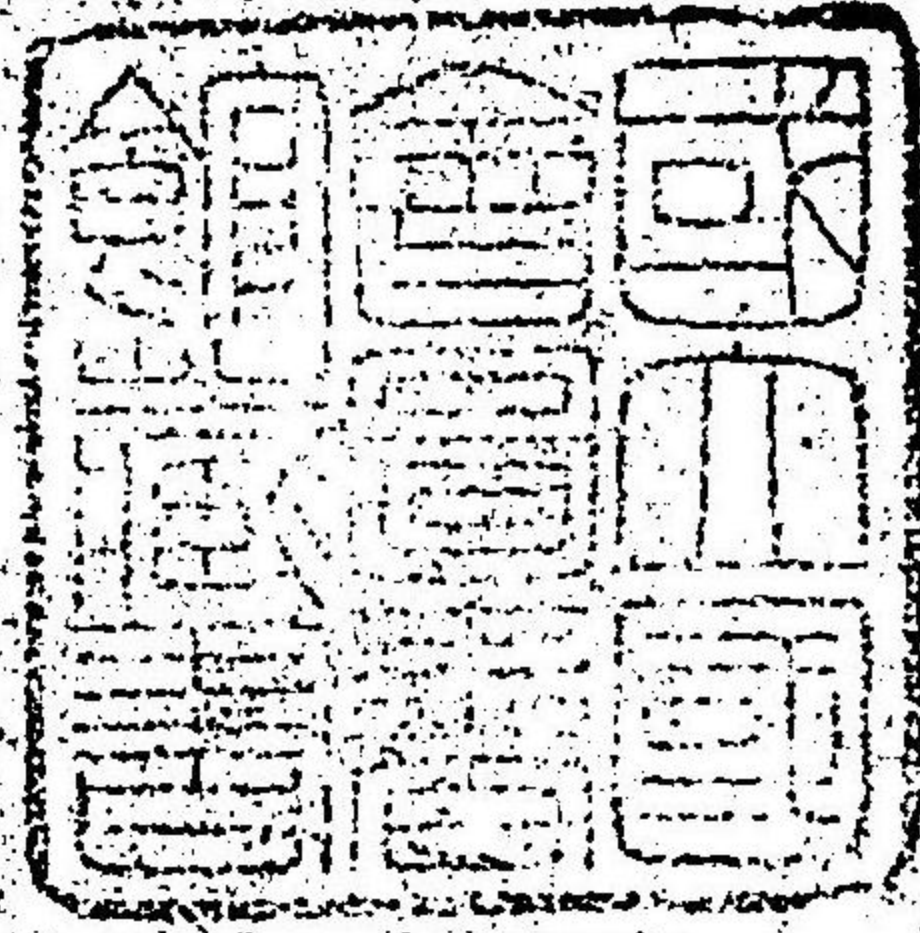
謹慎の氣の張弓も弛む  
不圖だ目み淡路町の矢場あそび

第三回

真心もあつた朋友の辭を意見  
額の汗を拭あへぬ夏の日の下宿住居

第四回

收穫も絶えて涙の雨の降つてく  
小町田の豊作不作



221910



第五回

心の縁の悪戯にて  
縁初し戀の緒のむかしがたり

第六回

詐り以て非を飾るゝ足る  
善惡の差別もどかうどの惡所通ひ

第七回

賢と不肖とを問ひ老と少とを論ぜむ  
たぶらうしざしざの客物語

第八回

雨を交ぐ人力車のめぐりく  
小町田が田の次に逢ふ再度の緒

第九回

一得あれば一失あり  
一我意あれば一理もある書生の演説

第十回

生兵法大さを間違をしてかして  
味方をぶちのめ書生の腕立

第十一回

つたせぬ縁日のぞろあるさふ  
小町田はからども舊知己にあふ

第十二回

學校から追出される親父の送資は絶える  
どこでもつ岡町は懶惰生の翻譯三味

第十三回

心の宵闇に  
有漏路無漏路を踏迷ふ男女の密談

第十四回

近眼遠からむ  
駒込の温泉に再度は間違

第十五回

旧人を尋ぬる新聞紙の廣告  
兒鳥ゆくりなく由縁の人を知る

第十六回

黒結の薄羽織の襟分にて  
薄からぬ縁因を志る守山と倉瀬の面談



第十七回

文意を文字通りよみ賀の兄弟  
そゝろコレラ病の報知よかたろく

第十八回

春あらねども梅園町よ心の花の開けをむる  
親と女との不思議の再會

第十九回

全編總て廿四脚色もやうく母  
塾部屋へ倉瀬の急報

第二十回

大團圓

目次終

讀當世書生氣質

春のやお平ら戯著

第一回

鐵石の勉強心も變るおらひの  
飛鳥山に物いふ花を見る書生の運動會

さまざまに移れば變る浮世かを幕府さかえし時勢よの武士のみ時よ大江戸の都  
もいつか東京と名もあらたまの年毎に閉ぢゆく世の餘澤なれや貴賤上下の差別  
もかく才あるものゝ用ひられ名を擧げ身さへたちまちよ黒塗馬車よのり賣の思  
子も鬚を貯ふれば何の小路といがめしき名前ながらに大通路を走る公家衆の車  
夫あり榮枯盛衰いろくよ定めあさ世も智慧あればどうか活計いたつる春の  
くあれは霜枯の不景氣も泣く商人あり十人集れば十色なる心づくしや陸奥人も  
愁あればこそ都路へ榮利もとめて集る富も才智も輻湊の大都會として四方よ



り入こむ人もさま／＼なる中にも別て数多き人カ車夫と學生をりおの／＼其  
數六万といひ七年以前の推測計算方今のそれとも越えたるべし到る處は車夫あり  
赴く所は學生あり彼處に下宿所の招牌あれば此方より人カ屋の行燈あり横町に英  
學の私塾あれば十字街に客俵の人車あり失敬の挨拶はゴツサイの掛聲に和し日  
和下駄の痕は人車の轍にまじりたる賢いすさまじき書生の流行またおそろしき車  
の繁昌これ併ながら腕づくして金も名譽も意の如くに得らるゝからの奮發出精  
まことに芽出たきことなれども若し此數万の書生輩が皆大學者となりたらんに  
は廣くもあらぬ日本國の學者で鼻をつくるべく又人カ夫がどれ／＼まこと  
ま顧客を得たらんよは我緊要なる生産資本も無爲に半額の費へつべしされども  
乗る客少くして手を空うせる不得錢多くまた脚關をたちてる折學もし成らずに  
死すともふどいふた其口で藤八五門うつて變つた身持放埒卒業するもの稀なる  
から此容体にて續かむに尚百年や二百年の途中で學者はあひたしと願合せす

る心配なく先安心といふものから其當人の身を取て遺憾千万残念至極國家  
の爲にのあつたらしき御損耗とぞ思われける斯く書生輩が志を得遂げざるに  
故あまども其原因の關係塩梅頗る隱妙不可思議にて皆一様といふ可からむ  
かし氣質のチヨン齋連中若しくは地方の親達などが曾ておもひも寄らぬ其  
隱密なる魂膽をば寫しだせる物語もそれといつて語らむして讀む人々に悟  
らしむる覆半の誠因果の關係善さも惡さもあからさまに作者が自儘の考案にて  
いたぬが花の讀む人が自得るも花歟一花をいで、松よまみこむ霞かを其春霞た  
ちためて景色と、のふ飛鳥山も麓も一面は花と人と埋る、四月あかばの賑  
ひは上下貴賤おしあへて共し樂む昇平世のめでたき著るし著るし  
△の毎度ありがたうお静し居らまやいましこの愛敬を背けうけて扇屋の店をたち  
づるの男女七人の上等客傲醉機嫌の千鳥足にて先に立たる一個の客は此一團の  
檀那と見え素人眼の鑑定でいさる銀行の取締敷さらぬ米屋所邊かと思はるゝ



打扮米澤の羽織。じみお琉球紬の薄綿入水頼の帽子を肩深にいた。さたるの時  
節柄少し暑さうなり年比の四十三四金時計の鍵を胸の邊に散々と計り見せたる  
の音床しき通人なるべし今一個の年の比三十五六これも銀行の役員ならず山  
の字のつく商人あるべし粧服も相應に立派なまども前の檀那に二三目おいた  
口振あり残る一個の年の比二十六七の好男子官員とも見えを商人ともつかぬ言  
語恰代言人ならんとおもわれたり。ときならぬ白チリの襟巻。頼虎の帽子黒七  
子の紋附羽織の少々柔弱をきたた粧服なり。殊に南部の薄綿とちと受りぬるとも  
るくはいへど中肉にして身幹高く色まろく鼻筋とほり俳優でいひ、松島屋の兒  
へチイ高の眼を嵌込んだといふ兒容ありまづ、午前の好男子なまども兎角氣  
取たがる癖あるのみ。辨舌があまり爽快ならねば、何となく甘つたるく聞え  
て運があるのとときく、一ハイケ可憐の御託宣。縁がありさうなる人物なり。  
婦人二個の敷寄屋町敷新橋あたりの藝妓と見え一個の年比二十五六一個のよう

十七八いづれも頗る別敷なまども若さの殊更曲者にて尚赤襟の色さめぬ新  
妓なりといひ見えながらも客をそらさぬ如才おき花の巷の尤物といひ其舉動にも知  
られたり其容姿いいかよといふに瘦肉にして背も低からむ色やくつまりと白う  
して鼻筋通り眼のちとばかり過鏡あれど笑ふところに愛嬌あり紅はげたれど  
も紅なる唇といひ眉根といひ故人とありたる田の太夫の舞臺見。珍驛たり  
されどどこやら愁ひ兒に見らる、廬もなきよあらねど笑ふ面。愛嬌あるから  
結句双方相照して趣をなま變化の妙ありこれらに所謂エニテイ(統一)とウバ  
ライヤテイ(變化)とを併せ得たる有吉趣的の美兒ぞといとんだ書生風の妄評に  
て世間に通せぬ陳腐藝。こと藝妓の後邊。引續きし二子装の二個の男の問ひで  
もまゐるさ箱犬にして餘計な花見のお荷物ぞと腹でお客が咬くといひ作者が両眼の  
評判ありかし。

⑤さる程一件の團のやどら扇屋をたちいでつ、飛鳥橋をバ打渡りつ岳の麓へ







(年)金精夫の名なりおまへの梅うめどんと一所いっしょあちらへいつてネもう直ちかまお歸かへまを  
 るから用意よういをしてと車夫くるまやにそついつてお呉くれを(金)へいまと畏かしこまりましたト麓かみの  
 方かたへゆく(田)サアくまありませうト二人ふたりの藝者げいしやの園田そのだと吉住よしずみを急いそがしつ、言かた  
 争かひながら登のぼりゆく。

○咲亂さかみだれたる櫻さくらの木蔭こかげに建連たてつらねたる葎たし張せもゆうぐれつぐる群鳥むらどりと共に散ちりゆ  
 く花見客はなみきゃく体ていらふ人も漸やち々く稀まれなる程ほどの詠あかめこそまゝ一層ひとしほどと打うちつぶやくしづ心こころあ  
 る風流男みやびをあればあたりかまほぬ高吟かうぎん放歌はうか相撲すもう綱引つなひき鬼おにごつと飲のみつ食くらひつ此時このときま  
 で興きやうに乗のりて暮初くれそむる春日はるひをまれし一團ひとぐみあり人数ひとかたおよそ十人にんあまり皆みな十二分ふんに酔よ  
 どれたる兒こに斜陽せきやうの映てりとふればさるに似にたまど去さりぬねて卧轉ふしまろふ人扶ひさかたくる人共ひとども  
 によるゆめ千鳥足ちどりあしあしたの課業くわげふの邪魔じやまにふる起おきたまへとの一言いちごんにていよく書しよ  
 生せいの花見はなみるといひと明あきらまど知られたる。

○此この一仲間ひとぐみのさる私塾しりじゆの大運動會たいうんどうかいの居残いざのこりと見みえて彼方かたの空虚くうこにあつた張柳ちやうりゆう梅うめ

の記念碑きねんひあり此方こなたの竹皮包たけかわづつの散ちりが杉箸すぎしと共に散亂さんらんたり酒さけを餘あまり嗜たしまぬ者ものや  
 深く沈醉しんせいざる書生しよせい單たんにおわかた歸かへりさりし跡あとと見えたり其中そのなかに一個ひつぽうの書生しよせいあり。  
 しひて酒さけを飲のまされたる其苦そのくるしさや堪たえざりけん遙はるか離はなれし古木こぼく乃な根ねへ卧ふし  
 仆たふれしまゝ前後ぜんごもしらむ此時このときまでも熟眠じゆみんせしが春はるといへどさすがにも黄昏かたれが  
 の風寒かぜさむみどや歸かへる足音あしおと耳みみに入りてや起おきあがる其容体そのりかたいかにといふ。  
 年の比としに二十一よせがた二瘦肉にせうにくにして中春色ちゆうしゆしきに白しろけれど麗つややかあらねばまづ青白あせしろいと  
 いふ兒色こほいろあるべし鼻高はなたかく眼清めぞしく口元くちもともまた尋常じんじやうにて頗まる上品じやうひんある容兒かほだちおれど  
 も頬ほの少せうしく凹へたる鹽梅あんばい髪かみに癖くせある様子やうすおんどに神しん經けい質しつの人物じんぶつらしく俗ぞくに所謂いわゆる  
 苦勞くろう性しやうどと傍はたで見みるさへ笑止しやうしらしと其粧服そのいんたふいかにといふ。此日このひの日曜日にちようびの事こと  
 にもあり且かつに櫻見さくらみの事ことあるから貯たくはへの晴衣裳はれいしやうを着用ちやくようしと見みゆるものから  
 衣服いふくの肩糸かたいと銘線めいせんの薄綿うすわた入いれたしかに親父おやぢからの被護おぼろがもの近日ちかごろ洗張せんちやうをしたりと見え  
 て襟肩えりかたもまだ無汚むごあり鼠色ねづいろにあつた錦縮緬にしんしゆくめんの尻子帯しつこびを裾すそから糸いとが下さりさりを垂たる



平の古袴で藏した心配これも苦勞性の甚るしと思はる羽織の糸織のむかしもの  
母親の上被を仕立直したる其証に袴の方より大層痛みたるけしき  
り其服装をもて考ふればさまで良家の子息にもあらねどさりとて地方とも思  
まねば府下のチイ官吏の子息でもあらん歟とにかく女親のなき人との袴の裾の  
ボロが保証たり。

○去程に件の書生の驚き覺めつ、四下を見れば人も漸く散り行たておのが仲間  
の人々さへみを歸り去りし有様ゆゑ驚きおがらも身づくろひして麓の方へ行  
かむとせる背後の方よりあいたゞしく走り来れる一個の人あり避くる間なく衝  
當りつ○ア、ラ御免なさいよ眞平御免なさいよトいふ女の聲するゆゑ驚き  
ながらもふりかへる書生の顔見て彼方も吃驚(女)ヲ貴君の阿兄じやアありま  
せんか(書)エ、芳さんの寢久しぶりだネエ(女)やんとり久潤でございまし  
た子エ何もお異りありません歟父上にお健康で居らつしやいますか先々月一

寸お目掛つた計りてまから今月は是非参らうと思つて居ながら父上の命令ッ  
たともありますもんだら。ツイと(書)わたしにまた一昨年おまへお別れたつ  
たり。いつも掛違つておなト東京に居りながら(女)お目掛るることか出来  
ませんので尚更お目掛りさくつて(書)僕…わたしだつて逢ひたくつて○然  
し大層變つた子エ不意に逢つたら見違へる位だよ。トいひながらつくづくと見  
る(女)やんとり氣恥かしくつてなりませんワ。ト話談半へバタとことかけて来  
るの以前の吉住後までとせくる藝者の小年がそれとさつて追すがりつ(年)吉  
住さんチヨイと吉住さん引何ですネエお待あさいよ貴方があんまり烈しくおつ  
かけなせるもんだから御覽あさいよ田の次さんが餘所のお方に衝當つてお詫を  
して居るじやア有ませんかそんなら田のちやんお挑ふと角海老がコレですよト  
指で角とせへて見せる(吉)ナンダ衝當つたから理屈をいつたトかもふものか  
書生奴が何をいやアがる僕がいつて掛合つてやらうト行かゝるを袖引とめ(年)





心の動かし  
梅の本の下  
遊進



アレサ先て理屈といやアしないが詫るの、當然でさア子ト争つて居る聲が聞える故(田)兄さんいろくうけたまひりたい事もお話し申したい事もありませけれど今日のお客と一所でせから。お名残惜いけれども(書)サアサア。かまひないで彼方へお出よ。いづれまた其内に。トいひながら残をさきうを親附田の次も去りかねて(田)兄さんいろく久振でお話が出来たうございますから。アノウ。といひかけしが小聲にて(田)ドウツ妾と一度呼んで下さいな(書)エ呼と(田)アレサ茶屋へ呼んで下さいな。一年に一度や二度兄さん。お目懸つたからつてお父上がお叱もなさいまいから内々で呼んで下さい。貴方も御修行中をせから何てせうから。アノ何の妾が如何をせませうから。トいふ折園田の聲として田の次くと呼立られ(田)ハイと。只今まいりますよ。○エ兄さん此度ですヨ(書)アと。いつた死り恍爾として居る(田)さやうあらバ。トいひすて、田の次の彼方へ走りゆく。其後悉つれくと打目護居る此方の書生を田の次が常願のいろ客かと邪推をし

たる以前の吉住幾度となくふりかへりて。眺む眼元。おのづから嫉妬の氣色のあらはるゝを。さて然るとさまがよも見てとる書生もたちまちに面色うへてぞうち見やる彼方と此方の腕競慕と蛇とが挑みあふ其元初にも似たりけり斯と知ぬ三芳と園田(三)ヲイと吉住さん。サア歸るべし(園)先生モウ鬼ごつとも終局にせやせう何をして居るんだ。サア行くべし。トせりたてられて餘儀もかく心残して麓へと下る吉住引添ふ藝者見送る書生見うへる田の次目にうよせる相互の真情いと切なりと見えながら戀と見へす戀おらぬ中とも見えぬ兩人をばかゝる筋に取別てぬけ目ないく小年さへ小首かたげて不審貌(年)ドウモ希代だヨ(田)エ大姐何ですとへ(年)エ。アノ何サ先刻園田さん。隠いた物を何處へう無してしまつたからサ。

○此方。尚もたつたるまゝ恍然思案の書生の背中ポント打れて覺えを吃驚(書)ヲヤ誰かと思つたら須河か尚君の残つて居るのか(須)ヲイ小町田怪しいやあの



藝者を君に知つちよるのう。と言ひれて覺に眞赤しせし顔を笑にまごらしつゝ  
 (小) ナアニ僕が知つてるもんか(須) ろれでもゑらい久しい間だ君と談話をしち  
 よつたでいないか(小) エあれはナニサお客と思ごつこつをにう伏して居て誤  
 つて僕に衝當つたのでそれで僕にわびて居たのサ(須) さうかアそき母しての大  
 層ていねいごなア(小) 何が(須) 彼がしむく君の方を振かへつて見ちつた  
 らサ余ツ程君をラブ(愛)して居るカ (小) 馬鹿を言ひたまへそれのそくと諸君  
 のモウ不殘歸ツてしまつつのウ(須) ウン今漸く歸してやつた泥醉漢が七八人出  
 来おつたから倉瀬と二人で早うして分控して不殘車よのせてやつたモウ、幹  
 事の願下だア、辛度く(小) 僕にまた彼處の松の木の下へ酔倒れて居たもんだ  
 から前後の事いまるで知らむサそれやア失敬だつたネエちつと手助をればよ  
 つた(須) ヤ日輪がモウ沈むろ去なうく(小) 倉瀬は如何したか(須) 麓の茶屋よ  
 俟ちよるじやらう官賀が無感覺ありをつたからそれを分控しちよる筈じやア

僕も酔た〜ア、引酔ふての 枕を美人の膝ア引さめ 醒ての 握る 天下の権引

第二回

謹慎の氣の張るも弛む

不圖だ目よ淡路町の矢場あそび

ぞやうくしと人カ車のゴツサイ稚兒の足元あぶなく駭々しき辻馬車の喇叭老  
 人の杖や失ふらん晴て風だつ日の土煙に新購の帽子爲し白く晏子の御者めく  
 官員も鼻の上ハ八字を畫さ結びしばかりの大島田埃がらゝるを苦勞として西  
 施の擗をまなぶもあり是筋違の夏おしき賢いや斯くて塵除に眼鏡の橋も入要  
 歟とうちつぶやける田舎人のあだ口さへも道理なり頃しも五月の下辯も暮初  
 る誰彼時講武所の横町よりいと急がしげよか々くる年比十九敷二十あまり人  
 品のよき書生風去年の夏買つたと見ゆるへこくありたる麥葉帽子をあほの  
 けさまよ戴き鼠色よなりて袖口のボタンハ悉く脱走したる白襦袢を被たる上  
 へ午後五時比ともいふべき偽薩摩の單衣を被て小倉の袴の膝のあたり白やる



にかりて。ひだの形をしに在りたるを短かき穿き日和下駄のけふ買ひし計と見えたるをいと荒らかに踏鳴らしつ風呂敷包を小脇に抱きて眼鏡橋へとさしかよる折しも聖堂の方よりして急ぎ来れる一個の書生と出逢がしらみ見合せ以前（書生）の書生の聲をかけ（書）や須河君も今歸るのか（須）ヲ、官賀か君の何處へ行つて来た（官）僕か子供といつう話をした書籍を買ひに丸屋までいつてうれり下谷れ叔父の所へまわり今歸るところだが尚門限の大丈夫か子エ（須）我輩の時器でいまだテンミニツ（十々）位あるから急いで行きよたら大丈夫トやらう（官）それトやア一所よゆうかう（須）ヲイ君一寸其アツクを見せんう幾何した歎（官）おもつたより願だツたヨ。といひおから得意兒に包をとくく取出をの美イトン氏の普通學識字典なり須河のあゆみながら二三枚開いて見て口の中おてペラペラと二三言讀とりつ、（須）實に是の有用じや君これから我輩にも折々引かしたまへ歴史を讀んだり比ストリカル委ツセイ（史論）を草まる時にこれが願ぶる益をな

まぞウ（官）さうサ一寸虚喝の種となるヨ。と話しあがら雉子町邊まで来る折傍の理髮店の内にて時計の音チン〜〜二人の吃驚見合せ（須）官賀いかんぞモウ六時を打たぞ我輩のウヲツチにおくれてをるワイ（官）エ待たまへ向ふのうちの時器を見るからヤア彼家の時計でいモウ六時を四分過て居らアこれやア困つた子エ如何しやう（須）イ、サ實に我輩の證書を持ちよるからコウツトまづ本日だけの君と連名にして遅刻届をだして置いて君の本證書の明日あらためてだせばえいサ（官）エ夫じやア君のけふ後れる積で居たのか（須）ウンニヤさうやないがアアいつか証人の所で遅刻の證書をもらふて歸つた所がなア存外に早く歸つたじや所で届とださいでまんだよよつて其證書を其儘にして取置いたのが三月とばかりで日附がふいじやから三月の三を五に書かへて本日の斷書トる積じやそこで右の者裁云々の前へ君の名を書かへればえいトやないかんだか除のんじやアあいか君も中々おるくあつた子（須）馬鹿アい、たま



狭山おんどよくらべると我輩なんぞの真一正真をもんどや狭山おんどい  
 留守は親父の印形と半紙十枚計は押して持つて来ちよるぞ而して勝手を  
 えい加減な事を書きおつて遅刻届や外泊届を出しちよるな(宮)フヤフヤ非道  
 子よくそれを學校でしらすゝある子それのそうと早くいるおいと賄の飯を食  
 ひ損ふぜ(須)待ていけふの菜は我輩己に見ておいたが何たらいふ骨の多いや  
 アな焼肴やとても喰われたもんじゃない寧ろ後れた位あらどこぞへ行で牛で  
 も喰らうかい(宮)それやア然うしやうト兩人あたりを見廻し半町計先の  
 牛肉店へはいる(牛店夫)被入しやいましたの聲と共に兩人二階へ上る中働の小  
 婢火鉢を兩人の前へをへながら(女)お詔(須)鍋で飯だ。フイ君酒のむか(宮)  
 どうでもない、(須)一本もつてこい(女)かしこまりましたト小婢の階子段は降り  
 ながら(女)御新客お二入さま鍋で御酒引。  
 ○程お牛鍋と酒場を持来れば兩人しばらく無言にて肉を喰ひ酒を飲こ。

の餌を食るがごとし宮賀の箸で鍋の縁を叩きながら(宮)フイ生肉の代に葱の代  
 を持つて来い(須)序はモウ一場酒だ(宮)相のらむよく飲むナ(須)十二酒にあ  
 んまり飲たうもないが少々肝癪は降る事があるやよよつて所謂やケ酒サ(宮)  
 如何したんだ(須)如何したつて君聞いて呉れい實は倉瀬は非道い失敬な事とま  
 るでいない先月の末は少々調べたい事があるよよつて無用ちよるなら一寸君  
 の英文大家文章を借て呉いといふから貸してやつちよいた所が今月になつても  
 返さんよよつて度々迫つて警責をまると據ない事情があつて友人へ又借しを  
 しといふて愚圖愚圖して返さん想ふふ又貸とい道辭して七え典した欺賣し  
 たに相違ない實は非道でないかア(宮)それやア非道い非道いといや彼の纏  
 原とかいふ奴は可厭奴と子エ過般も絹の袴を突いて駒下駄を穿さやアがつてイ  
 ヤ化粧して歩いて居たが(須)其答サ彼奴は淫モウラル波一チイ(放蕩連)の領袖  
 じやものヲ前の日曜日の晩景なんぢの門鑑を出さいて帽子で面を蔽はつて學



校の門をぬけだいて山谷と一所再新宿とやらへ行きよ川たそりトヤ(宮)然う遊んで計居ながら能く教場へてられる子工(須)それが彼奴の老練じやワイ繼原の青樓へ行く時よも課業の書を持つてつて名代部屋たらいふ所で間があるや下讀をするといふ風評じやエライ熱心な勉強家ていふいかアハ、ハ、ハ、(宮)倉瀬も近來彼奴と折々一所ふ出るもんだから其故てそろ／＼ぎるくなつたんだらう(須)ざるくあるといへば實に人間の當にならんもんじやなア彼奴小町田を見よ此頃放蕩をそじめめといふ事じやぞ(宮)やんとし再ああの勉強家(須)ほんとうとも大事實トヤ何でも數寄屋町邊の藝妓で田の次あらいふ女に迷ふちよるといふ事トヤが薄々々校長れ耳へも這入ちよるといふから退校し成もしれん(宮)惜む可しだ子工ああの位學問ができたが僕に毫もそんな事いしうなうつたが(須)知らない筈トヤ小町田の單身でゆくからじや單身でゆくだけ罪が重いワイあんな放蕩連の悉く追拂ふてしまうがえい(宮)非道く惡くいふ子岡焼トヤアあ

か(須)馬鹿アいへや焼といやア鍋が焦つて来たぞ(宮)ヲ、夢中よなつて人の風評をして居て酒が来たれも肉の来たのも忘れてままつたサア大に喰ふべしだ(須)大に喰ふといやア任那のよく喰ふなア先日一所汁粉店へ行つたらなア汁粉を十一椀くふたぞ實に非凡のグラツトン(大食家)トヤ(宮)十二任那の食ふ計が非凡トヤアなゆすることをお事非凡だまづ常のぶら／＼遊んで計居て試験に優等の点をとるし馬鹿お口計た、いて居るかと思やア高尚な議論を吐くし疎漏を人どと思つて居ると存外に義理の堅し實に出沒不思議とい任那の事だらう(須)あきらがまた磊落な奇人トやらうあア(宮)任那といふから支那人の子孫かも知ないが弊袍をきてかまゆぬ所おぞ何やら由の血統らしい子下且喰ひ且飲み且語る談話なかへ階子段を登つて来るは是もまた二十三四の善生して色黒く肥満とふとり體格たくましく髪色いと黒く眼のすこし凹たる方にて黒眼がちなり白地の浴衣の七八回水ツをひりをしたと見ゆるのを被て小倉の袴の腰



の縫目の綻びて脚のあらゝる、のを穿ち綿銘線めんめいせんの袴羽織はかせをり 襟えりのあたり鼠色ねずみいろよりたるを勘定かんじやう捻ひねの紐ひもにて曲形まががたにひっかけしり時節じせつがらあつさうなやに到いたらぬ素人の考かんがへにて右みぎと左ひだりの浴衣ゆかたの肩かたに握拳にぎこぶしをどお大さお破穴やれあながあるを知らざる故なり六七度たひやくわ俄雨わかあめに出逢であつたと見えて胴どうと縁えんとの縁えんがきれて離れさうよあつた古帽子ぼろしを故意わざと横よこさまよ被りあがり肩をいからしてあがつて来り以前の兩人りやうにんと見合せみあはせ(書)や須河君すがわきみ宮賀君みやがきみ勉勵べんれい黨たいとうの珍めづらしい遅刻ちこくです子(須)や任那君にんなんきみ恰ただど今君きみの風評ふうへうをして居た所ところじやつた(宮)相替あひかはらず歌々乎ひやうくことして單騎たんき獨行どくかうです子(任)然しかりヲイ姉あねさん鍋なべを二人前にんまへふ酒さけご(宮)ヲイ此方こつちへの飯めしを持って来てくれ(任)モウ君達きみたちの飯めしが須すらく更さらよ一盃はしを重ねかさべしツといふ中小婢ちうちこをんめか持もちいづる猪口ちゆうぐちをとつて宮賀みやがよさす(宮)モウ僕ぼくのいかん(任)然しからむ君飲きみのみみたまへト須河すがわへ回まはせ(須)河の猪口ちゆうぐちを受取うけとりて(宮)と辭ことながら(須)任那君にんなんきみ守山君もりやまきみの如何どうしちよるか子(任)守山の相替あひかはらむブツぶつツ(書物)と首くびツ引ひサ今日こんにちも我輩わがはいが淺州せんしゅうまで遊歩ゆうほせんかといふ

たが翻譯ほんやくものを艸そうしてむめたからといつて更さらよ出でない而しかして其為そのかす所ところを見れむ。學校がくかうへ通かふのと東光學館とうくわがくくわんへ行いくと折々せりく温泉おんせん浴よくするのみサ(宮)東光學館とうくわがくくわんといふ(須)君きみはまだ知らんか法律家はふりつかがたてた法學校はふがくしやや守山君もりやまきみも餘暇よかに教授けうじゆしちよるといふ事ことトや子工任那君にんなんきみ東光學館とうくわがくくわんも近來ちかごろの追々おひく盛大せいたいになりましたらうなア(任)然しから生徒せいとの數かずが無慮むりよ一千八百十人せんぱちひゃくじゆ人にんト(須)エ(任)ナニサ。二千にせん人に足たらなといふ事ことだ(宮)アハ、ハ、ハ、それトやア百九十人ひやくきゅうじゆ人にんむかりです子(須)それにしても中々ちかぢ盛さかントや(宮)守山君もりやまきみの如何どうしてそんなよ勉強べんきやうがでさるだらう實じつよ感服かんぷくなものだ子工(須)あれで健康けんこうじやから奇代きだいトや(任)あんまり健康けんこうでもないよ。靨えんの顔色がんしよくも憔悴しやうそして肺病はいびやうの徵候ちゆうかうが見えるから我輩わがはいも時に忠告ちゆうこを試こころみて見るが毫ちひも用もちひぬから仕方しかたがあい(宮)しかし守山君もりやまきみでも君きみでもモウ一月計ひとつきけかりで卒業そつぎふだらう。羨うらやましい子(須)守山君もりやまきみの卒業そつぎふしたら何なんよなるじやらうか(任)代だい言げん人にんよなるといつてるよ。(須)守山君もりやまきみの代だい言げん人にんの少々せうく適當てきとうしないていふいかあア(宮)ナゼ(須)



河故ても守山君のあんまり謹慎すぎるからゐる。(任)馬鹿アい、たまへ守山がな  
 んでおとなしいもんか(須)エそんなら守山君もプレイ(遊廓)をどへ行くことを  
 いふ書生の通語あり)するかなア(任)ナニプレイをる譯トアアおいがネ中々  
 如才ない男だから世間の交際の極めて精妙ヨ必竟書生のうち遊ぶやつは騰の  
 少さいおとなしい方で書生はうち忍耐の強いやつが却つておとなしくないや  
 つヨと語らふ折しも下よりして飯と土瓶を持来れへ宮賀の任那に會釋なし(宮)  
 失敬ですが僕等の飯としよう(任)何處かへ行くのか(須)インエ學校へ戻るのて  
 す(任)どうせ後れた位なら急ぐべし要がゐいてゐないか我輩の己に晚餐を了つ  
 たから此酒を飲んだら君達と同伴して寄席へでも行かう(須)コソトどうで証書  
 を出す位なら少々寄席でも聴かうかなア(宮)イヤないぜ遅くなると(須)ナニイ  
 大夫丈トヤ門限の十時トヤトよつて少々早う戻さばえい毒くの血までじや  
 行かう(宮)それトヤア然しやうトいひながら宮賀のなんだかすまぬ兒して

飯を喰つて居る此中任那も酒を飲了しりば双方共勘定を済して牛肉屋と出る  
 (牛店夫)毎度ありやたう。

○さる程に任那(名)透一といふ(須)河名(悻三郎といふ)宮賀(匡といふ)三  
 書生のなふか豆むだ口を叩きながら筋違の方へあと戻りして白梅といふ寄席  
 へといる(札番)イラツシヤイ。

○折しも當席の燕枝柳枝おどの一連してさしかあり入かありて陸續高坐に登る  
 ものうら柳枝が高坐ふあがりし頃、九時半とも思はれたりされども此方  
 の宮賀と須河はまだぼつとでの氣味失せねばつまらぬ前坐の落語をさへ願をえ  
 つして聴く方もえ柳枝が頗る輕妙ある其辨舌に聴とれつ、時間の移るも知らざ  
 りしが柳枝が得意の釣客告條(柳)扱こきからの如何ありませうかまた明晚の中  
 入前トむかしとつたる講釋口調名残のこして引さがればトタン一樂屋で聲高  
 く中入ツとぞ叫ける(茶費)お茶の宜しうございませる(菓子費)菓子によしゐるア。



○(任)ヲイ菓子を持って来い。ヲイ茶も要る。(須)ヲイ其方にある館の這入りよるのを呉れイ幾何トや(宮)ソラ四銭やるぞ(須)我輩がペイ(拂ひ)するうらえいの(宮)それでいいかん僕が拂き(宮)同じこつちや後でアツカウント(計算)をするからマアえいといふよト兩人争ひながら菓子代を拂ひ三人相集りて喰ふ此時任那のみ平氣よて他人の買つゝ菓子を遠慮なくムシヤ〜と取り喰へる例の磊落氣象ゆゑといひながら一ツの此席へといりし折水戸銭を拂ひし餘光と見えたり。(須)燕枝の實に精妙なア(宮)エ燕枝のまだ出やアまないとやないか(須)いま出とていはいか(宮)馬鹿アいゝたまへアレヤア柳枝サ柳枝と燕枝と間違へてたまるものか燕枝の方のあれよりかズツト精妙ヨといひれて須河の間が悪るううふしばらく無言で居たりしが俄に心附いて懐中時計を見る(宮)ヲイ何時か(須)やまだ九時十分前じや存外早いなアトいひかけしがよく〜見ると時計のせまつて居る様子なり蓋し此時計の片側ガラスの銀時計なれどもドルの高いと

きに八圓位の代物ゆゑドルが一圓十錢臺の時にくたうが四圓内外の蕨物あり(須)やい〜時計のドンタクじや(任)然だらうヨ先刻の上野の鐘が十時らしいもの(宮)それやア大變だ歸らう〜(須)任那君失敬といひもあへぞ二人はあつてゝ寄席の二階を降る(店番)まだお早うございます(須)モウ何時トや(店番)モウ十時半でございませう(須)早いどころじやないの大變じや早う下駄を呉れイと急がしげ〜下駄を穿れて兩人街頭へ出る(須)宮賀いゝんぞモウ門を閉てしまふた〜相違なひぞ(宮)いゝない子エそれだから僕が寄席へゆくまいと思つたものヲ(須)それを今いふたどて魯スト釵ン(死子)の年じや如何せうなア(宮)如何しやうたつて仕方がないじやアないゝマア學校までいつて見やうト兩人の直走ハ駿河臺の方へ向ひて馳出せしが一二町走りし時須河悱三郎の聲をかきて(須)ヲイ宮賀待テイせつものうて馳られんから待て呉れイ今から馳ていんでも五十歩百歩じや少々のろく歩行かんかトいへば宮賀も賢よもと思ひて是より



兩人足をゆるめて何かむだ口を叩きながら淡路町の横町へ這入り小川町通へ出  
 んとせしお此横町の俗いふ矢場横町みて人素三分化素七分の白首連の菓窟を  
 り殊に此夜の闇と見えて甲處の店も乙處の店もみな香箱製造の折柄あれば今兩  
 人の通るを見てよき敵ござんなれといふ見ゆてふとく逞しきふとつちやうの  
 娘 兩 三人(娘)アレサ中村さん渡邊さんチヨイトお寄んなえいなチヨイトサア  
 といひながら兩側からバラバラとかけいでつ、(娘)素通のなりませんヨといひ  
 もあはむ宮賀の袖を引留むまば宮賀の吃驚狼狽して振拂ひつ、逃れを此方の須  
 河も仰天して走りぬけんやをる間もなく向ひの店よりかたいてさる二十あまり  
 の一個の女がたちまち緊乎と抱とめつ、そや店先へ引立れば宮賀のままく、驚  
 きつ、抱とめられては叶ふまじと須賀とうちすて逃出すを追すがりたる一個の  
 小娘お待あさいヨの聲もろとも又も袖をとりとむるを離せといへども離せば  
 こぞ宮賀の益々狼狽して引つ引かれつ挑みあふそれと見るより又一人紅金布の

湯巻の裾翻へしつゝ、えせくる様子に捕へられては、一大事と宮賀の覺えを手に持  
 たる洋書の包をふりあおつ、小娘の面ハタと撃てばアツト叫びてたじろきつ、  
 覺えを握りし手を離せば得たりと此方の一生懸命通街の方へと逃ぬけつ、ホツ  
 ト一息つき居たり。

○さる程に須河悻三郎の身體肥満の大娘は後の方より抱とめられ振離さんどて  
 角力ひしかど彼方も頗る一生懸命練馬大根よろしくといふ左右の腕もてしめつ  
 けく豊うちやん定あちやんヨウ定あちやん引ト呼るる下より二三の小娘前後  
 よりしせあつまり押たて引たて店先まで竟須河を引こみけり中よも素敏さ  
 前の小娘あつ々に取られて茫然たる須河が掛たる懐中時計を手早く外して取あ  
 げつゝ(小娘)サアヨウマアおあがんあさいヨウ(須)コレ何するか時計を取て  
 いかんがコレイ返して呉れ友人が待ちよるからコレ急いでゆかんけむばならん  
 ヲイ返せイ(娘)アレサそんな野暮をいひあいでお登んあさいヨ(又一人)お連



乃お方かたのあちらの店みせへあつて遊あそんでおいておさるじやア有ありませんの(須す)ドレ  
 何處どこに(娘むすめ)ダカラ貴方あなたのこへマアサおあがんおさいヨウト無理むり引ひづりあげ  
 る須河すがわの遊あそいださんとお思おもへど時計とけいを質しちに取とられて遊あそるにも遊あそらまをさればと  
 いつて今更いまさら改あらたまつて怒おこる譯わけもいかすと殆おほと思おもふ困こんで當惑たうわくして居ゐる(娘むすめ)  
 アレサ貴方あなた大層たいそうぬさぐじやアありませんか今ツトお引ひなさいヨ(小娘こむすめ)ナニネ妾めかけ  
 が時計とけいを取とりあげたえんだから此度このたび股はらをたつて居ゐらツしやるんだヨヨウ檀那だんな堪かん忍にん  
 して頂戴ちやうだいおといひつ、莞爾わんじやう笑わらふ此小娘このこむすめの年としの比くらまだ漸やう々く十四五じゅうごと見みゆれど頗おほる  
 コマツシヤクレヲ質たちにて容色かほたちも人素にんその多い方ほうなり俗ぞくにいふお轉婆てんばおれども彼女かのめ  
 の活潑いっかつぱつだるど、いつて書生しやせい連れんよよろこむる、小娘こむすめなり其名そのなをお豊とよといふ須河すがわが  
 先刻せんこくよりしむくお豊とよの兒こを見る様子やうすにうれさきとつたお定さだといふ娘むすめ小津こつよて  
 お豊とよは向むかひ(定さだ)豊とようちやん(豊とよ)ナニ(定さだ)此客このきやくハ子隨こぞい分ぶん七月しちがつのお鎗やりの癖くせにお前まへは  
 十八じゅうはち棒ぼう跳はねグヨト一いちくともいゝないがマンザラ北國ほくこくの雷かみなりさままでえあさううだ

半助はんすけでもとつておやりヨといへば(豊とよ)ア、トいひながら笑わらふ(須す)ライ姐あねさん時  
 計けいを返かへして呉くれんう(豊とよ)アラまだおんお事をいつておいでなさるヨマアお御腰おごし  
 をすえて一本いっぽんお引ひなさいヨウオヤ一寸いちゆづとお見みせなさい貴方あなたの羽織はおりは紐ひもは珍めづらし  
 いんだことトいひながら須河すがわの膝ひざにひつたり寄添よそひ珍めづら敷しくもなき編分あみわけの引懸ひっかけ紐ひも  
 を珍めづらしそうに見みてゐる須河すがわの間まが惡わるそうに尻しりをもぢもぢしながらさちも得えや  
 らす座まるでもなく上あり口に立膝たてひざをしたま、無言むごんで居ゐる(定さだ)ナゼ貴若あなたはとんおよ  
 押立尻おしたてしりをして居ゐらつたまやる約束やくそくだつたんだヨ(須す)馬鹿ばかアいへ(豊とよ)いとエ此度このたびさう  
 だヨそきだからお尻しりがおちつかないんだヨ惡わるらしい子こイといひながら須河すがわの膝ひざ  
 のあたりをツメる此小娘このこむすめおか、の曲者くせものなり(須す)アイタ、何なにもるか非道ひだいこと  
 をするをア(定さだ)思おもひたりいちめておやりヨおんとうに此節このせつの書生しやせいさんにおとあ  
 しい兒こをして居ゐて毫ちつとも油斷あぶたんがなりやまさいヨ(豊とよ)白狀はくじやうしおいとくまぐりまき



ヨ(須)アまるつた。あどそろろ。口車に乗る。つて狂ひ動揺をく其折柄近所の職人とも思ひる。者やろえひ機嫌にて入来れば(定)ヲヤ清ちやん今晚の大層御機嫌です。子(今一人の娘)お寄んなえいヨトいひかけて彼方へ煙草をまよめあどす須河の漸く心附れて懐中の暮口を探り見るに銅貨の先刺寄席にて盡く拂ひ盡せしゆ多残る。壹圓紙幣一枚のみなり。銅貨さへあき。四錢もやれば澤山だらうと思ひながら銅貨のなきは當惑して(須)ヲイ姐さん。これを細のにして呉れんか(豊)ハア壹圓です。ネトいひながら興へ這入ると間もなく彼方も如才なく二十錢紙幣を五枚持て来たり。(豊)こゝに置まをヨ須河の再び當惑して如何のせんと思ひしが流石は二十錢を十錢紙幣にして呉れともいひかねし乎(須)ヲイ時計を呉れんかお茶代はこゝへ置くぞトをしきうは二十錢をはふりだし辛うじて時計をうけとり街頭の方へ走りいづれば例の小娘の如才なく後へつゞきて追かけ来り(豊)チヨイと貴君あした又おいであさいヨ此度でもヨといひかけて昔

後うら肩にとまりてぶらさがるやうにする(須)ムと又来るがトいひはあして小川町の方へ馳出つと彼方此方を見回す。己に夜も十一時過と思われ往來の人も稀々。(須)官賀は何處へ行をつたかまらん。ハテ困つた事になつたなアト獨語をいひく。急ぎあししておのが入塾せる学校の門の前まで来りし頃四方に人力の車の音もあく犬の吠聲のみ聞えたり。門番も己に熟眠たりと見えて五ツ六ツ門の戸を叩けども答もあし。思案に暮つと突立たる。遠向ふの方よりして急ぎあしめて馳来る者あり。月のあけれど透し見るにたしかに二個と思はれたり。此方へ来るの疑ひもあく。此学校の人間なるべし。其爲す由を見し上にて相談相手とあさんも。其近寄るを待居たり。必竟件は二人の者の。此学校の書生なるや。はた兩人が来りし後果して何等おえなしかある後々の因に説いづべし。

### 第三回

真心もあつた朋友の辭を意見よ

額の汗を拭あへぬ夏の日の下宿住居



拾疊の間正面に一間の床あり薫りるへりし半切の軸に精神一到何事不成といふ八字を大書し落款に牛首山人書とあれど處何の馬の骨の書いたのやら辨らぬものなり一邊安置せる新調の机子引出シのツマミ己に損じたるにまる加減するべし洋燧の空箱ひとつたみよう枝と共に散々人情本上中下々宿屋の書出しを挿えさみある十五日拂の勘定いまだまぬと思われたり彼方の一隅にもまた一脚机あり白金巾もて掩ひ蔽したる秩序さまが一整ひて硯あり筆立ありウエブストルの大辭典のランプと共に書箱の傍に並立し一卷の洋書の繕きて机の上あり但見れば處々銘筆もて注意の一印を附したるにまづ讀人の苦學に程思ひやられて何となく興おかしき心地ぞもる書箱のとり取りの衣袋竹あり勸工場て買ひとりたる出来合物との見ゆるものから壁の折釘へ直接に衣袋を引かけぬ用心の上方出の書生に此社會のいそぎ希なる注意家とこそ

思ひきたれ羽織の午後四時をぞと見ゆれどもとにかく昔物の上黒紹單衣の儘産近日仕立しばかりと見え引臘の光彩の尚残れるも一度水を潑らせまばさこそくやしした色をや見ん。

○寂寥なる下宿屋の二階の階子荒々しく走りあがりて會釋も亦く守山君居るる子といつ、襖をかしひらくは年の比二十二三の書生風其打扮のちかごろ仕立させしと見ゆる上布のかたびらに徒歩で王子の荷箱へおたて半日瀧にうたれましたといふ程草臥きつたる本場の博多を見乃口に結びおしアンペテ帽子のまだ新らしと見ゆたるを右の手に携へある人品さすが一賤しからを田舎漢の眼で見たらばさる省の中懿の近所あるまかとも怪まれんそもこの書生の何者ぞといふ一前もしはく風評ありし倉瀬蓮作といふもの母て越後新潟の生れなれども己は七八年東小母ありしゆえ最早故郷の方言の大槪おぼりたりと察した





○(倉)ヲヤ守山も任那も居ないの。ハテナ雪隠へでも往つたらうしらんト獨語い  
 ひく片膝をたて、机の邊へ坐りかたへの煙草盆と引寄せて懐中煙草入を取り  
 だす折しも下より登り来るの白地の浴衣へコを締たる即ち此居間の主人にて  
 守山支芳といふ静岡縣士族年の比の倉瀬と大概おなじ程と思はれるれど何をなく  
 威儀ありて何處となく沈着たるの家庭鞠育の方法の其宜しさを得たりしは依る  
 敷た天然の性に成るかど推理家が見たならば一寸頭を右左りもたげさうあ  
 る人物なり(守)ヲヤ倉瀬いつの間よきたのだ(倉)今日の島岡の洋行の送別會が  
 あるから今學校から出掛た所だがをこしお願の筋があるうら一寸御貴臨いたし  
 たのサ(守)然る丁度うちよいてよかつたトいひながら手をハタささうち鳴ら  
 せばハイの返辭の聲と共に二階口うら顔をいだまひ此下宿屋の小婢と見えて十  
 三四才の小娘なり(守)オイお茶を持って来いうして是で何か餅菓子をと十錢の  
 精幣をわたす(小女)かしこまりましたト降りてゆく(守)倉瀬けふの送別會は何

時ら何處でするんだ(倉)下谷の鳥八十で六時からと云のだが例のとほり日本  
 流で二時間ぐらありのあらす時間に掛直があるごろうと思ふが實に日本人の不  
 締密あのよの恐れるヨ時よお願といふの外事じやないがといひかけてさま  
 や一口隠りし体ありしがすこし聲をひそめて(倉)君すこしMを持って居ま  
 いうネ(守)何の位入要だ(倉)今日の會費の壹圓貳拾錢といふのだが外に車代も  
 いる譯だから壹圓五拾錢か貳圓あらは借してくれたまへ此月末のさつと返すか  
 らト餘義なきさうにいへば(守)此月末に入要のモ子イだがそれを承知から用立  
 やうまかしさつと當母して居るら頼むヨ(倉)承知々々かならを違約のしない  
 トいふうち守山の机の引出しをあけて紙入をとりだし二圓札を出して置たす  
 (倉)サンクス(幸甚)これさへあればまづ今日の義務をむといふもんだ序よ君  
 モウ一ツ願音を聴いてくれたまへ(守)イヤ二枚の深い人だしうし何だ(倉)御覽  
 のとをり僕ハ羽織さしといふ次第だからこひねがはくは君一枚羽織と借さまへ



どんまのでもよいから(守)あまり氣のよい羽織のないぜ。これでよければ被て  
 ゆきたまへト傍まかけおきたる黒貂の羽織をとつて渡す(倉)やこいつの豪氣だ  
 ○まうしこれやア所謂正宗派だ子雨傘を肩よしたらあぶあからう(守)ナンダ此  
 野郎他の羽織をかるさへあるふあまいたに悪くいふあいま一言いふと借しやア  
 しないぞダが倉瀬君がまるくいふも無理のない其羽織の親父から貰つたので品  
 柄もあるくないが何しろ被ふるしたからそんなよなつたのサ(倉)だうりて此  
 紋が團子然と大きいぞ思つたヨ。まかし五ツ紋でないうちが有難いトいひつゝ、紋  
 をつくぐ見て(倉)ヲヤ々々君の紋によつぽと珍奇しい紋だネエ(守)珍らしい  
 苦き外類なしたものを(倉)これやア何といふ紋だらう三ツ隣が抱き合つて居  
 るのだから假し命々て抱き隣り子(守)マアろんな事だらうヨ(倉)あんよしら馬  
 琴の小説かなよかなら古事采歴がありそりを紋だトいひまがらフワリ羽織を  
 ひつがたて(倉)ドウダネ男振が上ツたらうトいへば此方のねころんで新聞紙を

読みをから(守)やあがつた〜五錢ばかりあがつた(倉)エ五錢と(守)十二サ  
 洋銀相場がサ(倉)チエツ僕の男振を批評して居ると思やア洋銀相場あんがを  
 讀んで居やアがるそんなら失敬(守)ヲヤモウ直し歸るの待たまへ今葉子が  
 くるら(倉)葉子あんどいらいないトいひつゝ、隣て、煙草入を懐のうちへお  
 しこみ失敬の棄せりふを共に階子段を降んせまるよき以前の小女が二階口から  
 (小女)へいお葉子ト竹皮包と煎茶と共に日光製の丸盆のせたま(倉)ヲツトき  
 たり賢の山お入りながら手をむかしうして歸るも愚だ一ツ毒味トいひかけて竹  
 皮色の傍腹よりそみだして居る蕎麥饅頭を一箇とつて頬張ながら(倉)ムグム  
 とムツケイ〜トいひきて、急をいしごをぬけをりて避るがごとくに歸りゆく  
 (守)實にあされるへつた粗忽しい男だあまで社會へ出たら如何だらう兎角世の  
 中よの磊落を粗暴と取違へたり不羈を放縱と間違へたり。たねつうへりを活潑だ  
 と思つたりするいのを大膽だと思ふやうな見ちがひがあるよの困るヨまうし



然いふ御自分さまが。やつぱり世故一のお暗い方ごて。ア、兎角世の中の學問は  
 かりで渡られぬ世才といふものが肝腎だ。それゆゑと今日に限つて倉瀬が  
 忘れ物をしないうちがをかしい何か忘れるのが定式だが。せいでつゝ、フツト打見  
 やる。かたへお落散る一通の書簡はキツト目をとめて(守)ラヤ。お規則とや  
 りけふの書簡をおとしていつた封に感もあして暴露になつて居るが。一体出まの  
 う来たのを見てやうと手を取あげて右み左み(守)エ、ナンダ拜啓仕候。追  
 日炎暑酷敷相成候處。エ、此様を事いどうでもよい。陳者不肖。幾前週より  
 脚氣症に罹り起臥共。頗、困難を覺候故。一時休學致候。て只管治療に手を盡  
 居候處。何分にも果々敷快方。不立到殆當感。致候。儘學校附の醫師よりみ依頼  
 致居候も何とやらん心元。幾被存候故。本日醫學部病院へ罷越ドクトル「ベ  
 ルツ」氏之診斷を請候得者。同氏之被申候様。是、甚敷重症といふ。いあらねど。  
 療養其宜を得ざる時。或は衝心の患無きを保し難し。速に入院之上。專一治

術を施す歟否されば伊香保の温泉へでも入浴。致候方。最も安全の策也。と斯様被  
 申聞候。付情愚考を運し候。拮据勉學。餘暇無き身を以て優遊無爲。或は病  
 室。閉籠。或は藥泉。遊候事實。以て好母しうらむ存候得。共。將來大に爲ま  
 あらんとする學生之身。は衛生の事も亦最も。忍。難成義と。存候。儘贅澤なる  
 奴との御叱責を蒙候哉。も。圖難候へども。敢て御願申上候。何の事だ人を馬  
 鹿にして居やア。がる。此後文の讀まあいでも。あかつて居る。大方旅費の請求だらう。  
 ト。獨語をいひつゝ。四五行さき。英文を讀むと志るべし(守)ソラ。どりだ。何卒三拾  
 圓計御送附被下度。あれたもんだ。成程脚氣である。いと聞いて居たが。ピン  
 くはね。回つて遊び歩く事が。でたる脚氣なら。志れたもんだ。いくら金も困つたか  
 らつて斯んな大業な虚言を吐いて親父へ心配ををけるといふ。倉瀬も似合な  
 いた見だ。ナゼ日本人の斯様。自立獨行の志操が乏いだらう。遊びたければ遊ぶの  
 さい。が親父の脚を。あちつたり。慈母の脚を。うちらないで。自分の腕で遊べば能い。



實は膳ツ玉のケチを奴等だ。○それ母つけても合點のゆかあいの小町田だが思案の外だとか俗にもいふから世間の評判が眞實うまらん采いといつて置いとから遅くともモウ今時分に来る頃だが逢つた上で偽眞を質して(折から下より黄色を聲母て)(小坪)守山さん小町田さん被入まやいましたト告る間もあく階子段を下ンとと登り来るの第壹回の花見の章にて己讀者一知られりし小町田といふ書生にて名を察爾と呼ぶ少年あり。

○(小)守山君先刻の失敬早く参らうと思つた所が色々用があつてツイ(守)恰今待つて居たところだマア此方へ来たまへと小町田を招じて先刻の葉をの茶をついで出す(小)任那君(守)例の如く歌然去つて行く所をあらす(小)それじやアまた桶鉢山の上かふにかて演説の稽古でもまて居るンだらう(守)そんな事だらうヨ(小)あれらが眞の奇人といふのだ子エ(守)さうサマづ眞成の奇人だらうヨ然し奇人もさまざまでわざう奇人ぶる奴があるから外面を見た

をかりトやアさからないヨ奇人なら奇人のやうに不羈獨行をすればいいが中に奇人といわれるのを自分の名譽だと思つて居るのかわざう非常た所行をまたのを自分でなんだか自慢らしく風馳をしてあるものがあふ非常な事だと思つて非非常な事を行ふのならば是をもち平常の好事家だよつぽど一調子かえつた(小)やつぱり奇人じやアないか(守)アハ、成程さういやアやつむり奇人か然しさういふ似面非ある奇人のあんまり下さつと方じやアない○時は小町田君の島岡の送別會へ行かないのか(小)ア、何だか心持がとるといけあいから僕に斷を遣つておいた(守)さうか君をけふとわざう奇寄せたのの外で無が少々眞實に聞正したい事が有んだ今更改つて言迄もあいが君と僕とのどういふ因縁が有のかあらぬが初めて學校で逢つた時互に親しく交際をして恰ど今年で二年をかり陰陽をすし母情願を盡して恰も兄弟の様にしてきた事だが合點の



いかぬ君の舉動が此春以来がらりと變つて唯に學問を怠るばかりであく我輩  
 まで藏してをて何も打明てい言ひあいの事不思議だもつとも亞チソンが  
 いつた通り肚の中で思つて居る事をいももるいも辨別なくさら々だして打明る  
 の馬鹿のゑるし相違ないがそれ他人に對していふべき事で信友の上の事で  
 いかからう亞チソンも己にいつたトやないか信友と信友の諾のシンキングラウ  
 ドリイ〔肚を語る〕だト政略といふ字が流行だしてからの政治上も社會上も  
 無暗に政略といふ事が行われて甚しいの親父にまで政略を用ひるやつが  
 あるといふが實は馬鹿氣をつた事トやアないかボリシイといやア立派やうだ  
 がいひるへれやア手練手管で親父や親友の間に手練手管が行われるやうじやア。  
 世も末ふりといひざるを得ぬだ君なんぞのものとより政略を用ふる譯トやアか  
 らうが舉動の變つたおが一箇の不審だ想ふに何か人に言ひれない心配があるん  
 だらうもつとも心配があつたからツて君の精神上にたいした影響及ぶさなき

事であれを敢て關せざる所だけれど君自身ふの解らないうしらんが現在學力も  
 さがつたやうだし道理力もよつほど狂つて居るいつ中からいはう〜とい思  
 つて居たがあんまり面白い事でもないからけふまで逡巡して居た譯だがいは  
 れる事なら打明て僕に聞かして呉たまへな及ばずながら力よならうし又時宜に  
 よつたら意見をも述べやうらト眞實見をたる守山の言葉よ小町田のさしりつ  
 むさて居たりしが漸々頭をあげ(小)さう言ひれると實は君に對して言譯があ  
 いが何も別な藏して居る譯じやアないがちかごろまたブレイン〔腦髓〕が不健く  
 て(守)それやアいけあひ僕に其腦髓の不健くあつた原因が聞たい君の剛情は藏  
 して居るが我輩に己君の内實をしつて居るヨしつて居ながら聞くといふ何  
 だか解らない様だがマア氣を静めて聞たまへヨ君の全体謹慎家で所謂神經質  
 人間だからいくら思案の外だからつてあの繼原や倉瀬がやうな向ふ見すをま  
 入てぬない其謹慎な性質で居ながら五日と尻がすいらあいて兎角外泊をしたが





何事不為  
何事不為

小野田の生花  
 法笑乃胡了  
 小野田の生花

四十九



精神一

四十九



るの、あんまり不審な譯じやアないか風評だからわからないが負債もよつぽと  
 出来たといふし學校の評判のすこぶる悪し信友の身であつて見れば君の風評を  
 聞いたたびに僕が心外で堪らない。それやア僕一身の事だからもとより關つた事じ  
 やアないが君の家だつて大して金満といふじやアなし二進も三進もゆかなくあ  
 った時に家大人の耳へも這入るわけだが然なりやア大變な心配をうける譯で  
 …斯いへば何だか僕一個聖人ぶるやうだが僕だつてフホルリイ「をろかな行爲」  
 がないでぬあい君だから打明て話ををるから笑ひないで聞たまへ恰ど一昨年の  
 春であつたが三菱勤めて居る友人が三人ばかり尋ねて来て梅見に出掛やうと  
 誘つたので試験後の休課でにあつたし大賛成で散歩までかけ亀井戸うら向島へ  
 出て奥山の梅林へ這入つたの、恰ど日の入の頃であつた處が此三人の友人とい  
 ふのと頗ぶる洒落者の放蕩家だゝら是ざりて還るのも残念だ直ぐグウドブレ  
 インへ行かうじやアないかといひだしたのサ。その頃のうちの愚圖々々斷つて見

たもの、野暮をいえないでつぎやいたまへと無理やり引をられるし酒ふり酔  
 つてるし思ひで車にのつかつたとの表向で賣ひいつて見やうといふ野心が肉々  
 のあつたがサ勿論其時分に我輩も純粹をお坊さんで今より尚ほとんまんだか  
 ら彼方へいつても小さくあつて隅に引込んで笑つて居るばかり洒落も知なけれ  
 やア藝もなし身服の相應にして居たが誰が見ても純粹書生でエムがありさう  
 一の見えないの、どうした事の間違だか僕の敵媚の大層僕を手厚くして押客も  
 同様を取扱ひサ扱ひ是が所謂手練手管をいふものうと内々で探つて見ると其媚  
 妓といふおの恰ど一月前、出勤をしたをかりで殊に地方者だといぬ話ヨなるほ  
 どさうさいて見れば言葉も地方言葉をつくりだし取扱も何だか素人らしい乃サ。  
 其容貌のどうかといふとまづ丸貌の別品で年の十七の十八位性質もすこぶ  
 るおとなしさうだから僕も元来イロブロックス、ストーンズ「イー。ブロッツク  
 ス、ストーンズ」といぬお木石ふひとしき輩ヨといふ事母てシエクじやといふ英



國の狂言作者の臺帳のうちにある臺詞ありの仲間じやアあいから幾分う心が  
 動いた處が床へ回つてゐら其女と僕とさしむうひになると女がしたり僕の羽  
 織の紋を不思議がつて此御紋のお家の御定紋ですかと尋ねるから然だといふと  
 しばらくだんまりで何かいひたさうよして居るから僕もふつと心附いてソラ  
 つう君も話した若や妹じやアあるまいかと思つたらうれとなく迂曲は母親の  
 身の上を聞いて見ると私の小さい時うら慈母さんのおくで嚴父さんにをだてられ  
 たといふし故郷を聞けば三河だといふしあんまり方角が違つて居るうらマサカ  
 上野の戦争で母親と一所見失ふつと妹だとも思ひれないのサ殊に慈母さんを  
 一所居ない所を見れば全く他人かと思ひれるし又二ツに其晩をじめてあつ  
 た女だから何だう押して聞くのも間があるしツイそれなりにしてしまつたがあ  
 んだか心がすまあいうら其晩床にもはいらす連の友人に偽言を吐いて夜中ふ  
 別れてかへらうとすると彼が頻に僕をとめて是非泊つて居て呉るといふのと

やつとの事て振拂つて店の階子段を降かゝると後うら送つて来て是非承りた  
 い事があるゝ是非モウ一度来てくれるト是非を三ツ四ツ重ねていつた歸る道  
 も歸つてからも若しや妹じやアあるまいかと思ふ妄想が残つて居るゝらどうし  
 ても氣をはらむマ、ヨもう一度いつて見やうとそれから四五日たつた後母た  
 つた一人で出掛た所があんまり早く出掛たので日がまだ面は沈まないのサ明る  
 いうちから登樓するの何だかさまりが悪いから奥山の中をぶら／＼して人形  
 あんぞを見てあるとあるとある活人形のまね死に宮城野信夫は黒屋の幕ができて  
 居たのサ是に於て乎僕大に感ずる所ありつく／＼と考へて見よ所が同胞對面と  
 いふ事のむうしからよといふ事だが到底大方に假作話で現實にあるの稀ある  
 とだ慈母と妹も別れたの己にことして十四五年人手と頼んで探したのも幾  
 度といふ事をしるゝ又新聞へも廣告をしたがそれですらしれあひ人が俄に出  
 て来やう答はないそれも舊幕の頃であま探鑿が行届かないといふ事もあらう



が金があるまゝ金あるとして其筋の人にも依頼をして七八年来さがしたのが無効であつて見れば母親も妹も流丸で死んでしまつた。相違ないそれが恙なく存命で居て娼妓なるつて居やうなどゝ俗に所謂心の迷ひで架空癖(架空癖といふ昔の小説や艸冊子にあるやうある世の中)ありそりよない事を實際に行ふて見たく思ふ癖をいふなり)の甚しむものだと漸く心が附いて見ると我ながら私取(私)りしくあつて早々下宿へ還つたが子考へて見たまへ若此時(若)我輩(我輩)が架空癖の奴隷となつて其女の處へ行たもんあらうれこそ劍呑きはまつた話さ何故かといふに其時分に月々家父から十五六圓位宛學資を貰つて居たり月二三度遊ぶ位(度)のどうとも融通がつく計じやアない先方の接遇が手厚いとさて居るうら万が一ツ其女が妹であれば兎も角も若し妹であつたにしろ肝腎の慈母が一所に居ない事(事)りうがたしどよしや其女が實の妹であつたにしろ肝腎の慈母が一所に居ない事なら暫らく探鑿を猶豫して置いたうらつて大して不人情といふ譯でもなからう。

殊(殊)ふ娼妓も往昔と違つて由自營業の有様たりら今直(今)身脱(身)の手助をしてやらすともさまで難儀でもあるまいかと斯(斯)う自分極(極)に定めたのも舊幕時代の社會とちがつて今(今)何事(何)も自由だから假令三四年たつたればとて其女の行術(行術)がわうらなくなる譯もないから一本立(一本)となつた上で更(更)に先方(先)へ尋ねていつて聞正(聞)しても遅(遅)くはあし又その前(前)身受(身)をされて墜氣(墜)の人間(人間)にあつた事(事)なら彌々聞正(聞)すも便利(便)に佳(佳)し兎角急(急)ぐの無益(無)な事(事)ごとやつと心を抑(抑)へ附(附)たが其ストラツグル(「く(く)るし(し)み」)の(の)大變(大)だつたあか(あ)く今(今)こゝで(で)話(話)をするやうじやアあつた(小)へ、イ實(實)に奇代(奇)な事(事)もあつたものだ子(子)エ。しかし其娼妓(娼)のほんとうお君(君)のシスター(シ)かもしれない羽織(羽)の紋(紋)を不審(不)がつた鹽梅(鹽)から手厚(手)くした具合(合)なんら(ら)實(實)に不審(不)中(中)に不審(不)じやアあいか(守)君(君)さへ不思議(不)がる位(位)だ(ら)實(實)地に臨(臨)んだ吾輩(吾)の不思議(不)がつたのも無理(理)のないテ。しかし小説(小)にあるやう(う)に貌(貌)に天然(天)のしるしでもあつたと(守)守(守)袋(袋)の中(中)に黄金(金)の像(像)でもあれむちつと(當)あるはなしだが何(何)をいふも。



俄急の騒動で別れたのだから何様物を持つて出たのかさつぱりこちらに在様  
がないから慈母が居ないで見ればどんを偽をつうれても為様なし最も守袋の  
古錦爛の截片でこしらへて始終シスターの腰につけてあつたといふ言だがそれ  
望てもおとしましたといはれりやアそれきりサ生中下手お口を叩いて女天一坊  
でもしよいこんでハハザア一対しても社會へ對してもあんまり体裁のいふ話  
トやおいテハハハ(小)なるほどさういやア然だけれど何故家大人へ其事を話さ  
なるつたのだ君が自身で居れやア惡からうなれど家大人にさせやれア危険な事  
もなからうじやアあいう家大人がよもや其女に迷やアしまいハハハ(守)ハハハ  
それやア然りサしかし場所が場所だからどうも家大人に話しかねた又二ツの  
親父の吾輩よりも斷念がよくつてマザアとシスターの己に死んだものと極めて  
しまつて其命日母の法事を行つて居る位だから今時分こんな事といひだまど却  
つてお眼玉を食ふべりだ。○想ふにマザアとシスターの親父が考へて居る通り。

死んでしまつたに相違ないが。いまだに妄想が残つて居ればこそ其女の名を覚え  
て居るヨ(小)何様の誰といふ女だ子(守)角海老の貌鳥といふ。孔子の血氣盛な  
るときに之を誠むるに色にありといはれどが我輩の考案でハ架空癡にありとい  
はざるを得どだ兎角少年の中ふの小説稗史もあるやうおロウマンチツク「荒唐  
奇異」な事がしたいもので。うまが爲に遂に一身を誤るおとがあるヨ下等の動物  
と同じやふ母肉体の快樂に耽るのに飽けを止めるといふ事があるが。アイデアヤリ  
ズムといふ事の素が無形の想像だから年をせつて實着る子見か浮ぶまでの決し  
て厭倦がくるものでない。愈呑る所以益しこゝにあり。と言ふべきなりだ。想ふよ  
君の迷つて居るのもやつぱりアイデアヤリズムに相違ない我輩がウ井イクス  
「恥」を打明て話したから君も打明て話したまへ今までの我輩がいくらか原ノ口  
れ位置にあつたが。これからの君が原ノ口だ甘んじま被ノ口になるうら。白状し  
てしまひたまへト歌謡言葉の其中にも實意を含まじ意見の端々げよもと悟る小



町田察爾のしばし頭をうなざれつゝ面を赧めて居たりけり。

第四回

救護も絶えて涙の雨の降つゞく。

小町田の豊作不作

小町田のやうく頭にあげ(小)然う君にいはきて見ると實に面目ない次第だけれど實はいろいろと敷雑つた事情があつて(守)それを我輩が察しあひつておの謹慎深い君の事だもの理由がなくつて迷ふ譯のない我輩が裁判官よまつて事の當否を裁判するから。マア兎も角もはあしたまへ(小)僕の語り君の話と違つて大變よくだくしいうら君が体屈をするだらうが。マア聞て呉たまへ。フハザアの身の上から話すから。トいひつゝ茶碗を引よせ茶をさきくと斟たゝへて。やをら舌をば濕えたり。

作者いはく以下の話譚ハ小町田察爾が守山への話なれども小町田の言葉をもていはしめての充分其情實と述つくしがたさおそれあり殊に文の冗

長よなり行むむかとおろるゝ故にわざと平常の物語のやうに寫しだしぬ。今のむかしとありぬ白山の御社のやとりよ小町田浩爾といふ人あり維新の際に些少むりりの功績あり且貴顯の方々も知る人多くて官海に電信すくあらねばいつしるさる省へ召出されつさしたる才能のあるよもあらねど平比俸あまた賜りつゝ過分の榮華に耽る程に妻妾共緇布ぐるめ春の花夏の納涼と遊びあるきて外面を飾る黒塗車あくまで富裕に見えながら其内幕は火の車まじしなられぬ苦しさを外に見せじとかりその借が高じて高利さへ借入るゝやうあり行たての年々歳々借財のみたゞいやがへよ増かみみ清く負債を返却べき見込の絶えてあらざれどを浩爾のすこしも動する色なく泰然として日を送りぬ。

○時しも十一月の末つめた二月の花をあざむく紅楓葉をやうく散ゆたて四面の霜枯の冬景色ひつそりとした田舎の詠りまた一層の事なるべし幸ひけふの日曜して天氣も頗る暖和なれば残の楓葉の遊覧かたゞ運動のため散歩をなさ



ん誰か一所に参らぬかト主人の言葉に權妻お常(常)それじやア坊ちやんと要  
 をお連おすつてト言受して早速用意を整へつゝ小町田浩爾其子察爾(此時  
 年十三歳あり)と權妻のお常を携へ人力車にて飛鳥山の麓までゆきと其處  
 より人力車をうへしてぶらりぶらりと瀧の河の邊をそゞろあるきしてやをら權  
 現の石階をば降り果たる其折しも板橋道の方よりして此方をせして来る者あり  
 但見れば年の比にまだやうくは七歳敷八歳ばかりの女兒あるが身よ綴合れ  
 布衣一枚のみを被て足袋も穿かねば舄履もなく跣足にて来るありさまこゝらの  
 村の女兒とい見えを旅するものと子供を其舄履たる様子よてもまづ大概の  
 知らるゝゆゑ可愛そうにと女氣のお常の覺えす立どまりて又つらくと打見や  
 るに其爪端もトんじやう母て憔悴とまじも鄙しからむ日よやけれどもあて  
 かある容貌といひ目鼻といひ愛くるしきこと限なきお常のそゞろに立ちぬ  
 へて其方のこゝらの村の兒かまたの餘所うらきたのかト馴々しげに問ひよれば

女の兒は此方へ振かへりて大人やかふ會釋となし(女兒)イ、エ私にこゝらの  
 者でございませぬ桶川の方からまゐりましたといふはお常のいよく不審り  
 (常)それじやアおまへに連の人達にはぐれたのかへ(女兒)イ、エ初めから一個  
 です(常)エ一個で来たのだとへそれじやア嚴父や慈母のナゼ一個ツきりてこゝ  
 らへ来たのト問へば女兒の不審さうよた常の面をうちまもりて(女兒)私にも  
 とうら嚴父も慈母もありませんといふは傍に聞居たりし小町田浩爾も訝りつゝ  
 覺えすうたへに進みよりて(浩)妙なことをいふ坊だお其方の家父のいなのか  
 (女兒)ア、(浩)うれしやア慈母の(兒女)おつかさんもおつかさん(常)をか  
 い子エそれじやアをまへの今まで誰よそだて、もらつたのだへ(女兒)むあやが  
 (常)十二老婆だといふの老婆は今何處に居るの(女兒)お寺のお墓のなかトあ  
 といひさして泣出し面を掩ひてふししづむ女兒の姿のいちらしきお浩爾のお常  
 と面見合はせ覺を哀を催しつゝ、又改めて尋ぬるやう(浩)坊のなんで一人ツきり





王子ノ社ノ前ニ小町田  
 乙女ニ逢フ  
 此画ハ祭典再ガ  
 友芳ニ物話レル  
 昔時ノ様ナリ





て出てきたのだ。そして何處へ行くのだ(女兒)東京へ参るのでございます(常)東京  
 の何處の何と云人の所へ行んだへ(女兒)神田同朋町の大王で源作といふ人を尋  
 ねてまいります(浩)其源作といふ坊のしつてる人か(女兒)ハイ。一年かもし達  
 ひませんけれど老婆の親類でございます(常)トヤアなんだネ其大五さんの所へ  
 尋ねていつておまへの世話をしてもらふつもりだ子。トいへば女兒のうまづきつ  
 、尚不審さうよ。浩爾とお常の面のみ見つめて居たりけり。ね常の頬にあはれをも  
 よほし(常)子エ檀那かあいそうな子トヤアありませんか。お宅までつれていつて  
 おやんなさいな恰と明日あたくしが下谷へ参りますから神田まで送つていつて  
 やりますから坊やおまへのお晝のおまんまを喰たのかエ(女兒)イ、エさのふの  
 夕がたふ晝を喰たばかりです(常)エさのふの夕かたに喰たむかしだとへうまト  
 ヤア昨宵の何處でとまつたの(女兒)しらあゝ家の軒下で(常)ヲヤママ可愛さ  
 うに定めしお腹がまいたらうねエアノ檀那つれていつておやんなさいな(浩)賢

ふ可愛さうな事どのふどうせ扇屋へ寄るからあそこで何か喰さしてやらう何か  
 曰くのありそうな身の上だるら其方よく聞正して見るがいと。コリヤ黎爾々々何  
 と惡戯をするんだ。うこの樹木を折ると巡查がやかましくいふぞ。サアよ早く  
 来を早く来をト散のこりたる紅楓の枝を折取つて居る黎爾を呼たて。お常と共  
 女の兒をつれ。やをら扇屋の店へいりぬ。  
 ○うてく扇屋にて食事をなし女兒母も物を喰させ杯す此女兒の桶川の者やにい  
 へど動作もしとやかにて言葉遣ひも鄙じからむ何處となく上品なるに定めし  
 由緒のある事ならんと浩爾も思へばお常も思ひて其身の上を尋ねとへば女兒の  
 すこしも藏をことなく片言まづりよ物語れる其来歴のいうよといふよ時しも慶  
 應四年五月某の日の事ありけり桶川驛の棒端なるある一軒の家の前に聲あるよ  
 まで泣叫ぶ稚兒の聲聞えたり尚拂曉のことなりしが其家の主人といふに齡五十  
 ばかりの老女にて年比洗濯針仕事などをして微かに其日を送る者ふて年老ひた



るまゝ目醒も早く此號聲は不審を抱きて表の雨戸を押開きつよよく見ればこ  
 はいかと思ひうけざる一個の女兒の年まご三歳ばかりと思はるゝがおのが軒下  
 一卧たふきて聲を限り哭くなりたりも此老女の頗る慈悲深き者なりければあ  
 ら不便やとして其女兒を急ぎ家のうちへ抱たいまづさまぐすかしく慰めつゝ其  
 名親の名を尋ねれども片言のみにて諱からず守袋までもあらばト探り見れ  
 ば衣類の立派あるよも似ず守袋やうの物だふおし身装も貌容も上品あれば由  
 ある人の愛子ぞとの私に推察なすものうら知らせてやるべし便あつればたゞ拾  
 ひ得し趣のみ其筋の方へ届々置きて女兒の其儘に家留めて單身なるまゝ此  
 女兒を孫の如くいとをしみて假し其名をお芳となづけていとまめやゝ養育  
 つる程にお芳もいつしか成長してはや十歳とありにけりこれより二年ばかり先  
 つ年より老女の中風といふ病にゐりて起居もむかしの如く如意ならねばあ  
 りの人のすゝめし隨ひ某といふ養子を迎て老後の扶といふおしたりけりしめる

に此年(お芳が十歳)をりける年(の春の頃)より老女の病重りて七月の末旬  
 かたは竟し他界の人となりぬかこりし程に養子某のもとより老女が此年米三四  
 十圓の貯蓄をばなしたる由をば聞知りつゝたゞそれのを目的として其養子と  
 いなりとるとゆゑ老女が俄に病死せしをうち喜ぶこと大方ならむ野邊の送りと  
 いまづかゝ式ありのみ取行なひて老婆が死去せし事の由に親族へだも知らせ  
 ずしてかのれれ只管淫酒にふけりて老婆が年米丹精して貯へ得たりし三四十圓  
 をば三月あまりに費用をてぬか、りし程ゆゑお芳をも餘計な厄介者ありとて出  
 入ごとく口きたなく罵り叱りて虐使をれど便なき身のうなしさにい出てゆくべ  
 き先おければ小さき袂にせきあへぬ涙は冬にひゞ痕の肌絶ゆる間ぞおき其あ  
 はれさを近隣の人がさすがに見るに堪へかねけん彼の某が出あるきて家にあ  
 らざる折なんどの三回も四回も時の食をお芳に得養で家にあるを問ひ慰めつゝ  
 食物などを窃に贈るも多かりけり斯く余所人が陰へまはりお芳をいたはり養ふ



ことをば彼の某も知るといへど故意と知らざる面地してよきことにして出  
あるさつ冬氣ふなりても布子一枚お芳に與へて被せもせず袁彦道など一身を持  
崩しまけて歸まば口汚なく罪なきお芳を叱り罵り果らうちた、く無理折檻御免  
く、と泣きけべ、エ、やかましいと猿ぐつは物置小屋におしこむなどおとまげ  
もなき無慈悲道の悉皆本氣沙汰でないト、の結局の貸坐敷が曖昧茶屋へ達  
る、の、今から知れとる彼兒の行末可愛さうなト老婆氣の或人々が入智恵して  
小使錢などひろる、與へつ此月の末つかた(お芳が小町田親子に逢ひし月あり)  
死したる老婆の弟おにて今東京の神田に居る源作といふ大工の方へ一伍一十の  
米屋をば書しるしたる書面を添へひそか、落しやりたりしが、お芳の元米年、の  
ませて、いと利發なる性なれば心細く、思ひおがら心決定めて立出つ、覺つかお  
くもたどり、今日王子まで来りし由を思つざあへを物語れば、聞く事毎、一浩  
爾とお常の或、あはれとあるひの感じ其薄命を不便がりてほと、見捨がたさ  
思あり殊にお常の先刻より眼を真赤にして聽居たりしが、此時覺えず膝を進めて

(常)ほんとうにお前は薄命な兒だのう實の兩親、の棄られるし、お婆アさん、の  
死に別れて、無々心細い事だらうが、おあらす心配おしでないヨ、斯して妾がお前、  
逢つたのも何かの因縁の有事で、他生の縁とやらに相違ないから、妾が出来ただけ  
力、なつてあげるら、ヨ、ヨ、心配おしでない。アレサ泣く母、及ばないワネ、若し神  
田の叔父さんとやら、居あいやうなら、檀那さま、お願ひ申して、妾の手元お置い  
て、世話をして上るから、ヨ、ヨ、安心しておいで、ヨ、ト、いひあぐさむる、信切を聞居るお  
芳、の地獄にて、佛、あひし意外のよろこひ、嬉し涙、かきくれて、伏しづみつ、伏お  
がむ、其、いぢらしさを、傍見せし、まど小供氣の、察爾、さへ、かあ、いさうなと思へばこそ  
おのが前、ある口取の肴を、彼方へおし向て、是をも、喰ふト取て、やる甘なつ、とうの豆  
々しき、其、まごころと五分切の蒲鉾よりも、尚厚き、深き情と、おしいた、くお芳のよ  
ろこび、いゝばかりぞ、斯て、其、日、お芳と將て、小町田親子、にお常、共、一、誰、被、まへ



一、家よりへりて妻も事の理由をしらしつ、祭爾が古小袖を取いだして急におれ  
 を仕立直しお芳の布衣と被かへさせて其夜の我家よとめおきけり去る程に其夜  
 もいつしうに明はあれて午前八時比とありける時權妻のお常にかねて宿下の許  
 容を得たりし事のゑそこ、用意を整へ彼のお芳と引つれつ、人力車まで  
 立出たり素おのお常といふ下谷敷野屋町の藝妓なりしが先年小町田浩爾が賣  
 おりみて竟に根引して其妾といふしたるなりけり其父母の維新前よ世を去りて  
 只一人の兄ありしのみ其名を全次郎といひしが若き頃より放蕩者よて不良行爲  
 もしむしぱありしが夢喰ふ蟲も嗜好々々にて下谷の豪商およがしの園妾が人し  
 れを全次郎といひかひして一人の女兒をさへ産みたりけりさのあれ豪商のこれ  
 を覺らで我種々のみ思ひとりて愛鐘みて養育つることはや三歳ばかりあり  
 ける時俄然上野に戦争起りて鐵砲玉の雨霰ふりかゝりたる不思議の災厄上野  
 最寄の町人等の上を下へと混雜して彼方此方に逃げ迷ふそが中よ全次郎は無て

約束せし事ありし敷妹お常を見もかへらずひとむしりよ彼の園妾の家ふかけつ  
 け此騒動を好機會よ目ぼしき品をかきあつめつ手早く風呂敷よ引つ、みて彼園  
 妾の手を引つ、何處ともなく落行きしが妹お常は取残されて逃場に迷ふ周章狼  
 狽己の命も危ありしを人の情よ助けられて早く淺草の親族の許まで落延つ、死  
 ざることを得たりしうど兄の行衛を案じりて戦争全く終りし後人を依頼みて  
 尋ねさせしお谷中道の古木の蔭よて其死骸を得たりしとして一箇の大きやある  
 風呂敷包中其遺骸をかたもて来るよお常は悲しく淺ましとして聲をも得あげ  
 ずふし沈むを人々が慰めてまづ其包を開た見れば絹布類衣類あまたありて飾  
 釵とも包み込たり全次が家にあるべきものとも思われねばお常よ問ふに知ら  
 ずと答ふさては無々風評ありし彼の某の園妾をつれて走らんとして殺されし  
 敷棄ておくべき事よあらずと豪商の方へ知らせやりしよ彼方ははじめに園妾の  
 不埒をこゝよ曉るものうら人々が正直あるをめてよろこび衣類をどの悉皆押も



どして其手元への置きも留めをお常をばじめの人々へ感謝せしむるとして遣はしつゝ、また田舎の行術を求めを其儘ふして打過けり。かくて後お常は下谷徒士町なる常磐津師匠にまがし、賞はれて其家お養女となりしが年頃となるまゝ、容貌も醜からね、竟に數寄屋町の藝妓となりけり。明治四五年の頃なりたり。この皆過し年の物語あり。

○去程は權妻お常は亡兄全次郎より似も附せ心やさしき性質なればおのが往時お思ひ比べてお芳が薄命をいたく憫れみいかで難儀を救はばやと思ふ心の切なるから頻に車夫を急がしつゝ、まづ下谷の徒士町なる養母の許にいたりつ時侯の挨拶果たる後お芳が身の上を云々と物語りて更は其處にて人を頼み神田の方へ赴かじめて彼の源作とか名を呼ばるゝ大工の住居を尋ねさせぬ。しむらくありて使の者の歸り来りていひたるやうお尋ねおさる大工源作といふ男は昨年まで同朋町にて細き煙をたて、居しが昨年の年の暮は女房が俄に病に罹りたゞさ

へ苦しき瘦世帯はいよ／＼苦しうあつたるより不良心を起したるものか。こゝろしこゝろて窃盗を働いたことが忽ち直に二局へ送られしがそれやこれやで心配せし病疲れたる女房の病はますます重くなりて程なく他界の人となりしがさるべき親類もあらざるゆゑ近所お人の周旋にて葬式たゞいましましたれど住居も元來借家にて財産とても大方は葬費の補助お費拂ひて残りし物の一箇もなし。て源作は近きころ懲役の期が満たるゆゑ赦免されしといふ事おれども今は何處に住居るや。同朋町へいさまお取てや面出しおさるから絶えてしらすと斯のやうに其町内の老婆たちがいひれました。ト物語るを聞居るお芳は淺ましくまた悲しき覺えをもワツト計は泣出をを常親子の道理ぞと思へば不ばさいやまされてさま／＼慰問めつゝ、便と思ふて尋ねて来た其おちさんに逢はれぬゆゑ心細いも道理なるが。おならす心配するお及ばぬ。おたしが附て居るからい。おるいようはせぬ程は。大船に乗つた心はなつて。ジツと落着て居るがよいよ。



しやおぢさんに逢つたればとて。そんな苦しい瘦世帯へ世話をなされたもれでも  
 おし殊ふに貧にせまればとて。窃盗なんかをするやうお頼もしくおい人のうちよ  
 居るのも安心のできぬをなし。これから直に宅へかへつて檀那にとくとお話して。  
 其方のまたしの妹にして。これくら世話をしあげやう。キナ、思ふよ及ばぬ程  
 母其泣見をされいよふいて檀那よお目よか、つたとた。メソ、してをありませ  
 ぬぞ何かを要事の残つて居れどちつとも早く此事を檀那に相談して見たけれ  
 ば直とおいとまをいたしませう母さまちつと御遊びよト親子中ても義理あれば  
 さすがに世辭もゆふ間暮かゝるしきうれしきさませて泣しづみ居るお芳をはげ  
 ましその日お白山の屋敷へうへりつ扱しかく、と事の由を主人小町田活爾に語  
 りて頻にお芳を憫然がりて幾妹よしとひとひいのれを活爾もたやすく承諾さ  
 つ、まづ人をして桶川よはしらせ其假の兄なにかし、對面させて養女に賞ひ受  
 けたき由おもてむきにいひ入れさせし、彼方の元來もてあぐみて追ひいたしと

さ程なるゆゑ絶えて異議などいふべくもあらず。速に承諾さしが後、故障など  
 いひいでなば頗る面倒あるべしとて金子幾千かを差遣ひし。全く兄弟の縁を切て。  
 お芳を此方へ賞ひ受々つ其筋へも届々置たて。お常れ妹分として養育する程にお  
 芳ハ不思議の幸福よて良家の子となりたりける其喜びの如何なりけんよむ人み  
 づら察したまへお芳の年尚おさあ々れど年におまして利發なるに性質もまた  
 純直あれば子心おがらも小町田夫婦并にお常をわが爲よ大恩人ぞと思へるか  
 ら心を盡して忠實々々しくかじづくさまのいちらしさよお常のますく不便が  
 りて閑暇あるま、三味線胡弓又の踏舞をもならはしむるに何をさせても合點早  
 く且記憶もさとき方もお常のいよく感心して實の妹も及ばぬ程よ日毎に根  
 よく教へしかむ。二月三月を経しのちに酒の席へ呼ひごしてお常の地誦よて踏  
 舞を跳らせ客にも見する程となりぬ。祭爾に此比漸々一年十三の折ありしが岡ら  
 せ妹を得たりしかむよき遊敵でたりとてうち喜ぶこと大方ならず小學校よ



り歸り来れば必らずお芳と共に遊び縁日などへ赴くにもかゝらざお芳と共にいでぬ睦むきことなきながらに眞實の兄弟に異あらねば知らざる者のお芳をしも養女なりとい思ふに稀あり兎角をる間ふ月日移て祭爾の十五歳お芳の十二歳とありける年活爾が奉職せる官省にて烈しき改革の行はれて官吏おんどもそれが爲に免職となるも勢からむ小町田活爾も此年までと數度の黜陟にも震殘されて無異あることと得たりしかと素が舊幕府の人間にて此日新の時節柄に適當なしたる人材ならねば老ひゆくまゝに權門貴紳の愛顧をえれきの引力さえ次第々々に薄らぎけん此度の震災をば得も免れぬ兎に似たる文字かきたる書付を得る身といなりぬかへりし程は憫むべしこのふの榮耀にひきかゝて屋敷も他手に渡し書生のさら下女下僕まで俄にいとまを出す程ゆゑ飽きも飽かれもせぬ中おれども權妻お常も其意をしらして若干金の離縁金を與へて永のいとまを違はせしわか芳がちやうど十二歳の秋の末つゝたの事なりなり斯て後小町田夫婦の白

山の邸を賣拂ひて二人の子兒を引連れて駒込のほとりへ轉移しつむうしよの似ぬ借家住居し質素を旨とくらすものから坐して食へば山々の費用かきむならひなるに決てや田米借財あり月々毎はたらるゝ利子を拂ふに困はて、耻を思ふの違もなく所々方々と奔走きて再び官途に登らんとてむるしに人に依頼れし吾身おがらゝ今いたゝ人を依頼の奔走三昧其度毎に御見舞のしるしまでと持参する兼子に折の名のあれど禮服着用出頭の折にさつぱり内義まで別て依頼のしるしとして浴衣一反贈りたる其効能も水引の結び損敷やうちつぶやく移ろひぞめし關寺の小町にちおむ小町田が運の末こそ是非なれ兎角して一年あまりを過るほど或人の周旋にて某銀行の属吏に傭はれつ十二三圓の給料をば月々得る身とはありしがさねとて樂なる活計はあらねば妻がはるおき内職にて足ぬがちな入費の不足補ふ瘦世帯苦しき今の身の上こそ身し學問のなきゆゑなれた。僥倖をたのみとして榮華に飽きし一生の不覺なりきと漸くに悟れ



びむるし恨めしくせめて我子の榮爾より飽くまで學問を修行させてよしや官途  
 一統うさるとも糊口の道より掛念のなき博士學士よあさまほしと思ふ心の切な  
 るゆへ苦しみ中よも融通して榮爾が十五の春よりしてある英學の私塾に通せ  
 其勤學を獎勵せる父と母との恩愛をば子供ながらに推測れる榮爾の一向勉勵し  
 て稍學力も進みしかば十七歳の秋といふ頃ある大學の門に入りて修學おこたり  
 なうりたり扱もまた權妻お常のおが里方へ歸りたりしが其養育の親なりたる  
 常磐津某といへる老婆の家業がらに珍らしくまづ欲寡き性なるるらお常が  
 檀那を失ひつゝ、空しく歸り来りしかど今までお常にみつかれたる義理さへあれ  
 ば心よくお常を我家へ引取つゝ愚痴も小言もいわざれどもさりとして樂なくらし  
 母あらぬを粹の果としてとくよりを悟るお常が心の切なさやうやく斯うと思案を  
 定めやがて母親とも相談してむかしゆかりの人々より多少資本を借うなつゝ、幾  
 んどもなく數寄屋町へ自前で再勤のひろめをなし、へい今晚のと若返る新橋風の

大島田其名も小常と改めつゝ昔とつたる撥先にて客の調子をとりがなくあづま  
 の客に西國の野暮な客人もおもしろくそらさぬやうに遊べる粹な小常が腕前  
 の評判はつとたちまちに得意もあまも出さしうば小常のある日久潤にて手こや  
 けなどを用意なして小町田の許へ音信つゝ、別後の安否を問ひたりしに此年夏の  
 初候(是れこれお芳が十四歳の夏の事あり)よりして小町田の妻の肺病にて重き  
 病の床に卧して枕もあがらぬ有様ゆゑお芳一人が甲斐々々しく勝手元ら看病  
 までいと實意なたち働き夜もとちぬふ内職わざ小腕ながら小町田の糸繰かへ  
 しいたづらにむうしお返を由もゑると暗たランプの陰ながら思ひしるゝ、兒心  
 と思ひのおなと小町田かむかしよの似ぬ二子の袴腰辨當の日勤の日の欠ねども  
 月々の仕拂資はかくばかり以前の榮輝の報罰にて今尚負債は責らるゝ泥は息つ  
 く小鱈の苦勞さこそといよしへ思ひくらべて御笑止やと藝妓小常の覺えども  
 涙に袖を濕せしがそれより後の時々に小町田の許を問ひ音信れ辭するをさうぞ



幾何宛花客の祝儀の裾分にお芳坊への寸志の襟代檀那さまへ内々にてお前が納めておけばよいといふに律義を兒心をば見ぬいと小常が使氣なりかくて其年の冬に至りて妻およがしの養生かなあど竟に位牌とありにしかば浩爾察爾の愁傷にさら也お芳の母も別れしごとくよ力を落してうちなげくを小常をはぐめ人々がいろくさまく慰めつ、浩爾親子に力を添へて其野邊送をすまじおどまさらぬだ母不如意なる活計がこれより又一層いと苦しげなる有様をば小常のさすがに見過しかねて百方浩爾を説こしらへいらうを聴うぞ無理強よ竟にお芳をひたとりつ、おのが妹分の名前にして名も其儘よ小常と名宣らせ難技のひろめをなしたりしは是翌年の春の事にてお芳が十五歳の時なりけり是しかしなから致心にて斯やうおしたる譯にておかく全く浩爾が此折しも四五十圓の負債の爲に願る急迫おしたりしを救はんための義心と聞えし去程にお芳の難技となりし後もしばしば小町田許問ひきたりて安否を聞くとを樂とし其度毎に手みやげなど心ばかりと持参するを浩爾の結句因はて、ある時小常よひひけるやう昔の恩義を忘れおいて斯して折々尋ねてくれるの實よ喜ばしい事であらむといふ、そなたの今日で小常の家れ女にして籍もあちらへ送つた事ゆへ余にさつぱり縁のない斯いへ何とやら瘦我慢の見識め々ど小町田浩爾のこのごろで女は藝妓のかせぎをさせそれで生計をたて居ると人にそしらるゝも心苦しそあもあまりたびくしげくおれの家へ尋ねてくれは義理あるお袋が思ひ辭めて貨物でもしをくるかと疑ぐらあいともいはれぬ道理賢の子にまをとなたの事ゆへあひたひに余も同然あれど一旦縁を切た上の度々ひきよせるの條理であるまいそなたもこゝを合點して只たまさかに音信をして、といふの一ツの小常への義理どと悟る利發の小常それより後二月たき又三月目に音信して其真憤をあらわしたり叔此頃より小町田浩爾の運もやうやくななりしやぶるに債財も大方に濟し盡しつ加之俸給さへ月々二十圓と増されしは家計もさ

やげなど心ばかりと持参するを浩爾の結句因はて、ある時小常よひひけるやう昔の恩義を忘れおいて斯して折々尋ねてくれるの實よ喜ばしい事であらむといふ、そなたの今日で小常の家れ女にして籍もあちらへ送つた事ゆへ余にさつぱり縁のない斯いへ何とやら瘦我慢の見識め々ど小町田浩爾のこのごろで女は藝妓のかせぎをさせそれで生計をたて居ると人にそしらるゝも心苦しそあもあまりたびくしげくおれの家へ尋ねてくれは義理あるお袋が思ひ辭めて貨物でもしをくるかと疑ぐらあいともいはれぬ道理賢の子にまをとなたの事ゆへあひたひに余も同然あれど一旦縁を切た上の度々ひきよせるの條理であるまいそなたもこゝを合點して只たまさかに音信をして、といふの一ツの小常への義理どと悟る利發の小常それより後二月たき又三月目に音信して其真憤をあらわしたり叔此頃より小町田浩爾の運もやうやくななりしやぶるに債財も大方に濟し盡しつ加之俸給さへ月々二十圓と増されしは家計もさ



すけは樂まふりて妻が病死の時分より暫らく休學させおきたる翠爾をふた、び入塾させつとめて修學させたりたり後一年を経て今年春の二月といふ月(すなはち翠爾が飛馬山ふて田の次に逢むたる年)藝妓小常の年も己ふ三十の坂を越たりしかば三味の手前も耻かして業を廢さしつけ妹分小芳を二代目小常と名宣らせ大妓として押出せし母姉にもまして評判よく小常々と四方よりくる最負の口々取まるとしうら容貌まで故人澤村田の助の寫真だくせもてはやしつある半可なる通客が洒落て田の字と呼びたりしがいつしか普通の名前となり茶屋のすゝめふおのれもまた竟は田の次と名をあらため客の機合を取あしおぬけめなだうき流行妓全盛たぐむなかりけり。

○(小女)ハイ守山さん御晚餐トいひつゝ唐突ふ二階口から膳をさし出さ守山は一驚して(守)ヤ何だモウ晚餐か○ライくお客さまの分も持ってくるんだ實は氣のさかぬ奴だトつぶやきながら小町田に向ひ(守)ドウモ實は君の履歴の稗史

小説にありさうなことをしだ子チツタア附會があるだらうトいわれて小町田は打笑みながら飲かけたる茶をのみほしつ、(小)ナア二階ヒクシヨン(つくりこと)の毫末もなしサイヤニ長いうら定めて君の体屈をしたるうけれと今をこしだ聞てくれたまへ是うらが僕の昆フヘシシヨン(懺悔)サ實はいひかねる次第だけといひかねるの矢張ウ井イク子ツス(未練)だと思ふうら思ひきつて君よをなして將來の潔白を表白する僕のプレツジュ(質物)おしやうと思ふが(守)ライト(詢佳)それでこ君だ(小)そんな動煽ちやアいやだ(守)おんの煽動もんか真成にさうせやアおいのダが待たまへヨ今一サツバル(晚餐)が来るる飯を喰つてから聞うトやないかライく飯を喰はく○ヤア何だ今日の菜ハハア茄子の鴨焼の下宿屋先生イヤニ洒落たお小町田君これを喰ふか(小)僕ハ大すぎサ(守)我輩も嗜だテ此菜あれば飯が餘計に喰へるヨいつもなら二ゼンか三ゼンだが今日のアツトリイスト(すくなくとも)四ゼン歟(折しも二か(小女)ハイゴゼン



(守)ハ、ととと恰ど其位發へるだらう。

第五回

心の猿の悪戯にて

縫初し戀の緒のむかしやたり

守山の揚枝を加へながら(守)サア、小町田閑話休題、却説をはじめたまへ

(小)それじやアまた演めやう。シカシ守山君も十分プレジエンス(先入の解見)を去つて聞て呉ふくちやア困る。これから僕がはなす事の、一は冤罪を雪ぐが爲、一は悔心を表せる爲、眞の事實のみを話さのだから(守)そんな御心配は無要だ。酌量減刑の僕の手には有サビイ、シユエア、フ、エ、フヘヤ、ジャツジエメント(大丈夫だよ公平を判決をするうら)(小)オウ、ノウブル、ジャジ(イヨウ判事さま)

(守)駝ニエル、カアムス(青砥藤綱さまア)(註)駝ニエル、カアムスといふ言葉は人肉質入裁判と云院本の中一あり)が聞て呆れるサアサアとむ可しく(小)待たまへ。モウ一杯飲んで、トイひつゝ煎茶をグツト飲ほし又もや物語を始めけり

梓弓春としなれむ若人の心の戀に浮かるゝとや In the spring, a young man's

fancy lightly turns of thoughts of love げふさる者に有けるうし時しも今年四月の

なかば小町田祭爾の同學の友人輩と諸共にさかりといへど散やすき々ふが飛鳥の櫻狩思はず酒は酔倒れて藝妓の田の次は邂逅せし己に第四の條下に於て詳細にしろしたれむこゝは語らざるゝと小町田祭爾は此時までの義妹お芳を實の妹とも思倣して愛いとしむの心のあれどきや空て浮たるたれ心と毫抱きたる事をければお芳か藝妓とありにしのちな。いつしか疎くあり行きつゝ二年あまりの兩人とも相逢ふことのおかりしかば忘るゝともお芳の事を思ひもいざさずあり居たり蓋し祭爾の入塾して専ら學校のみありけるうら田の次がしばしば駒込なる我家に来しかど逢はざるありたりしかるに思ひもまうけむして飛鳥山にて邂逅ひつむかしにあらむを馴々しく阿兄ですかと睦みよられ驚きながら打見やればむうしとかわる派手衣裳新橋形の島田番こぼれかゝり



愛嬌毛の風ふかかれて戦々と招き見なる仇姿あなうつくしやと我し  
 れて黎爾の恍惚たり賞る心いつしか戀ぬる心とうちとくる [Admiration melts  
 into Love] 譬意もふかきお芳が言の葉聞え此方も我ながら怪しきまで今ま  
 での同胞とのみ思ひ羨し妹戀しく慕ひしくし語らふ其間さへ粹なき客にさ  
 またおられいと、怨の多かりし但見れむ件の客といふの年齢もまだいと若く  
 色白く眼清しく被たる衣裳も立派なれば必定お芳の押の客か扱こそ世よいふ  
 ンく心で此方の談話をきまたげけんあな嫉ましやと思ふにつく戀ふる心の生  
 憎に胸ひとつら増すりみ曇るかの迷ひぞと悟れど尚も悟られぬ煩腦  
 の犬に苦しめられ書を繕きて此年ごろ有形の自由を論ぜれども無形絆と脱  
 しかねて戀奴身を卑しめ學の窓ありあがり其現のぬけいで、花の巷路  
 遊びやする書をよみて解するあたの文を作る妙なる稀あり時に五月中  
 の其の日黎爾も同學の學生ども親睦會の名義をもて下谷伊豫紋集會して一宴

會を開くほどに黎爾も其席に列りしが藝妓がなくて素然と誰が原葉をいだ  
 せしよやいつのまよやら兩三人へい今晚のと定規の會粹心ともなく打見やれば  
 談宵の客稀ある晩ありしか但しの幹吏の特選にや今さやくあしの違みかゝる  
 書生の宴會へ出るの稀ぞと聞えたる彼の田の次さへまじり居たりハツト思ひ  
 し黎爾の面見てせる彼方の粹縁業をしらぬふりよ如才なくはや彈をむる坐附歌  
 「あうい縁のらとしらしきの姫小松二うい三がいごよの松幾代かきねん…チヤ  
 ン」ト四角は堅くるしくまいつて見ても何とやらおのが心は咎められ黎爾の其  
 坐したへりねつ、外すをドツコイそりやあらぬトそや亂酔の友達らの暴なコツ  
 プの惡強ひ酒此日も黎爾の酔ひををれてみたらひを呼ぶ賢丹さあざん人々は  
 や退散どき田の次の女中に耳うちして此お方さま今すこし後働車でおかへし  
 申しませうおかまいあさらず各位よのといンダイレクト〔間接〕にいれむれば  
 そいつの極めて有難いが迷子よされて僕が困るそうして宿所はしつて居るか



ハイあふたさまと御一所から。ヨツク存して居りますヨ。ト田の次が目ませよ女中の氣轉是ぞ敬して追拂ふ世辭としらねば意氣揚々常客がほして歸りゆく跡の盃盃狼藉散亂これれし酒盃が三ツ四ツ。いつものお方が先刻うらあくのを待つておいで。すヨ小蝶さん。豆田さんの田の次さんより一足さきへと女中の言葉は藝妓と雛妓の會釋なまつ、降階てゆく兎角するまよ小町田祭爾もやうやく我よかへりしうむ女中に分抱を謝しあどし田の次もうちとけたる口儀あるべしされどもいまだ世よあれぬ祭爾の斯様にさし向ひて憚る所もあきものから尚思ふこと打出していふべた便をしらざるゆゑ手持不沙汰の一間の中女中がもてくる一碗の茶に薄茶の名のあれど濃茶の戀と粹を身の早くも悟る藝妓の田の次思へばむかし較べこし振分髪のおさなまゆみ。かとなしやかてひとがらて利發をお方と思ひしのみ縁のきられても忘られぬ幾理恩愛があるゆゑふ尚兒さんぞと思はれていつうも花見で逢ひし日ふ戀ならねばこそ憚あういひにくいこと打いだして

時とま呼んで下さいいと幼稚時とおなじやうよあまへたことを言ひたりしが今さら思へばなかくよ。お身の障害となりたるかも散くる花は情あれ心をなぐる水にも情のありけり慕はれて見ればそれまた悪くあらぬおかたぞと思ふ心の薄にいで、呼んで見たさも幾理あればあんまり遅くありましては學校へくるうございませう。チトお氣分があつたから車をよばせて来ませう。トいわれ祭爾もころづき身づくろひして立上り女中を呼んで扱てやる紙の中なる紙幣こそ手数をうけし禮心せなれぬやうでも利發おと思ふも田の次が最負目欺ひまつ。まつ、降るゝるおもて二階の階子段檀那是ツ非と女中の愛嬌何やら耳に口よせてさくやく田の次が無言を背にさくあがし小町田の心残して歸りけり。あひ見ての後の心にくらぶれば昔のものも面影の目よさへざりて是よりいよし思の水うさます戀の淵瀬に小町田がたよふごとく浮心さきが忍ぶよたへかねつ、或夜ひそかふ唯一人ふた、び伊豫屋におもむきつ田の次は聘てやり



たりしが仕舞の客一伴はれて此の廓にのたしと計り其夜のあふことを得ざりし  
 うの好まぬ酒をさりあげて歸ればまます残をしく又の日ふた、び忍びいで、  
 伊豫屋のもとよおむむさつ、ふた、び田の次を迎へたるよ折よく家に居合し々  
 ん急がはしげよ二階口あがりもはてせきしのぞきあふたと聞いて急いでたまし  
 たりれしことトの一言の賢と不肖の差別もあく男をとらぬす文句よこそかく  
 て其夜の夜深るところまで過去し方の物がさり聞えつ問われつうちとけて酒よき  
 ほどよ酌ぬりして桑爾の學校へ歸りたりしが。

(小)ア、もう止さうあといつまらぬい話しごから、いくら笑われてもしかたが  
 いが今でのモウく思ひきつて一昨夜以来大に感ずる所あつて僕に志を決し  
 たから今までのフホルリ(痴情)の君寛大に見て呉たまへ(小)ナンダまあい、  
 じやアないか裁判の宣告の後でするから口供と完結りたまへ(小)モウ御免だし  
 ろし最一條話す事があつた斯いふと何だか自分の非を飾様だが僕がある時或る

茶屋をいつて居たときその時悪い奴よでつくはしたのサ(守)誰よ(小)ナニサ吉  
 住潔といふ奴で予學校の樫森きやうしのなりのアラサア(實弟)サういつが久し  
 くそのシソガルの顧客であつてひどくあつくなつて通つて来るんだが男もよし  
 金もあるがイヤみる奴だららひ加減しあしらつて居たといふがソラ僕が  
 飛鳥山で逢つた客といふの即ち是き所が茶屋で折あしく落合つたのでそいつ  
 が變マチンくを起して随分失敬な事をきこえよがしよいやがつたなれど此方  
 の何分にも修學中の身の上だからジツト忍耐して歸つてしまつたそれうら後二  
 三日もたつと今までのしれあかつた僕の風評がパツとたつて學校中で僕の一件  
 をしらない者もあつた位中よ大層な附會をつけて僕に事をうはさるるで  
 僕も大に後悔して斷然絶つてしまふつもりでトいひかけてさしうつむきさまが  
 一悄然として居る(守)君の言を疑がウのじやないがうれでも二三日まへよも學  
 校に居をかつたやまいか(小)サアそれサあれは全く親父から呼よ来て駒込の



家へ宿ツたのだ。ダケレド他人の然うと思ひを矢張遊ぶんだと思はれるシカシ  
 是も前より馬鹿をしたからの事サ(守)それほどの来歴のあるラブでありながら流  
 石の君が斷然絶つといふの感心だ。イヨ、其シシガルが君のいふやうな氣概  
 のある女あらよしんば君が學問の爲に絶つていつたあつて感むるもの毫もあ  
 るまい而して果して賢があつて君を思ふ心が深い者なら履歴もあつたりまへ此者  
 じやアなし卒業後にフハザア一語して妻君にしても不可なるからう其時よア  
 賢否をたゞして我輩がシシガルの兄になつて君の處へ嫁入らせやうか(小)馬鹿  
 アい、たまへ。一旦決心した上ね。そんな未練があつちやア到底だめだ思ひたりや  
 アまるで思ひたるんさ(守)そりやア君の一時の考へだ今まで持つて居る快樂を  
 奪はれた上に。ホウア(將來のたのしみ)まで無くあつてしまつちやア人間として  
 も立行もんどやアない彼の聖賢よあらざるよりなりやア Impossible (難行)だ  
 (小)こりやアかかしい人間のたゞしみの豈肉欲をあらんやだ功名心を以て

(守)そりやア不可行。あんまり今潔白なことをいふと後篇よなつて困ること  
 が出来る(小)エ後篇とい(守)ナニサ小説を氣取ツたのサ將來の事さ(小)ひどい  
 子イ僕を小説視するのね。折から下よりらんむう(任)ヤア丹次郎子御入来だ子(小)ヲヤ  
 任那君おかへりてをか君までが僕を小説視するヨ(任)否小説視する母あらざ小  
 説の人物視するあり(小)うしてナセ僕が丹次郎でも(任)それでも道路風して曰  
 (小)小町田に愛妓あり其名を田兒といふ。とつつけいへむ小町田はまのあむさう  
 らむ口の悪い男だ時に任那君の今朝から何處を漂泊してあるいて居たれだ(任)  
 本日むかひの漂泊にあらざつ信義の爲に半日の光陰を費したとい我輩の事(守)  
 子ス、ストレンジ(そいつの奇代だ)道理で空がくもつた何をして居たんだ(任)  
 餘の幾よあらず昨宵我輩と同伴して寄席へいつた宮賀匡なる者歸る遅うして學  
 校よ入る能はず百計こゝし盡て竟よ友人某の家よいたり一夜の宿をお願ひ申  
 じ了んぬ。却觀其翌朝六月廿日ザツトイス。くじしくいへば子イネムリイ。羅旬



でいへむ。イト、エスト。もひとついへばでウウ井ツト、それでも足らむ。ウビテ  
 リセツト獨語でいへば……(守)エ、うるさいモウい、ヨ(任)すなはち今朝の七時  
 半ごろ。せ、スチエウアント〔談書生〕をかはち同人宮賀匡が証人許おもむきつ、  
 昨夜おんすまゐりやどりしてふ御証書たまえれとてひたぶる母こひいのりしか  
 ど保証頑然聽せして曰くユウ、マス、ハブ、ピン、イン、サアム、ハブリツクハウス  
 〔どころへ登樓したのであらうト〕匡こ、に於て乎進退是タニマリ正當いへば  
 是谷まり……(守)ア、可厭モウじかツた。うれて君が仲裁母はいツて証書をもら  
 ツてやつこのだ。ナンダそんを事位に信義も糞もあるものか(三人)ハ、ハ、ハ、ハ、

### 第六回

詐に以て非を飾るに足る  
 善惡の差別もどかうどの惡所通ひ

人間終極の目的は快樂なり。お愉快筋が目的なりと今の學者の習ふ所も此  
 説をもて是ありとせば文明といひ開化といふも皆此筋の媒介して世が段々開

けゆけば便利を物も次第ふえ重寶を事もまを諱ありさすれば未開の時代と違  
 ひて御愉快筋の機械媒介數限もあく備はるから自然と世間が奢侈を好みて三度  
 の食物臨時の宴會住居の結構調度まで兎角贅澤よりふり格好我劣らじと飾り  
 たてるも餘融があつての道樂ならげ御もつともな事なれども素寒貧を書生の  
 身分で不了見か外容坊三昧五十錢の疊附に一圓の麥蕪帽子四圓以上の博多の帯  
 がキウ〜と鳴くを喜べども臍栗狀うはむとられたお袋が陰で打泣くの物を  
 も思ひま亂暴に被ふらした上布の葛衣が日々皺あるを嫌ふと雖も年々歳々送  
 金する親父の額の皺ふゆを厭はざ未熟な書生の斯でもななれどチト學問が出  
 来てくると忽自分極の木の葉天狗自惚鼻の高々れども根性の矢張本の木阿彌  
 究すも鈍つくの布子もたて旦那眼鏡までと落魄たる前の人力車の轆を見ても  
 尚さとりあねた外容坊主義馬子も衣裳といさることなれども錦に包みてもス  
 トーン〔石塊〕のストーン。ダイヤモンドモンドのダイヤモンド襪にぐるんでも一目瞭







然みありでおキリヨの下りやせぬまた上りやせぬ自然の優劣をこらに氣づし  
 つかれたなら見容専門の飾るよりも知識大事に研く方がグツト身の爲に徳川時  
 代の敵袍主義書生の風を學びチト外容主義を廢して、といつた所が馬耳東風餘  
 氣取の生意氣書生がますます輩出する今の時勢母さりと珍らしい感心書生年  
 の比に二十二三ある醫學校の生徒にしてモウ一二年で卒業する野々口精作とい  
 ふ田舎男井の守飛白の單衣のゆきたけさはめて短く四ツ紋の麻羽織のさすがに  
 近頃の仕立と見えて、ツペラ／＼とつまらねども當世風とぞ思はれたるへこの  
 大中一反の白金中尻のあたりから幾重となく巾廣のまゝ、ふ巻つけし、どういふ  
 本心かさつぱり解らぬ西洋の辻地裁が被りさうな大きき麥藁の帽子をひた、さ  
 握あまるやうなステツキを振回して會釋もなくブラリ／＼折々口先を尖形して  
 人觸ればアと言ささうすれどさすがにクヤクヤが下さらぬと見えて、ジツト我  
 慢するは笑止といぬべし時しも日曜日の四時半頃野々口の唯一人友をささうな

面附にて上野の三橋から仲町へいで守田の店先まで来りしとき切通の方よりし  
 てゴツサイ／＼と駈てた威勢のよい一人乗(野)ヤイあぶないワイ氣をつたろ  
 イといひつゝ、覺えを車上的の人と面見合せて互に吃驚(野)ヤ君は倉瀬君でな  
 か寔に暫らく(倉)やあれは野々口君か暫らくです子ね國へお歸省だと聞いたが  
 モウ歸つてきたのの子(野)一昨夜歸京つたばかりだ君はこれから何處へゆくか  
 (倉)僕の送別會があつて鳥八十八へ行くのだが、マア兎も角も降やうライ車夫モウ  
 此處でよいから降してくまかいし車をくだりて(倉)マダ會へ行くに早いから久振  
 だ何處まで一盃やらうトヤアあいぬ(野)オウライト(倉)ハ、英語を覺えた子  
 (野)可愛さうぬ、いくら我輩だつてオウライト位の知つてをるワイ。  
 ○是より兩人池の端の蓮玉をむやなりへあがりしむらく盃のやりとりあり(野)  
 時は倉瀬君のあいかはらも行く(倉)君は如何だ(野)我輩は閉口頓首再拜の秋  
 だ(倉)どうして(野)どうしたつて君聞て呉たまへ我輩が今度國へ歸つた所がソ



ラ御存知の如く我輩の謹直方正の人間だろ(倉)さうサ逆から(野)マア聞た  
 まへといふに○ダカラ親類の野郎共めが皆々我輩を信用して悴共を三人まで今  
 回我輩に委託したぞ蓋し東京へ歸つて後も同じ所に下宿をして我輩の薫陶を受  
 させたといふ請願サ(倉)ヲヤ(其親達や子供は放蕩學を研究させたいと  
 いふ請願だらうそれであけりやア君のやうな横着者誰が大事の息子に託せる  
 もんか(野)黙れ我輩が横着なら君の如きどろぼうだダが困るぜ察してくれ我  
 理にも當分の外泊をまるおとが出来んから(倉)ハ、ハ、ハ、自ら求める災とい  
 其事だアンマリ人を瞞着うらわるい(野)人間がゐるいど何時我輩がゴマカシを  
 したか此謹直先生を捕へて失敬千万を(倉)采れもしない去年の偽病の手際を  
 分の恐れ入ツたヨ○ソラ三十圓病氣だといつて佐藤病院から電信で取よせた手  
 際サ(野)さう(彼時やア究したせ親父へゲルト「金幣」を請求するよ全く口實  
 が種切よなつたので據なくあの究策を用ひたのサ今じやアマサカあんな暴お

事のできないワイ(倉)いくら病氣らしく見せる為だからといつて酒を六合も  
 飲んだ上母下谷からお茶の水まで息をつかおいで駈たおどい實にカシスンと言  
 ざるを得ずどネ(野)併し苦しかつたせ我輩の殆ど死ると思ふた氣の逆上ツて  
 しまふしなア動悸のひどくするし醫師が診察して入院しろと言さも無理であ  
 はおしき(倉)あれじやア如何なドクトルでも誑されるヨシカシ二日もたない  
 うちに全快して病院から下ツた時よ醫師も流石に驚たろウネ(野)おかしいの  
 の電信で取よつた為替サ証人が今届いたからといふて病院へ持参して呉た頃  
 の乃公殿下御不例己に御全快のおん有様サ(倉)じつよ非道い男だ身体髪膚これ  
 を毀けざるを考の始だといふじやアないかア、澆季の世の中だア、(野)ト  
 おいひるさる愚殿のどうだ人から預ツた十五圓の金を使ひこんでトウ(野)ト  
 テル(おふくろ)に尻をぬぐえせたてないか君の我輩の事を横着だといふがマ  
 ア(我輩おんどの品行方正の頂上だろ其内實のとも角も親父やお袋の心配を



うたないから感心なもんだ。加之我輩の親父の金につかうけれど別にたいした外債を賺ささいぞ。それでも五十圓位はあるが(倉)五十圓ありやア澤山だ我輩おんどの纏ったおの僅に三十位と最も散しが二十位もある(野)ぜんたい君の學校の者の外債の勢いなア外債で思ひだした昨夜斧山が来てなア斯る物を製していつだぞウトいひおがら懐中の古暮口から四ツ折にしたる半紙を取出し押展べて見せる(倉)ナンダ相模の番附のやうおもんだ子(野)こりやア何サ我輩の學校の生徒借金競サ(倉)や驚いた東の大關の二千圓の借金だねトいひつ、段々たしめて見る。

シ		前頭		七百六十圓 藤栗朝泰		同		三百圓 根津町 瀧	
ガ		大關		貳千圓 中江秋信		前頭		四百圓 永歌 備	
ヒ		關脇		壹千五百圓 野良倉雄太		同		三百七十圓 圖留井根藏	
ガ		小結		壹千圓 強岡次郎		同		三百五十圓 厚川連世	

借金くらべ

(倉)コリやア大變だ一番勢いのが百圓だ子實に恐るベシエビヤスの噴火山だドウシテこんお借金ができたもんだ(野)ナニサ三ヶ月毎の書替の手数料と利子が其儘に元金の中へ加入つていくから二三年もたつちよのツイ千圓位はやアなつてしまふワイ(倉)恐ろしい借金だナゼ君の學校の者のそんなに放蕩に熱心するだらう到底君のやうお奴が薰陶教唆するが爲あり子(野)馬鹿アいへ我輩なんどの放蕩をすればからといふて大抵したもんだ蓋し我輩れ如きの尋常の放蕩家のやうに區々たる衣服に拘泥せぬから第一贅をゲルト(金錢)を費をことがないワイ斯いふたら或は君の局面に障るうもしれんがドウモ當今の書生の忍耐力は之、と言ざるを得ずだ到底書生をしてをるうちの親父の脚をかちつてを



るのぞから假令バ優遊をすればといふても多少忍ぶところ無かざる可からむ。サ  
 然るを生意氣な縮の衣服を被たり博多の帯を結たり駒下駄をこいて出掛たり  
 かんかすれば第一頑固黨の日にもとまるし証人よの疑がられる随ツて親父への  
 聞えが悪くある請求もだんくは無効ある小言の郵便が来る學校の評判の  
 るくある校長もアア呼つけられる借金取もア責られる學校をれば賄屋がさ  
 て先月分の辨當料を請求するも外へでりやア八方ふさがり洗濯屋も食糰包も  
 唐物屋も牛肉店皆な借金の爲の故母其店先がとほれんから二町も三町も迂路し  
 て横町の新道へとしりこんで夫の糞をふみ刈けるに實に馬鹿氣さつた事トア  
 ないウ我輩夙にこ、母見あり狂と呼び癡と喚ぶ敢て管せず卓然獨立して獨行す  
 るから見あまへ校長も証人も親父も阿兄も各々我輩を信用して曾て疑ふもの一  
 人もなしサ金を送ツてよこせといふてやまば安心して送ツてよこすし証人の所  
 へ頼んでも疑わぬといふて貸てよこすか如何だ我輩の忍耐に實に感々服々だらう

(倉)ダカラ横着ものだといふんだ其位忍耐があるなら今一步進んで卒業後まで  
 忍耐してままへばい、君の如き忍耐の何の益にもなれやアまをい。五十歩百歩の  
 違ひだ寧人をだますぞと罪が深いと云ざるを得ずだ(野)君なんぞハ外容主義だ  
 からダウモ不可蓋女惚れらさやうといふ野心があるからだ止たまへ到底だ  
 めだから娼妓でも藝妓でも金のある方へ轉ぶ世の中だ餘程古風を奇人でなけり  
 やア心くら容姿が佳うらといふて寒書生もア惚らせぬらう(倉)所が僕ハ惚  
 るから奇態だシテ見ると僕だけの例外かしらん(野)イヤハヤ相かえらむ自惚が  
 強いなア君に惚たのハ初縁とかいふ一斤五十錢縁のありそうな根津の娼妓一  
 人ツきりだワイ(倉)へん嫉む可しツ初縁の如きの遠く放擲今でハズツト大雑サ  
 (倉)其放擲した理由原因古事米屋の茶屋への不義理と無心の請求當らぞと雖ど  
 も遠からぞだらう(倉)憚ながら請求なんぞハ外の客野郎へ申チマツ事ワタイな  
 どへの御心配をかけないんですヨウ(野)アイタ、如何するノロウキング傍聴の



上は捻られてたまるもん御心配を懸た所が到底だめどり止ませうといふだらう(倉)ハイと何となくおひなをいひなこい好男子人な嫉まるトの万古の原則だドリヤ會へゆくのが遅くなる僕の失敬するぞ(野)待々我輩も同伴にゆくから時に君は是非とも會へぬかあたりやならん(倉)ナア是非ともといふ譯でもないが(野)ナンナラ我輩ふつた合べしだ久振で進撃しや(倉)何處へ(野)何處でつて根津か中藤サ(倉)根津ハ八方ぬさがりだ(野)あうらばいよく九郎芳原稻本の(倉)ヲツトどつこい稻本の三度目(野)チヨツ仕方がない夫じやア何處だ(倉)僕一原案を出だせりやア角海老だがほこし大藏があやしい(野)大藏ハ我輩が承知だ君ハ角海老になじみがあるか(倉)ウシ(野)それやア確定だ我輩も實ハ舊知己ありサだが君の方が初會でト粹に稻本といつて見たのサ(倉)そんな事ハ如何でもよい善ハ急げだ直に出發や(野)ヲイ姉さん勘定だ勘定だ

第七回

賢と不肖とを問はむ老と少とを論ぜむ

たぶらうしざしきの客物語

其の所論よりあらねど男尊まれ女卑まる、世の中として公然貸坐敷の設置ありて同じ人間の女子をもて男の玩弄は供ふる事の世にあからさまに許さる、いと敷く可きの限はあんといへ是もまた時世々々のしからしむる所西洋の開明の國々にも淫費といふ陋習のみは尚禁トがた弊とぞ聞く今あらためて此弊あるをば獨りなげかんと愚痴なるべし只憾むらくは我國にては彼のいやしむべき娼妓は迷ひて身の破滅をも顧まざる嗚呼のたゞれをの多かることを是しかながら我國に娼妓の容兒を買ふのみあらむ其情をしも買ひまくる嗚呼のふるまひのある故ありけり素かしざし死といへる者の彼の禽獸と一般ある肉体の欲を漏らさず由なく空閑の無聊またへかねある妻を男の便宜として是非なく設けられし者にしあれど若し劣情の抑へがたくて彼の一夜妻に逢はまく思は



宜しく只管に色を愛で、色專一に目的として樓に登ること當然なれ。志かるを人情の然らしむる所歟。間々事理を知る男にして尚此道理を悟る能はざるを、説をなしていへらく色を專に目的とせざる。他の禽獸の行ふ所人間のすべからざるにあらむ。娼妓といへども人間あり其情をしも酌量せむして之を弄ぶ。忍ぶべきや。情を買ふもの。情を知るものあり人として情なくば彼の禽獸に劣るべしと道理らしくいへるものありと歟。是豈甚しく誤らむや。人にして人を弄ぶ。往古蒙昧の遺弊として其手段の是と非とに係らむ其行ひたる已に非あり情を酌みて弄ぶも色のみ愛して弄ぶも弄ぶの理の同一。ふて開明の眼をもて之を見れば共禽獸の情ならむや。されば生中高尚ぶりて娼妓の情を買ひまくほりして身の害世の害を醸さんより。寧ろ劣情の忍びがたく。自ら禽獸の心をいだきて花の巷に浮かる。こそよけれ。若しまた禽獸に身を卑すを流石。口惜と思ふ。えの。宜しく劣情を禁め制へてみづから守りなむ。まをく可らん。夫娼妓のものたるや。昨日の興羽の人。比翼の契をあしけふ。越路の人に同穴のかたらひをあす夕。町人の妻となりて晝。武士の妻となる。と。是いにしへの情にて。今をこきにし。もい。増りて。宵。官員を客人となし。また町人の氣嫌をとり。真夜中。軍人を迎へ。また書生。逢ふ。一夜。して。換へる。枕の數多き。十有二三。に。及び。少き。二三四五。に。及ぶ。泣て。ひろ。あ。に。笑む。屏風の外。あ。ま。は。笑みて。陰になく。廻床あり。千變萬化。虚々實々。喜怒哀樂の七情を。臨機應變に。弄びて。もて。嫖客の氣襖をとる。客數かくの如く。多かる。から。娼妓に。誠實の原素なき。素其答の事ありかし。さ。い。い。へ。娼妓も。元。采。人。なり。性。采。情。なき。よ。あら。む。と。雖も。情。の。あ。ら。か。じ。め。限。あり。て。容の數は限がたし。此限ある情をもて彼の限なき。毎夜の客。い。か。で。か。實意の盡さるべき。娼妓。手。練。ある。の。當。然。し。て。是。を。の。し。る。は。抑。非。なり。遊。廓。は。詐。譎。の。世界。として。娼妓。幫。間。藝。者。お。は。さん。新。造。娼。婢。妓。夫。若。者。二。階。廻。の。皆。う。ま。さ。い。ふ。無。形。の。者。を。假。し。人。に。した。る。ま。て。れ。者。あり。蓋。し。前。段。に。も。い。へ。る。如。く。章。臺。の。情。を。賣。る。の。場。



所にあらで色をひきぐべき場所あればなりされば娼妓を成べくだけ手練手管を  
 是研きていかほど厭ふべき客といへども飽くまで惚れたる面地を偽て堅めて  
 世辭でまるめ可憐言葉をうけられても莞爾笑みて見返の柳にうけて接ふが是傾  
 城の賢なる所以うろは正則の本分にして實意は怪しめらぬ心得ちがひよしや娼  
 妓は損はふくとも社會は有害と及ばずものあり其故を抑いかよといふは娼  
 妓に例外の實もなく客も元來偽合點手練承知で通ふべければ例令其色には迷  
 へばとて其情に迷はざるべし色に迷ふは蟬蛻ある其貌容を愛するなり所謂一  
 旦の快樂「ラスト」あるら他の禽獸の欲にひとしく迷ふも淺く悟るも早かり  
 あるふ其情に溺るゝもの所謂戀情「ラアア」も迷ふものよて愛惜の絆は長く繫  
 がれ一生迷津は流轉して竟に浮む瀬を得ぬもの多かりおよろ容貌の花の色を老  
 行くまゝ衰凋へども心の花を年経るまゝいよゝ其艶をますよしありとも衰  
 ふる事のあらざるを迷へる者の身よとりては斷念がたきもまた宜あり昔古人

の浮世を敷いて偽のなき世なりせばといわれたりき作者の之とことかありて  
 ととを晦日月月いづるも角なる鶏卵がでさればと毫末たわれ女よまことなん  
 どのなからんことを望むよん嗚呼たはれ女や娼妓や汝おさく偽を力め  
 よ若し偽に倦来らば速に偽謠の世界を脱籍して浮世の義理をしるふとの數  
 よいるべし若志からむして花街母あらばあくまで偽を吐きとほして四方の嫖客  
 を馬鹿にまべし客もし汝の情を求めむたゞ色香のみを買ふよいたまは賃坐敷  
 害も大に減じて野合を防ぐ一箇の機械と世に尊まるゝやうよもなりなんあな  
 じこ力めよや  
 来る歎疲勞にやうくと客ねしづまる真夜中まぎ名代部屋の障子の外○ヲイ倉  
 瀬モウ「スリイプ」したかトいひつ、障子を押開々バ(倉)ウ、繼原うそいりさま  
 へ(繼)そいつてもいゝか娼妓不在か(倉)然りまづ蚊屋のなかへえいりたまへ  
 (繼)ヤアどうも今度ばかりに我輩も失敗したぞ君達が来いと實に究迫を究た



處だつた(倉)ぜんとい如何したんだ先刻引手茶屋で聞うと思ふたが傍ら都合が  
 悪うつたから演説中止としておいたが源太氣取で一騎つけたア君にしては珍ら  
 しい子(繼)處が一騎がけてないからおかしい實は斯様さ昨日の晚山村と一所に  
 富岡の處をいつた所(倉)フン例の翻譯の一件でか(繼)さうサ(倉)いよ願  
 意通りエム(貨幣)よまつたか(繼)これからが話だマア聞てくれアツト、リイス  
 ト(少)なくとも十五だをいたしかし出来たらうと思ふたから二人で押かけて  
 いった所があやにくく瀕をいつた留主との事で例の外道面の女房めが出て来や  
 アがつく明朝でなくツちやア歸りませんヨといやがつたから正可待つて居る譯  
 にもいさむサ瀕は障つて仕方がないうら何處かて一盃やらうとやないかトそろ  
 く叛逆を企てたが揃も揃つて御兩人ともいつも相替らむ一錢無サさうかとい  
 つて此儘でたち分れてしまふも残念だ明日になりやア拾五だけの大丈夫だから  
 どうか周旋をしようじやアないか三か三半もありやア澤山だ今夜一晚の事だ

何處かで製造をしやうじやアないうらトそれから二人で甲地乙地と真地目の面  
 うけ廻つて子トウく四圓だけゲツト(得領)したのサ(倉)相替らむ借出し方  
 甘いなア何所で借た(繼)一ヶ所一あらずサ二だけの東光學館の小使に借て外  
 の二山(山)村が改文堂の貸本屋なるべしで臨時借用と云ふ次第サ(繼)どりも恐れた  
 小使先生の躰乗を借用するたアいよく君は放蕩博士といえざるを得む(繼)  
 處でまづ四圓だけの金が出来たらう(倉)ウン(倉)其四圓を挈げて(倉)何處へい  
 つた(繼)天神と出掛た(倉)揃は誰とコウル(聘)したか子(繼)どら吉にござろ太  
 サ(倉)君はよつほどどら吉にきているな(繼)馬鹿アいへ而して夜は十時過まで  
 スツチヤン騒ぎをして居ツたが先達ての事もあるから今夜は一旦歸らうじやア  
 ないゑと○尤もエムもないからだけれど神妙に學校へ歸ツた處が(倉)門限已  
 了後れたりツチエ、残念な位が極りだらう(繼)恰も然りサいつもなら弱りやア  
 しないが昨晚ばかりは弱ツたぜ(倉)ナゼ(繼)なせだつて門鑑がチヤンと出して



あるから中乗をしたつてむだくらうじやアあいる二人で閉口して立て居ると人  
 あり我を呼んで曰く(倉)へ、イそりやア誰だ(繼)當て見るべしツ(倉)ハテ十誰  
 だらう學校の者の(繼)ウン下の級の者ど(倉)下の級の奴ア大概腕力黨や頑固連  
 や世間見むの坊チヤン派どが誰だらう夜中に後れて歸る奴ハハ、ア解ツた外  
 田だらう(繼)ノウく(倉)それじやア解らん誰だ(繼)須河の頓痴氣サ(倉)へ、  
 イ彼奴が何して(繼)任那に引むられて寄席へいつた處がツイ門限に後れたとい  
 つて將に泣出さんとする顔色サ(倉)こいつア妙だ。うれからそれから(繼)我輩が  
 例の慈悲心を興して(倉)例の字が耳障だ例外のト改むべしツ(繼)マア聞けイ  
 我輩ハ別ハ知己でもないが兎ハ角山村ハ知つてゐるらうつちやつてゆくのも可  
 愛さうだからそそとやア我輩等と一所に來たまへ何處かへ往て泊らうからツく  
 (倉)外面になさけの様子を見せ(繼)何サこじめハ別ハ惡意もなしで(倉)後でハ  
 惡意を興したのか(繼)ウンニヤ別ハ惡氣でした譯じやアないがヤブレカブレと

思つたから竟ハ再び野心を興して酔ツとあまり車に乗じて一も二もなく須河  
 を引張ツてリイブ(住吉屋の事敷)へ登樓たと假定せよ(倉)須河ハ、面の皮だ  
 (繼)須河より我輩がい、面の皮だ(倉)それでも君の面の痘痕があるぜ(繼)此野  
 郎人の語を茶にしやアがる(倉)失敬マ々それじやア何故(繼)何故つて翌朝計  
 算の段に至たつて三人併せてさつた一圓六十三錢といふ準備金だらうトやな  
 いか而して不足ハいくらぞといふと凡五圓七十八錢強サ(倉)イヤニ高いじやな  
 いう(繼)蓋し山村のノロマめが馴染金の請求に應じたからサ(倉)ヤレく(繼)  
 チイ、ハウスに借せといつても我輩の舊債が十圓近くはあつて居るから如何  
 しても借さんといふ須河ハ慣ないもんだから頻ハ學校の方を心配しやアツ  
 て是非先へ歸りあといふ賢に困ツたぞ仕方がないら須河だけを還すことよ  
 して跡でまた談判に取か、ツとがどうしても借しやアがらん是非十圓だけ渡し  
 てくれぢやんとうかんとかいやアがるんさ手強く切ぬてかへらうとしても。







ウキングだらう真平々々(倉)イ、ヤそうでないんき情痴よ似て情痴よあらざる  
 一種奇妙不可思議の話したマア聞たまへ餘程稀代だから(繼)どういふんだ(倉)  
 斯いふんだ今日の君も知つてゐる通り鳥岡の送別會があつたもんだから僕が守山  
 の處へいつてエムを二圓と羽織を借てネ池の端まで出掛た所が途中で野々口に  
 出會して俄に心が替つたらこゝへ登樓し進化した譯だが其羽織の紋に關し  
 て不圖一條の物語ありさそもく僕の娼といふハ年齢凡そ二十あまり娼妓名兒  
 鳥本名ハ(繼)つる女とまをしとべるなりツ(倉)ガカどうだか其處まではまだ  
 しらんが兎に角圓助の直價もあるんサ但し氣象を張がなくツて少しグワタラの  
 方のやうだがマア随分いゝんさ(繼)へいゝ大層鼻の下が長いをア(倉)マア聞  
 たまへといふにそいつが如何いふ間違ひでる僕ハ北野の天満宮(繼)敬して速  
 さくるといふ謎々だらう(倉)處がそうでない但し今までは斯うでもなかつたが  
 今日ハ非常ハエヒ、ハ、ハ、僕の側身居たがつて子(繼)ケチな笑ひ聲をだすとや  
 アをいりマアい、サそれから(倉)僕もあんまり大事にするからこいつ變だと思  
 て居るとひけてからやつて来て子アロが僕ハ尋ねるに貴郎ハ、おとゝあんと  
 いったか當て見たまへ(繼)さうサ自惚がつよい人だヨウといつたらう(倉)大達  
 ひ今夜ハ羽織を借被してきました子サ(繼)ハ、ハ、ハ、そんな事だらうと思つた  
 (倉)處が名に負ふ僕のこつたから少しもおめたる顔色なく從容として答へて曰  
 くおれの羽織を質にえふりこんでままつたから今夜ハ友達のを借て来たお察し  
 の通りだといふとプロめが氣の毒さうお見をしてナニ子貴君の穴をあばかうと  
 思つてさういつた譯じやないが貴君のお羽織の紋について少し因縁のある事  
 があるから不んとうの持主とおしへて下さいといふんさコイツ不思議だと思つ  
 たからヲヤそれじやア此所有主を知つてゐる歟といふと一昨年の春一度お目に  
 かつた事があるが外よとめしれない御紋だから大方おなト人だらうといふんぞ  
 守山が放蕩しやうといふ毫も思ひよらんことだつたから僕も流石に驚いたが色々

アをいりマアい、サそれから(倉)僕もあんまり大事にするからこいつ變だと思  
 て居るとひけてからやつて来て子アロが僕ハ尋ねるに貴郎ハ、おとゝあんと  
 いったか當て見たまへ(繼)さうサ自惚がつよい人だヨウといつたらう(倉)大達  
 ひ今夜ハ羽織を借被してきました子サ(繼)ハ、ハ、ハ、そんな事だらうと思つた  
 (倉)處が名に負ふ僕のこつたから少しもおめたる顔色なく從容として答へて曰  
 くおれの羽織を質にえふりこんでままつたから今夜ハ友達のを借て来たお察し  
 の通りだといふとプロめが氣の毒さうお見をしてナニ子貴君の穴をあばかうと  
 思つてさういつた譯じやないが貴君のお羽織の紋について少し因縁のある事  
 があるから不んとうの持主とおしへて下さいといふんさコイツ不思議だと思つ  
 たからヲヤそれじやア此所有主を知つてゐる歟といふと一昨年の春一度お目に  
 かつた事があるが外よとめしれない御紋だから大方おなト人だらうといふんぞ  
 守山が放蕩しやうといふ毫も思ひよらんことだつたから僕も流石に驚いたが色々



様子を見て見とお、よ奇々妙々の事ありき。○プロが子いよ〜僕よきてる  
 るヨ(倉)アイタ何する非道い事をやらアなんだか話の脈絡がつゝかんトヤア  
 ないか(倉)イ、エサ爰に至つてプロが僕に惚てゐる証據が現然あられたとい  
 ふ譯の今まで梳櫛のお秀よさへ話さないといふ私密事を皆んを僕に話したが子  
 其大略の(折)廊下をゴロンボタン。ゴロンボタン。ゴロンボタン。ボタン。サラ  
 く〜障子を閉て入くる(兒鳥)(繼)ヤア花魁がきた大きに失敬十二サまたま  
 やう。おいらんお摩さま○兒鳥のねむさうな眼をこすりながら(兒)ヲヤお客さ  
 まがあるの。マアい、じやありませんか。おえおしなさいな：ねむいこと。

○月落烏啼て下湯場へ降る上草履の音かまびすく觀音の鐘聲客人に到りて煙  
 筒を叩く音更に高しいつしかと明えなれゆく東雲どき歸をいそぐ官員客は髮  
 を梳るのいとまおた殿斬髪さかさまよ起て清玄が墮落のありさまも思ひいで  
 られ客を送るうかれ女のいうふまそし床の多かりるん今おねむさげに目をま

ぱた、きて艸履ひきづるごとく穿もてゆく朝見のごせめきていと危険し日和  
 下駄でかたいたす書生客の生意氣茶屋に迎ひよいであい帽子眉深に色白たの  
 藝人が忍びの遊びと見えて店口からひとりひそかに歸るたつ鳥の跡を濁すふら  
 れた客の果報者の所謂をさとりす情人ぶりてすましが屏の持てた客の粹が身を  
 食ふべき因果母くらうり笑ふてうへる機嫌客あれば泣ておしむ後朝ありげに戀  
 こその情のみおもと彼の百八の煩惱もこれより起る事ぞかし。

○チヨイと吉さん。アレサお待なさいな子エ。それトヤアどうしてもおけいなさ  
 るの。チヨイとおいらん。おけいしませしても宜うございますか(吉)かまふもんか。  
 おまが勝手に歸るんだ。おいらんは聞くよ及ぶもんか○イケませんヨ貴君のよく  
 つてもお送りませをさなじやア内所うら叱れませアネチヨイとおいらんト。いへ  
 ども娼妓は上お間の屏風の中に引こんだるま、グツともスツとも返辭をせされ  
 梳櫛のお秀といへる女強て客の袖を引張あがら上の間の屏風の中へつれてゆ



此客人といふに已ふ第一回に出たる吉住といふ代言人にて學問の隨分ある方  
 なれども些と輕躁ある性質にてあまり沈着かぬたちある故社會の信用の宜しか  
 らず肝心の代言事務に頗る振らざる方なれども元が相應の身代なるゆゑ其邊に  
 まこしも斟酌なく屢々花柳を遊蕩れあるきて放蕩家といふ名の高かり其本性の  
 おろろならぬや自惚の原素が多いだけにたやまく娼妓の餌食ともなり自然爲  
 もある客人ゆへ娼妓もまんざらでないのを見へて其取扱ひも別仕立ありされむ  
 吉住も乘氣になつてズツト情人もありすました了見や、ともするとチン／＼筋  
 にてお荷物主義を擴張なし廊下へとびだまこと間々あるなり此坐敷の娼妓と  
 いふ其名を見鳥といひ年の比に十九位少ふけたる損な質ゆゑ二十か二十一  
 見らるれとも當世風の圓顔にて色白く口少く舉動もしとやかなれど大難  
 すむけだものにてまづ正當ありといふとも可からん其性分をまこしくお心よ  
 の方にて意氣地もなけれぬ張も弱く萬事万端梳櫛お秀かいひあり放題お秀が娼

妓の娼妓が梳櫛敷どちらが主人だ別らぬ程にて傍で見れば笑止氣にさりとて無  
 神經の人物でもなけれど兎角氣の小さい性分あるゆゑよけいお處に速慮をして  
 いふが當然の事をさへいひすして我慢をする溫柔な質で偽が商賣の身てあり  
 ながら偽を吐くこと極めて拙くてやゝともまると中途にして地金と化の皮を  
 あらむす風あり然し敵手が吉住なれば此一段の上出来あり「見鳥の上間の三重  
 蒲團の上につふしに打卧してエ、ジレツタイといふ容体(秀)モシおいらん吉  
 さんやけいる／＼とおいひおすつてしやうがありませんヨ(兒)よいヨお歸りお  
 さるあらお歸し申をがい、あゝあれやど譯をいつても不解でお腹をおたちなさ  
 るんだから仕方があいつと少うするみごゑの愛想づかし(秀)あれですものヲマ  
 ア貴君よつく御相談をおすつた上でおけいりおさるんならおないうりかさひヨあ  
 んまりおいらんよ氣をもませるとおいらん冥利よつさままヨイ、エほんたうよ  
 せ。おたしが困りまさアネ。このお荷物めといひおがら破れか、つた人力車のやう



に。かへりさうで歸りさうよ。まい吉住の手をとつて屏風の内へおしすへつ、自分の次の間へ退りいで、頼一八の字をこしらへ(秀)ホシタウよりるさい甚助だヨ。ト口の中でつぶやきながら又大蛇を齧(秀)吉さん吉住さん。おないうりなきるにしてモウよつほど遅いんです。さう一盃めしあがつておないうりなきいな。昨夜のお酒をつけますから(折から茶屋のむういの女)おないうりなきいな。吉住さん。おないうりなきいな。まだおよつて入つておないうりなきいな(秀)フヤおかつさん。マアおないうりなきいな。いらんヨウございませぬ今朝の直しておないうりなきいな。それトヤアおかつさん吉住さん。お直しよあるヨ。

○お秀のやをら膳立をして銅壺の中へ徳利をとふり込ながら(秀)サアサア吉住さん。今よお燗が出来ます。マアお楊枝でもおつういおさいヨ。お常のなどん。おちらへ持つていつてあげるんだヨ。エ、氣のさかぬへ。そんなもの、掃除のあとでもない、やね。○チヨイとおいらん吉さんはお休みなすつたんです。うへあん。ですと

へお使用ふいらつしやるつて。うれしやアお常どん。おつさまをして一寸上の間の掃除をするから。なんならさうおさいヨ。おいらん。おめへさんも次の間へお見だしてすヨ。(此うち吉住の氣嫌がるなりしと見えて楊枝をくまへたま、にて廊下へいづる(秀)お常どん。おつさまをしなヨ。

○お秀の吉住のあとを見送りながら上の間へ入り屏風をかたつける兒鳥も起いで、楊枝をつかふ(秀)おいらん吉さん。何で又ははめましたへ(兒)十二サウんベ子。少し氣に懸ることがあつて。二番の名代でネ(秀)二番との倉瀬さんでした子(兒)ア、少し氣にかゝる譯があつて真身の話をして居たのを悪く吉さんが勘ぐつてネ(秀)でもか呆れもケイらないねへ吉さんの甚ゆるしよも困りさるヨ。倉ちゃんおんぞを誰が情人にするもの。子馬鹿々々しい(兒)例のチン〜が始まつたから。いろ〜に譯をいつても。どうしても聴うまいんぞ。(秀)ぜんてい倉瀬さんと何を話して居たんですへ(兒)その事のネ。まだお前よのえなきあかつたが。ワタ



イの身の上乃事(秀)ヲヤ。お前さんの身の上の事だ(見)お前は昨今だからまだ知らなからうが子ソラあの簞子の中にある脇差の紋がネ(秀)さうく。あたしの遠うらあの脇差の事を聞かうと思つて居たがさういやアあの紋と倉瀬さんの(見)もうべの羽織の紋とおなじだらう(秀)なるほど。へ、イ。そうして何の脇差は(見)あれね。あたしの實は慈母さんの形身で(秀)ヲヤ。それトヤア倉瀬さんの(見)もしや親縁トやあいうと思つてよく聞いて見た所が(吉)親と親とがいひあづけの大事の夫といふ譯だらうトだしねけい(秀)とえいる(見)ヲヤ。マア。ワタイのびつくらしたヨア、びつくらした。あんとか斷つておそいなをいヨさんざ人は氣をもましてをいてさい、加減よをしなさいヨ。くらしいイネエ(吉)アイタ、。そんなか平手で叩られてたまるもの(秀)思ふまゝいづめておあげなさいくせよあるうら(吉)ア、まいつた。

第八回

雨を凌ぐ人力車のめぐり

小町田が田の次に逢ふ再度の緒

鳥がなく東の都廣しといへども夏の炎暑を凌ぐが、向洲はまさされる場所の稀あり向洲の堤ながしと雖も山媚水明うねをなり且納涼便利よきの彼の植半の樓上なるべしされば、風薫る夏の中半とある頃、我もくと夕暮時より或は船、或は車、おのがししある準備をして此旅亭に登るも多り、なふいとさら賑々しく植半樓の畔、家形屋根船こきまぜて彼方此方、あふふたる中、一艘此時しも着いたむかひの屋根船あり中よりやをら立出る、孰も黒貂の紋付羽織一人、年の比二十三四商人であく鯨でなく新聞屋でなく書生でなく鼻の下、チヨツピリト鬚を生したれども、あまり威嚴ある兒もあらぬに、當人の頗る得意と見えて、摘むやうしきりに捻る、今一人、年の比二十六七、色黒く口大、丸く鼻の俗にいふ獅子鼻、て天に朝したる形、あるゆゑ横ぐへよしたシガレツト



の煙のまつすくよたちのりて蒸瀧の煙筒も宜しくあり前の男の棧橋を渡りお  
 がらふりうへりて船のうちを窺きこみて○フイ〜吉住子いくら足下り風流男  
 兒だからつてこれしきの動搖で船は酔ふなんざア恐れ入ッたネ君の孱弱ある事  
 婦女子ふも尚劣れりといふへしだその体じやア明年れ米州行もまづ〜お廢止  
 とるさぐるを得ぞだネハ〜シカシ村高さん此様子で到底歸路も船の  
 ためだぜ(村)なんなら船のこゝら歸きうてないか風がこれツまりで静れむ  
 よいが先刻のやうお塩梅式で歸船の益々小間物が繁昌するぜよしんば婦人  
 連の大丈夫とした處が吉住の矢張怪しい方だヨマサカ歸路に吉住はうり腕車で  
 かへす譯母もいくまい(前の男)大いに怒りだ舟遊の準備がむだよなるの遺憾  
 だが仕方がない歸すべし〜(村)歸期にいちやうど月も出るから佳人を繋いで  
 道遠するもまた豫想外の佳興でよかるうそまじやア岸の邊さうさめるよ(岸)い  
 とも〜石端君は全權委任だ(村)それじやアいよく斷行々々○このうち船

の中より藝者と共立出る例の吉住潔として本来船嫌ひの性分あるよ此日の  
 酒も酔ひたりし故も顔る波風の荒るりしたために甚しく船に酔ひてさらぬ  
 だよ青白き兒がまるで血の色を失ひつ、菊五の清玄をつくりといふ兒附藝者二  
 個の例のごとく數寄屋町の賣出し猫一個と讀者もおなじみなる紋の柳村屋の田  
 の次にしていつもかたらぬ愛嬌ものシカシ此日の幾分か吉住のお相伴をしたり  
 と見えてア、苦しいといふ眉の塩梅太真が濁し堪ざる時西施が心を患める折も  
 るくやありけめと思われてト形容またし今一個の千歳屋の辨吉といふ大姐うぶ  
 さまで上等といふ兒容母のあらねど所謂仇ツ不き中年増衣服こしらへがイナセ  
 あるゆゑいくら卑しげなる處もあれど割合に舉動のまじやかよて客あつかひ  
 の調子もよき當時日の出の有威おしいや

○此樓の二階の一間一人待兒の三個の客の浴後と見えて浴衣がななり一個のお  
 熱知の任那一小町田今一個の老人よて年の比に五十三四舉動のどりやら商人め



々ど尚うたくるしき口氣の失ぬいたしかゝ維新後の士族あがて是なん守山友芳が實の父守山友定といふ静岡縣士族舊幕の人には珍らしい機變家にて世と共に推移りての商法三昧着眼點がよかりしにや七八年来静岡にて某會社の社員とあり頗る繁昌ある身の上となりぬ其商賣の何なりけん作者も櫻瀬に聞たるのみを承いましもこゝに告得ざれど正しく外國へ輸出すべき日常必需なる品とぞ聞えし今日しも任那と小町田を伴ひこの樓上へ來會せしはそもまゝ如何なる故ぞと問ふに此友定が嫡子ありける彼友芳が卒業して已に代官の官許をさへ四五日以前に得たりしかば商業上の取引かたゞ我子の卒業を祝するにめ久し振て出京るしむかじ幕府に仕へし頃より無々親しくなしたりける三芳庄右衛門を訪ひたりし同人が妻の甥なりける任那透一といへる者も友芳と共に業を卒へて此度庄右衛門が助力によりて洋行なすとの話を聞きさらむ親睦の宴會うとゞ其送別をなさまほしと友定親子の發案にて今日しも午後の四時頃より守山

友定に任那を伴ひならびに友芳透一等が年来別て懇意にせし小町田察爾をも誘ひつゝ一足先に此樓に來りて三芳が来るを待居たり三芳庄右衛門の家といへるにむかしは下谷邊の店を張りていと時めきたる細刀商の老肆なりしが明治一乃變に遭ふて家運に衰へつゝ一時に閉店の様にもありしが三芳は頗る活眼ありて機を見るの才に富たるゆゑ翻然志をふり興して明治二三年の頃なりけんある横濱の商社に仕へて重手代とまで成昇りつ例の機頭之慧眼もて當つて碎ける一六主義危険おがらも洋銀相場も内々二三度手を出せしが三芳が運の向く時なりけん洋銀の相場はよそのは騰貴し三四千圓の利を得しかば三芳はひろかに喜び一、蕪て思へる由あるから商社を辭して身を退き再び東京へ歸り來りつ斯て後機を察りてこたびは米相場に手を出せしが是又意外なる成功母てトシノ拍子の首尾精妙まだ一年も経ざる間に巨萬の富を致せしかばこゝらが手を退く時機あらんと自ら悟りて相場を止め何か實着な商業をと工風を凝して居たりし



折もと相知れる人々等が其銀行を創立せんとて其商議に采りしかば是屈強ど  
 と賛成して其建設を助けしかば竟一人々推選せられて當今其銀行の社長を  
 勤めていと富豪なる身の上なり此日しも守山と約束して任那の送別の宴を無て  
 友芳が卒業を祝さばやと其時刻までも定めしうど少しく要務の出来せしかば後  
 より屋根船の用意をして友芳と共に行くべしとてさてこそ友定透一等をまづ植  
 半へ送りしありけれ。

○さる程友定等の三芳の来るを待無つ、流石に宴を開きも得やらす浴湯して  
 て、も所作おけれ互に四方山の物語して空しく時間を過す程に午後七時前  
 もなりける頃より天色俄に一變して黒雲墨の如く渦き走り風向かひりしよと覺  
 ゆるえと疾風颯然と吹起りて雷おどろくしくなりはためきはや落しくる  
 臂笠雨さながら河を倒し盆くつがへす意外のふりこみこりや堪らぬと縁側  
 らら避る客人はせでる女中額合せしてア、イタイタ板戸でいなアノ雨戸をは

やく鎖てとゆふ間暮うろたへさわぐ男女の聲々いとかしましくど動揺めきとる  
 任那のふりこむ雨をも厭わぬ二階の欄干たちよりつ、川の面を打ながめて小  
 町田桑爾をさしまねき(任)ドウダ小町田賢一跌宕極るといふべしだ○吹折ッ  
 昆崙引山頂のツ樹ツ喚醒すツ東海のツ老龍君引○ア、快絶々々(小)どうもいへ  
 ない景況だ子エパイロン(英國の詩人の名)得意の天とい此般風景をいふんだら  
 う(友)任那さん何か名吟でも出来ませぬな急がむぬれざらましを旅人の…  
 それとい反對で後れどぬれさらましを恰ど今時分吾妻橋邊へ乗だしなまつた  
 頃であらうい、加減一歌めバ宜しいが(任)雨計りなら驚くよ足ませぬか風が頗  
 る非常だから(小)さう子エ事によるを船が出されないかもしれないヨ(任)時  
 お守山さんお聴ふさい拙者が三十一文字を製造しました(友)ハ、何と出来ま  
 したる(小)守山さん老實でお聴ふはつていいけません任那君の三十一文字の腰  
 折處でよい骨折でもから(任)餘計な横鎗を入るべららずまづ其諸言母曰く



…(友)ナアル(任)来ぬ人を待ちくたびきて(友)へい、(任)無聊またへうねける  
 折白雨棒をあらべたてたるが如くふりいだしければ…(友)ナアル(任)エヘン徒  
 然の茶うけよせよと空からも盛いたしたる雨ン棒かゝ(友)ハ、ハ、ハ、是れおも  
 しろいあか／＼狂詠氣があまりまをす…それこそ三芳さんや悴の如何しまし  
 たかモウ程なく七時過になりませう(任)若し夕立の前に出掛てさへ居れば早晩  
 やつて来でありませうが事よると此雷雨に辟易して因循したかもしれません  
 ヲ(友)それじやア甚だ残念だゝまさう斯やつても居られませまい兎も角盃盤を  
 命じましよう〇フイ／＼姐さん要だ／＼ト女中を傍へ呼寄つゝ酒食の用意を命  
 じるうち任那の頻に川の面を打みやりつゝ舌うちして(任)ア、船の一片も采る  
 様子に見えなむ守山さんコリヤアいよ／＼来ませんヨ雨の大小小降よあつたが  
 風が依然として烈しいゐら(友)お出なさらぬかもしれませんが宜しい今夕を臨  
 時の納涼會と致しまして別宴の更し聞くとしませう幸ひ料理もござました様

子マア兎も角も開宴ませう(任)何だか夢を見たやうお次第でま子(友)ヲ、夢を  
 見るといへば任那さん。十二先生貴君も少じうけたまわりたい事があるて(任)へ  
 、い何ですか(友)おにサ随分舊弊めいたお話ですがト云ふ折料理が整ひしと見  
 へて女中が酒肴を持出でれば豆も盃を取りあげつゝ、しむらく無言にて酒事あ  
 りや、ありて友定に任那に向ひ(友)今お話をしかけました夢の話といふの、外  
 の事でもありませんが…兼て悴のら幾分かお聞なすつたてでありませうが私の  
 妻と末女との不慮の事で生別れをいして(任)たしか上野の戦争の際にお別れ  
 ますつたやうよ(友)さやうさ圖らず行衛を見失ひまして最も私に故あつて鞆  
 義隊にも加りませす恰ど彼の戦争の際に舊君の御膝下は仕へて居りました  
 ゆゑ下谷乃宅の妻と子供のみてございましてが俄然の異變に狼狽いたしました  
 のと見えて下男の悴友芳を背負うましく淺草の由縁乃方へ送まする妻の末女を  
 抱きまして同じを一所まかけ出しましぬが如何處へ落ました事やら一向は行衛



がわからず程經て其凶報を得ました。百方色とて手を盡して心當りを尋ねま  
 しまが、トント手掛と得ませぬ。到底死んだ事を諦をまして子全く思ひ断えて  
 居りました。が六七年も後でありました。歎ある晩思ひ寄らぬ夢を見ました。其夢の  
 大略を申します。妻のあの折金杉の親戚の方へ落逃げびやうといたして、末女を  
 抱きて逃ゆたました。所圖らど流丸の中りましく敢なく其處へ絶命をいたし、小兒  
 の一個取残さきて是も命が危いところへ折よく通か、つた人があつて、末女を拾  
 ひあげて立去りました。が(小)へ、イ實は奇妙奇代演戯にでもありさうな夢です  
 子エ(友)處が其拾むあげた男といふ。あまり本性のよろしくない人物で、末女を  
 十三四才までの養育しましたが、竟に金錢に究迫いたして、たしかに吉原敷と思ふ遊  
 廓へ娼妓に賣つたといふ。米歴をばまざくと夢に見ました。ゆゑ(任)へ、イ實に  
 奇々怪々です。子(小)それじやア或は友芳君のこゝろしたのが(友)エ(小)十二支芳  
 さんもいつかそんな事をおいひあさいまし。ヨ(友)十二支悴ふも此話の致しま

した。が悴と頻に笑ひまして、心理學上うら考へても夢のしらせなういふ事がある  
 べき筈の譯でない。そりやア謬想だと説破しましたが、どうも心がすみません。うら  
 所々の新聞紙へ廣告を致して、百万さがしました。が解りません。のサさて、悴が申  
 ま通り所謂心經の迷であつた。ト吾ながら赤面母存じまして子全く断念して居  
 りました。が寔は不思議希代といふの。一昨晚の事でありました。がまた、末女  
 が存命いとして、芳原の娼妓になり居る様子をまざくと夢に見ました。だから再び  
 心が迷ひまして子如何なる道理とも解し無まをが全体支那で申すやうに正夢な  
 どといふ事がございませうか。任那さん、哲學家だとうけとまらつたら不圖  
 御質問をいたす譯でもが(任)ある。と、そりやア甚だ奇代をお夢の相違ないが  
 シカシ古采其例にあまたある事。何れも奇怪な事じやアありません。ヨ正夢の如き  
 の元采毛頭ある可らざる道理で抑も夢といふ者の如何なる者かといふ。蓋し我  
 心の作用、外ならず夜にあらると人間の身体、晝間の疲で寝入つてしまひ全



然て感覺がなくなりまますが、腦の全く身体と異つて夜間と雖も休息せずして晝の通り働きますから腦が總ておいて時々色んな事を見るんであります。且や感覺が休んで居るので外部からの刺戟が少しもないから随つて目前の事を考へる必要もなく自然思ひよらんむうしの事など夢で見る事があります。是他おしつ總べて人間といふ者の幼少の時からの經驗を悉皆腦髓の中に納めて常時貯へて居りまますのだから晝の見聞する事が多くて甲事乙事取紛れて目前の事無要を思想の自然與の方を引込がちなつて容易に思ひだすものであります。譬へを以て之を申せば楊柳陰暗うして螢火の燦たるを見るが如く夜色沈々として始めて蟲の声を聴くと一燈螢の晝間居らぬものでもおと蟲の晝鳴かんものでもないが晝の万籟然たるゆゑ外の刺戟に障へられて吾人が氣がつかん道理であります。デスから夢といふ者の兎に角曾て思つて居つた事と見るもので決して思ひない事を見るものであります。ヨ斯申したら貴君の私の女が娼妓よなつて芳原に居やう杯と曾て思つた事もおいと必おつしやるであります。せうがおよそ人間といふ者の毎に何事にも知覺があるといふ譯はゆかんのものと思ひないと思つて居つても尚思つて居る事があるもんで今度友芳君が卒業をなさつたにつけてア、亡妻が存命で居つたあらうと知らず細君の事をお思ひだしおまつたにつけて御自分よの覺りまますまいが自然に令嬢の事おんども其時腦中に浮んで来て所謂アツソシエイション(連感)といふ心の作用でア、いつか見と彼夢の或は正夢でありおしまひうなどと妄信が起りまますのサ所で今も申した通り晝の外事でさうがしいから毫末其邊に知覺がふけきど夜もあると次第々々に外部の刺戟が静まつてくる外部の刺戟が静まるに隨つて既往の疑團が浮んできて一度見た夢をまた見るまゝで何も不思議な事でもありません。最も斯申したからつて妻君と令嬢が御存命であるらうと申す譯でいふいふ唯夢のシラセと稱する事を甚しい謬信の然らしむる所は相違ないと申すのみです。或は果

然て感覺がなくなりまますが、腦の全く身体と異つて夜間と雖も休息せずして晝の通り働きますから腦が總ておいて時々色んな事を見るんであります。且や感覺が休んで居るので外部からの刺戟が少しもないから随つて目前の事を考へる必要もなく自然思ひよらんむうしの事など夢で見る事があります。是他おしつ總べて人間といふ者の幼少の時からの經驗を悉皆腦髓の中に納めて常時貯へて居りまますのだから晝の見聞する事が多くて甲事乙事取紛れて目前の事無要を思想の自然與の方を引込がちなつて容易に思ひだすものであります。譬へを以て之を申せば楊柳陰暗うして螢火の燦たるを見るが如く夜色沈々として始めて蟲の声を聴くと一燈螢の晝間居らぬものでもおと蟲の晝鳴かんものでもないが晝の万籟然たるゆゑ外の刺戟に障へられて吾人が氣がつかん道理であります。デスから夢といふ者の兎に角曾て思つて居つた事と見るもので決して思ひない事を見るものであります。ヨ斯申したら貴君の私の女が娼妓よなつて芳原に居やう杯と曾て思つた事もおいと必おつしやるであります。せうがおよそ人間といふ者の毎に何事にも知覺があるといふ譯はゆかんのものと思ひないと思つて居つても尚思つて居る事があるもんで今度友芳君が卒業をなさつたにつけてア、亡妻が存命で居つたあらうと知らず細君の事をお思ひだしおまつたにつけて御自分よの覺りまますまいが自然に令嬢の事おんども其時腦中に浮んで来て所謂アツソシエイション(連感)といふ心の作用でア、いつか見と彼夢の或は正夢でありおしまひうなどと妄信が起りまますのサ所で今も申した通り晝の外事でさうがしいから毫末其邊に知覺がふけきど夜もあると次第々々に外部の刺戟が静まつてくる外部の刺戟が静まるに隨つて既往の疑團が浮んできて一度見た夢をまた見るまゝで何も不思議な事でもありません。最も斯申したからつて妻君と令嬢が御存命であるらうと申す譯でいふいふ唯夢のシラセと稱する事を甚しい謬信の然らしむる所は相違ないと申すのみです。或は果



して令嬢れいぢやうは婿むこになつて居ゐらるゝかもあれませんがよしや其事そのことがあつとしゝ  
 所ところがそれららの所謂いはゆるまぐれあたり偶ぐう中ちゆうといふもんで貴君あなたの想像さうぞうは不圖ふと暗合あんがくしたといふまでと  
 決けつして正夢まさゆめといふもんどやありませんヨ友へ、いいですかなさり承うけたまはつて見みる  
 といいうにも道理どうりじやう上じやうさもあるべきやうに思おもわれままがあまり思おもひ寄よらぬ折せりに思おもひ  
 寄よらん夢ゆめを見みましたから任イエサ矢張やじやう幾分いくぶんか不知しら不識しら思おもつてお出いでさるのだ  
 羽織はをりの粧かざりは着ついて居ゐつた任蜥蜴せきぎを見みて夢ゆめに背せ中ちゆうへ任蜥蜴せきぎの登のぼつたと見みた人ひともあり  
 ます任但たゞし其男そのをとこは全然まるごと蜥蜴せきぎの粧かざりを見みた事ことは忘われてしまつて居ゐつたとして一時ひと  
 甚はなはだ不審ふしんに思おもつて其原因そのげんいんを考かんがへましたがあとで羽織はをりを再またび見みてさては是これだなと  
 心附こころづいて大笑おほはらひをしたといふ事ことがありまはアスから思おもひ寄よらん夢ゆめを見みるのも随分ずいぶん  
 ありうちの事ことですヨ友ナアル○時ときはお話はなしが理りは落おちてどうも盃ちよこが流行はやりせんな  
 サアく小町田こまちださん一ひとツさしあげませうヲヤ如何どうをすつた大層たいそう面かほ色いろが惡わるいでい  
 ないか小へい小々せうくづ頭痛づうとうがままして任ヲヤ又また持病ちびやうの腦病のうびやう敷か少せうし横よこになつて居ゐ

れいばい、小ナニ大たいした事ことトアないが友ドウモ季候きこうが不順ふじゆんだから弱いか方かた  
 の實じつに大事だいじどかまいないで寐ねてお在いなさいお時ときは今晚こんばん何なんといふ變へんな天てん氣きでせ  
 ういよく風かぜが強つよくあつてコリヤアまう鬼てもお出いでいやうだ任時ときはモウ  
 何時なんじごろでありますの○支定しちぢやうの懐中くわいちゆう時器じけいを閉ひらいて見みて友ヤレくもう己ごは  
 時半じはんイヤ十時じゅうじ五六分ぶん前まへになりました任そりやア大變たいへんうれでてもう決けつして參まゐり  
 ませんヨ友任那にんぢやさんいの甚はなはだお氣きの毒どくであつたが又また出直でちゆうしせ致いたしましていつ  
 を食し事じをして歸かへりませうか任にんどう致いたして三芳さふが大變たいへんに失敬しつげいを致いたした譯わけで此  
 小休こやすになつて居ゐりませ中に早速さつそく歸かへる方はうが上策じやうさくで何りませう友それでは彌いよく々々  
 うと斷行だんかう致いたませうヲイく女中おんなぢゆうそれではネ大急おほいそぎで御膳ごぜんの用意よういをしてそして  
 車くるまを三臺さんたい先生せんせいも小町田こまちださんも今夜こんやの最早もつと遅おそいから私わたしの旅寓りやくへお泊とまりなさい任  
 御遠慮ごえんりよなくさう願ねがひませうか小小失禮しつれいで私の宅うちへ何なんを申まを置しませんで  
 したから友宜よろしいヨ外ほかではあし私わたしの處ところへお泊とまりなさるのだから小アスが



私だ々の(友)守山さん矢張小町田君のお宅へお歸りなすつた方が宜しいでせう。假令後であつる舟した所が桑爾君の少々故あつて當分外泊しての親父さんへ宜しくあい諱ですから(友)さういふ諱で強て申すの宜しくない○それトやや女中車の結句二臺でよろしい。一臺の二人乗をいひつけてだろさい(女)ハイ〜。うしこまりました。

○しんみとした守山が座敷のさまに引かへて樓下の一間の底抜さのぞ調子外レの長歌斷ちて釜あぶあげなる都々一纏の鹿暴といやみて持切りたる客のお幫間よもてあませど金で買る、身のかなしさ客に當ハの權あるゆゑ藝妓の五分の蟲拳をむグツトおさへて柳でうけ坊ちやんお利口ともてとやせバ。お山の大将おれ一人こゝまでおいでトあべこべふ誇ひかゝれる自惚根性うつ惚れましたも危険ゆゑ容易に口をら出しかねつタメツチや騒ぎでよき程に今宵の坐敷を切あげんと平氣甚句のヤケ三味線耳かしましたきドタバタ躍り寔に四方の迷惑をりけり

(吉)ア、モウ退陣だ〜。田のちやんと辨將軍の其行倒きをかつぎだしたまへど(岸)ナンダト此畜生吾輩を以て行倒だとい是如何に(吉)ハ、ハ、猶村高を以て酒は土左衛門と見做すが如しか子(村)エイどうしたとケブツフ土々土左衛門たア失敬極るツ(田)アレサ。そんな事はどうでもい、ントやありません。サア私と一所においでおさいな(吉)早く車にのせてしまふべしだ。イ、カ今の事の承知だろうな辨將軍たのんだろ(辨)ハア先刻承知ですヨ。サア〜岸ちやんもお起きなさいヨ口程よもない弱蟲たア君の事ど(岸)おんだおれが酔つてるもんか○馬鹿野郎(辨)ヲヤ私の野郎じやアないの。サア〜起お給〜(岸)イヤニ生意氣お語を吐くなア(辨)ハ、ハ、ハ、生意氣でもなんでもい、から。マアお起きなさいといつたらヨウト藝妓二個の無理やりは酔たふれとる二人の客を引づりおこしてあち出れバ(吉)ライ〜。あのおんどぞイ、ヨ跡の承知だマア早くのるべし〜。○折しもまたも降り来る雨植半亭の表門の桐油をのろた人力車の山をなしてか





ぬれぎぬの  
 元とす  
 五神下  
 杜神一夜の  
 雨か八回





雑沓せる此方に女中が口々にお静にいらつゝまやいまし左様ならつ○チヨイト車  
 夫さん一人乗の方でもヨ(又一人)深川のお車引(女中)ねまづかよ左様ならつ  
 二組三組の客人が一時一選となりたるゆゑ表口の非常の混雑小町田祭爾の守山  
 任那の後ろ一つきくそや門口にたちいでしが頭痛がいよゝたへがたさに片手  
 一蝠傘さしかたつ、片手に額を押へながら(小)ライ〜一人のりねどれだ〜  
 (車夫)へいへい是へお召をまつて(小)ドツコイ危ない一寸此傘を持って呉れ(車)  
 宜うございますか○ヲツト〜ゴツサイゴツサイト引出る門前の車夫に向ひ  
 (車甲)サアよしただしねへ(甲乙)サア手前だしねへ(車甲)イ、カラ出しねへとい  
 ふよおらア前がわからんくらヨ(車乙)それじやアやるぞガラ〜  
 ○こや吾妻橋もうち渡り淺草前ぞと思へる、よ車の下谷に向はすして北の方へ  
 と向ふに似たれを小町田祭爾の審りつゝひそか母桐油を掲げあげてあたりを志  
 ぱく見回せども文目もとりぬ暗の夜なればこゝを何處と志るよ志をけれど如

何よも様子が變あるゆゑ(小)ライ〜車夫道がちがやア志あいう(車)へ、  
 大丈夫でございます(小)何處へいくんだか志つて居るか(車)へい存じて居まほ  
 こちらから参りました方がちかいのでムいますガラ〜(小)ライ〜  
 が何處だう志つてるか(車)へ、存じて居ますガラ〜(小)どんとて  
 居るじやア志かないどこへいくんだ(車)へい〜ガラ〜(小)  
 コレ待て呉といふよ○ガラ〜ガラ〜  
 ○韋駄天の如く雨をも厭はむままじ劣らとど都合四臺の人力車が競て走  
 る一生懸命其真中よはさまれたる小町田祭爾の聲ふり志ぼりて志きりよ車夫を  
 とむれども耳母もかけをか行く程よいつしか幾町も通りすぎていと淋しげ  
 ある巷にいでぬア士心得ずト小町田祭爾のあたりを屢々見回せども四方真暗よ  
 てまゝのらす轄らくあつて何とやらんいと賑やかなる巷よ出ぬふたゝび桐油  
 を掲げあげて右と左をかへり見るよ絃歌さながら沸くが如く太鼓鼓の音かまび



まぐひるをあげむく球燈の雨も散らぬ夜乃花の巷の吉原と此時とじて  
 悟るものから何とて守山任那等がふるる處へ立寄りけん雨でもふらぬ夜であら  
 ば燈籠見物もさる事なれども雨夜もあざく来るべきやうなして先刻植半  
 までウツカリ車を間違へしか。コハ鈍ましか失策せしと再び車夫を止めんとする  
 程なく四臺の人力車ひとしく車の進を止めて。トアル引手茶屋の店先へ横附ふ  
 おん着たりける。フヤ被入いませの声と共まづ車より立出る。村高岸の邊の兩  
 人あり(岸)サア来たぞ(茶)フヤ(おめづらしい事吉住さん(村)ドウダ  
 此雨よくるタア賢があるだらう。フイ(吉住)でるべし。此うち後の人力よ  
 りやをら立出る藝妓の田の次あはて、車を飛下りたる小町田繁爾と面合せ思  
 ひよらねば流石よびつくり(田)フヤあまたの繁さんじやア有ませんう(小)おま  
 へ田のちやん。「折るら後れてガラ(吉住)」。今しもこへうけつけし。すなはち吉住潔ありたり。

第九回

一得あれむ一失あり

一我意あきば一理もある書生の演説

○九尺二間の障子の腰板あさましう破れ砕けて坐角力の古跡いちとるく縁無ハ  
 疊の琉球表の處々摺れ破れて柔術のお温習の盛んなるを示す夜被いた、ますし  
 て押入の内ふ投入れ衣服の洗いをして久しく藤行李の内よおさむ足駄の他の穿  
 去るを恐れて蘭燈の傍ふかくし。ピルの酒場酒氣已に絶えて方今の冷水のい  
 れものともありぬてんぶらの香尚窓前の竹の皮は残り景物の酒盃うけて文机の邊  
 にあり「三五郎物語」の誰が丹精の謄寫に成りし敷洋書と共本箱のうちに入る  
 屢々取出して讀むと思しく其摺れたること洋書は優れり願て壁の一方を望め  
 ばたてか々たる竹刀兩三本握り太のステツキも相連ある中よ血の痕の斑なる  
 もあり想ふに罪もあき近所の犬をバア殺したる記念にやあらん。こり抑何處の  
 景況ぞといふに是なん某學校の塾舎あり。



○羊の頭二十三近眼と見にく鐵櫛の眼鏡をかけた書生尻のあたり赤くあつた。白地の単衣を被て白木綿の屍子をまさつけ腕まくりをしたる容躰見た所うらして強さうなり胎毒の記念と見えて頭の後の方おまるではおたり背後から見れば藥罐を肩の上のツけたやうなり。

○ア、暑うてたまらん／＼やい須河マアおれの部屋へ来いといふよ。マア来いヨ。甘いものがあるが(須)なんじやアまた菓子パントやらう我輩の部屋へ来いみい。えい桃を買ふて来たぞ。ヲイ桐山こつへ来いヨ(桐)なんだ桃だおれの西瓜を一ツ買ふて来もがなア切るもんがあふて困つてをるがなア小刀があるから桃と一所に持て来いヨ(須)西瓜か。そいつのえい今直へ行どまて／＼ト。いひあがら暫くあつて須河三郎の両方の袂へ桃を一盃入れてぶらさげつ、桐山の部屋へ入り来りて(須)ヲイ我輩の處もナイフのナイフじや官賀が持てるトやろうと思ふが。留主よ引出しを開たらまた怒りをるトやろう如何しやうなア(桐)致方ないえい

ハ斯うして割るのトとひながら握拳をふりあおて西瓜の真中を一ツくらのせる(須)ヤア非道イとをきるなアヤア凹んでしまふたぞ(桐)これから之を引割けくえいワイおぬしも手を貸してソレそちらの方を引張れえいか引張るぞ。ドッコイウーント。ハハハハハ。そらどうだ甘く真二ツに割れたぞ。それからの適宜に割るべし。だ其半分のおぬしは遣らう。かちりついて食へヨ(須)おかしまぢたまへ。こりやア何だか暖いでないや(桐)暖いの当然だ買ふ持ッ来たばかりで水母浸んあらぢや(須)ヤレ／＼冷きんで西瓜を喰ふのか。こりやア古今未曾有の方法だる○桐山おむしやり／＼と両手で西瓜を持上てかちりあがら(桐)どうもおぬし。たちの贅澤をいふらひかんの。おれなんどの國にをつた時分の兎を山で捕ツて来てなア皮を剥いて丸煮母して喰ふとどどうも東京邊のやつは柔弱でいけんや。とんど婦人と一衆だ食もんぱうりじやない被るもんでもさうじや。イヤニペラ／＼したもんを被あアがつて。メカスのを男子の本分だと思ツちよるかまらんが。







實に笑止千萬をなすや學者や理學者で。一生を終らうといふ了見の奴に轄く  
 論外としちよめてまづ我輩等とおなじやうに此活社會に運動して大に政治の  
 改良でもおこさるふといふ志で居りながら無暗に學問に勉強して身体を不健  
 康にしてまゐりたり或は婦女子などと交際をして益々文弱の風を養ふた。正  
 に慨歎に堪へざる次第トや何新聞じやツたか。いつかいふた事があるぞ。ア、何と  
 ういふたワイ。さうく斯うじや方今の書生輩の皆顔色が生白うて恰も日陰の唐  
 茄子イヤ冬瓜のやうじやといふたぞ。實に失敬な誹謗であるが。これも事實だ  
 ら辨駁の志やうがない。おぬしおんどの如何思ふちよるか知らんが。おれは是等の  
 誹謗を聞くと實に憤懣に堪へんによつて頻に腕力主義を擴張しておぬしも已  
 に知ツとる通り研劬會といふ會を創立した。が何じやぞ此頃の非常に會員が殖  
 来たぞ。(須)さうかア我輩も脚氣が全快したら。また會員あるつもりじや(桐)さ  
 うせい。一撃劬をする。と第一は身体の爲にもえいし。又將來の爲めにもえいど腕

力の野蠻トやなんぞといふ奴があるが蓋し社會の事情も暗い奴トや駝アウ井ン  
 がいつとる通り優勝劣敗の世の中トやから強弱を壓し小の食となる元  
 米當然のはあしどや而して如何あるもんが。一番強にして且大かといふと所謂  
 Might is right(マイトイズ、ライト)といふ腕力の權利といふ意トや萬國公法があ  
 らうが何があらうか。まだ一道理ばりりての勝つことまできんワイ國と國との  
 間の事ハ元米論をるまでもないが。一個人の場合じやからツて矢張腕力が勝を得  
 るが。試におぬしがある政黨の領袖よあつたと假定して見イ反對黨の論者に如  
 何ある鹿暴な奴が居らうもえれん議論で負ても腕力で以て勝うと思ふておぬ  
 しに切らつて来るもえれん。えい、斯うあつた場合に於ておぬしが腕に覺えが  
 ありやア毫も憶する譯もないが若し其覺がない時ハ對手の猛威に吞まれてし  
 もうて見ま。御無理御もつともて逡巡しななければならぬ道理じや板垣の岐阜  
 一件のやうな事があつたら。おぬしはどようしようを思ふちよるか板垣のあれでも



幾分の戦場をふんだ男じやから頗る膽力のまいつて居るし且腕力もあるさう  
 トやから容易に犠牲にならんトやつたがあれが柔弱な人間で見イ刺されたばか  
 りでも驚いて死んでしまふぞ腕力の利益はこればかりトやアないがボジチイブ  
 「表向」の利益はマアこんおもんどやア、喋りながら喰ふちよつたら種を半  
 分喰ふてままうた(須)腹の中を西瓜が生へるぞ(桐)馬鹿アいへ西瓜の種位は  
 驚くに足らん種をくふたよつけて思ひ出さがるア。おれが東京へ来た最初になア。  
 或る官員の處へ尋ねていつたら恰ど三月の中旬トやつたが櫻餅たらいふもんを  
 出しておれよ喰へといふワイ。ハテナ妙な体裁のもんトやガと思ふたが如何して  
 喰ふもんトやと聞くも残念トやと思ふて他う食ひとじめるのを俟ツちよつた所  
 が容易に誰も喰ひ始めぬワイ。おれの腹がへつて来たもんトやからかまふもんか  
 と思ふて櫻の葉の着いちよるまんま口の中へとふりこんだがサア喰へんワイ。こ  
 いつままつたト氣がついたる今更えき出すのも口惜いらら。とうくムシヤ〜

とやつてままふた然し其時やア苦しかつたぞ(須)ハ、ハ、ハ、どうも君もまけお  
 しみの強い人トや非を遂るに熱心すること猶王安石其人の如しトや(桐)ハ、ハ、  
 ハ、ハ、(須)たしか明智光秀にもとないな事があつたぞソラ粽を樂ぐるみよ喰ふ  
 たといふ事があつたらう(桐)さうトやツたるのう。どうもあんトやガ戦國時代の  
 もんの概して學問の力の乏しいが氣象は總て活潑トやア假令學力がどの位あ  
 ったからといふて活潑な氣力があふて何の用もた、ん道理トや而して最も  
 人をして文弱にあらまむるもんは彼の女色といふ奴トやワイ女色を避けんとなす  
 るにいまづ第一婦人は嫌える、やうよせんで叶せん斯ういふたらワイ井ク  
 「氣が弱い」お事をいふといふトやらうが人間の元來 *Passionate animal* 「情のある  
 動物」トやから如何に執意が定まつて居つたかといふても向から持るをてこ  
 られた時よ断然排斥する譯よ或いいかんこともあるトやらうからなるべく  
 此方て以て威嚴を張つて女子を近きけんやうにするが上策の上乗トやとおまひ



思ふッ(須)さうトや實に君の言の如しトや我輩でさへもあつた過日淡路町の揚弓  
 店であつたといひかけしが俄丹心附れしと見えて(須)我輩が見ちよつたらあつた。  
 堂々たる大丈夫が小娘に戯れて居つたぞ(桐)兎も角女子と交際するの男子を  
 して文弱は流れしむる原因トや然らば如何したら女子を遠ざくる事が出来る  
 といふ今もいふた通り威嚴を保つのが上策トや而して威嚴を保つのは専ら腕  
 力を研いてあつた麤服を着るが肝要トやぞ腕力のニゲチイブ、アドバンテイジ  
 [裏面の利益の]をなす此點はありといふべしトやワイ(須)ヒヤヒヤをこて君  
 の[何]を主張するトやな(桐)女色も溺るゝよりの[何]も溺るゝと云うがまだえい  
 めい第一互に智力を交換することも出来るなア且に將來の豫望を語りあふて大  
 志を養成するといふ利益もあるうら(須)然しあがら之を徳義上のら論じたら  
 どうじやアンチ、ナチユラル[天に背]じやアなぬうア(桐)馬鹿いふあ之を實際  
 に行ふたらアンチ、ナチユラル[天に背]でもあるトやらうが不道徳でもある

やらうが唯々論理上は行ふのトやうら毫も破廉恥の理由あしトや(須)果して理  
 論上トやの如何トやか容易に信用の出来ん(桐)馬鹿いふあ大丈夫トや時ト山村  
 と繼原の今日も居らんやうじやあア(須)たしう先刻出掛ていきよつた(桐)死や  
 つ擲べしだなアあ、いふ奴が本校に居つて到底本校の体面を汚す道理じや倉  
 瀬の此頃謹慎しちよるやうじやのう(須)ウん此間の試験の落第をするじフハ  
 ザアからの小言をいれたし何か守山も言はれたさうトやから(桐)守山の  
 あれでも放蕩はしあつたといふ事トやのうまかし卒業もせんうちうら生意氣  
 にセントルメンぶつて居やがツたなア(須)さうサ我輩なんぞもあいつの大さ  
 ひトやツた(桐)そまのさうと幫間の何時頃に出掛たか(須)幫間たア誰の事じや  
 (桐)山村の事じやあいつの學生ともいふ身分で居ながら淨瑠瑠語の真似をした  
 り假辭たらいふて役者の身振をまゐるでないか實に破廉恥極まつた奴じや本夕  
 また青樓へいさをツあらう(須)あんでも六時頃じやつたぞ(桐)そまの登樓し







したと思ふの。いつかの君のウヲツチ〔時器〕子(須)ナニイ最早あれハ入用でな  
いじや証人の處へさういふて更に買ぬてくるつもりじやから(繼)さう君は憤ら  
れて困る僕ハ全体君と親い中といふ譯でもあし圖らを一所に會合ツた所から  
して君がいやがるのも管のないで強て登樓した譯だつとから元来君にエムを出  
させるといふ譯のあいなさうれを山村が獨断でもつて強て君をバルシユエイド  
〔説得〕して一時時器を借たもい、が借ツむなしたア實ハ失敬さ僕も山村の所  
置に就いての頗る不平な事ハかし澤山あるが他の關係ハ暫く措いてウヲツチ一  
件に關しての僕最も不平だから君が督促をしない前から屢々山村と談話をたけれ  
どもウンウン承知だといつてるばうして些少も埒があらないらして覺えを今  
日まで長延いたんだが君よく考へて見て呉たまへヨ僕も一人の大丈夫だ僅々四  
圓や五圓の金を人からだまして取るやうな事ハしないんさそれを誰がいひだし  
た事かもしらんが繼原と山村ハ折々朋友を強誘して貸坐敷をぞへ出掛ておき其  
勘定を自分でしないで其朋友にさせるおんどト實に聞くに堪へん其評をされて  
ハ切齒慷慨堪へないじやアないか今日山村を引張だして思ひツきり譴責した  
上で此通りウヲツチを請出して来たから君としかお受取ツてくれたまへ今まで  
延引したのハ失敬だつたが僕が借用した本人であいらから君も斟酌して可なりト  
やないうといひつ、懐中より時器を取出しやがて須河の手に渡せむ須河のさま  
りが惡さうにモジ／＼しふから(須)ナニ君は對しての憤る理由もないトやが  
んまり山村が不義理な事をしをつたりと遂に君はまでも失敬な事をいふた譯じ  
やが君は斯いふ心配を懸ては實ハ我輩が濟まん何も君を惡く思ふていふた譯ト  
やないから(繼)マアい、さ君はウヲツチを渡した上で僕の本心さへはかりやア  
い、んさ僕は是でも學問をした人間と随分放蕩もするけれど人の物を譎取つて  
それで遊ぶやふな事ハしないよそれトやア確正よとさしたヨトいひをなしたま  
へ行かんとする素この繼原青造といふ書生の頗る懶惰なる人物でハあれどさま

したと思ふの。いつかの君のウヲツチ〔時器〕子(須)ナニイ最早あれハ入用でな  
いじや証人の處へさういふて更に買ぬてくるつもりじやから(繼)さう君は憤ら  
れて困る僕ハ全体君と親い中といふ譯でもあし圖らを一所に會合ツた所から  
して君がいやがるのも管のないで強て登樓した譯だつとから元来君にエムを出  
させるといふ譯のあいなさうれを山村が獨断でもつて強て君をバルシユエイド  
〔説得〕して一時時器を借たもい、が借ツむなしたア實ハ失敬さ僕も山村の所  
置に就いての頗る不平な事ハかし澤山あるが他の關係ハ暫く措いてウヲツチ一  
件に關しての僕最も不平だから君が督促をしない前から屢々山村と談話をたけれ  
どもウンウン承知だといつてるばうして些少も埒があらないらして覺えを今  
日まで長延いたんだが君よく考へて見て呉たまへヨ僕も一人の大丈夫だ僅々四  
圓や五圓の金を人からだまして取るやうな事ハしないんさそれを誰がいひだし  
た事かもしらんが繼原と山村ハ折々朋友を強誘して貸坐敷をぞへ出掛ておき其  
勘定を自分でしないで其朋友にさせるおんどト實に聞くに堪へん其評をされて  
ハ切齒慷慨堪へないじやアないか今日山村を引張だして思ひツきり譴責した  
上で此通りウヲツチを請出して来たから君としかお受取ツてくれたまへ今まで  
延引したのハ失敬だつたが僕が借用した本人であいらから君も斟酌して可なりト  
やないうといひつ、懐中より時器を取出しやがて須河の手に渡せむ須河のさま  
りが惡さうにモジ／＼しふから(須)ナニ君は對しての憤る理由もないトやが  
んまり山村が不義理な事をしをつたりと遂に君はまでも失敬な事をいふた譯じ  
やが君は斯いふ心配を懸ては實ハ我輩が濟まん何も君を惡く思ふていふた譯ト  
やないから(繼)マアい、さ君はウヲツチを渡した上で僕の本心さへはかりやア  
い、んさ僕は是でも學問をした人間と随分放蕩もするけれど人の物を譎取つて  
それで遊ぶやふな事ハしないよそれトやア確正よとさしたヨトいひをなしたま  
へ行かんとする素この繼原青造といふ書生の頗る懶惰なる人物でハあれどさま



が母數年間學問を修行しただけに、庶耻の定義ぐらゐの充分會得したる男なるゆゑ、過般山村須河と共に中、靡母遊びし折其會計に究せしあま、一時須河の時器をうりて之を山村が質屋に投じて三圓半のモネイとなし、繼原の手許に送りし後、校の時器をば請も出さず其儘にして棄置たしかば、須河の屢々兩人に逼りてこれが催促をなすと雖も、右に左に遁辭を説けて二月あまりを経る頃まで、何の返辭もせざりしる、須河の痛く憤りて繼原、山村兩人をばそれといなし、學校中にていとあしざまにいひ觸らして暗に憤と洩したりしを、繼原青造が聞知りつゝ、いと口惜き事に思ひて須河の舉動を怒ると雖も、源の身からでたさびある故あからさまよ之を辯駁せんやうもなければ、まづ彼の時器を返へせし上よて名譽恢復を圖らんものと、獨私に心を定めて之を山村に相談せしかど、山村はたゞ打笑ひて少しも取あふ景色をければ、繼原の彌々憤懣しく今日しも山村に強てせまりて、幾分か割前の金をいださせ、非道五面して彼の時器を交出したる事にぞありける。

書生中に往々繼原の如き人物あり、蓋し庶耻を知る性質なれども、其執意の堅からざる、るら時に劣情を制しかねて、懶惰放逸にながる、のみ年齢漸く老ひきたりて血氣少しく靜まるよいたらば、或は有用の人ともなり、あん閑話休題さて、須河三耶の思ひがけなく、繼原より懐中時器と受取つよ、さきがに氣の毒に思ふよつけ、又今更に何とやらん、さきよりも惡く氣味も惡くて立去らんとする繼原が袖をいぞが、しく取留めて(須)「イ、繼原君、マア待たまへ、君、これから何方へいくんじや(繼)「僕、まだ少々用があるから、辰岡町までいくんだ(須)「それで、本舞まで同伴じやう(繼)「君もあちらへいくんか、それじや、ア一緒にゆかり、ト口にいへど、あまり面白く、思ひぬ、兒附須河の頻に繼原の氣嫌を直さんと、して(須)「山村、何處へいきよつた子(繼)「何處へいつたか、僕、しらあ、(須)「山村、今でも放蕩をしちよるな、ア、あいつの實に精神の定まらん男じや(繼)「さうさ、随分フハ、くとした人間さ、しかあきでも、花柳の事情よ、通じたものだ、淫蕩學の博士よ、すりやア、黄







きや。お買ひあさいといひたけれど斯んを駄印の安魂の幾千万箇買入れても何の益にもたちそよなし。およしあされたが徳用との餘計を惡まれ口本文のとなだ「お邪さま御めんあさいヨトい、ながら年の比十五りの小女須河の前を通りながら歸り跡の火鉢をかたづける須河の何心なく風と此娘の兒を見れば何處かで見たことのある兒なり娘もふりうへりて見て居たりしが俄に思ひだせしと見えて(娘)ヲ貴君のいつううアノ何んでお目懸つた事がありました子エ(須)なんでもあふた事があるやうじやと思ふちよる所トやおまへの誰さんじやツたりあア(娘)ホ、ホ、ホラ貴君のお時器を子無理にわたいが強奪ツて子(須)きうく。やつと思ひだしたお前のお豊さんたらいふたあア(豊)アラマアよつく覚えく被居るヨ(繼)ヲイヲイ須河こりやア恐れた黙り者の何の何とかだ牛肉のおどり位トやア許されんぞ(須)ナニイ馬鹿い、たまへさういふ譯トやあい此婦人のせんだつて淡路町であア(繼)どつこい。そんな甘口を分説で此

繼原の承知しないぞ姉さん。マア免も角も一盃飲むべし(豊)ハイ有難う(繼)イヤ二氣取ツた子アライといひないうちが千兩だ成程須河が迷ふのも無理のない眼の二重まぶちよして色白く。(豊)アラようございませヨ澤山ね弄んなさいヨ(繼)どつこい擲るの願ひ下げたこれでもいきてる身軀でござい。ヲイヲイ須河久しぶりであつたやうな風をしたツて無要だ此處の亭への君が誘引ツてきた所を見りやア遠から出来て居たんだらう。子エ豊ちやん然だらう(豊)アラ恐れ入ツたヨもウワタイの名を御存トだヨ(繼)一旦耳へ挿んだら忘られたもんじやアない(豊)あんな調子のい、事バかまおひなさるヨ(繼)所が酒場がさつばまよくまい(須)なるほどこりやアウエイカント(空虚)じや(豊)ヲやおれの失敬おあついのを持て来ませす(繼)あんまり熱くしちやアいかんど夏の六十度以下に限るツ(須)姉さん序の代もいるが鶏卵も三ツ四ツ持つて来い(豊)ハイく。トいひながら階段ををりてゆく(繼)口留の積敷非常におどるトやアない(須)馬鹿



をいふてはいかん彼ガル、我輩の知己でもあんであいら(繼)分説をきるだ  
 け可怪じやあいう君も中々やつてるな(須)然でなぬといふに彼のあアもとの揚  
 弓場の女で(繼)それを君がラブ「いろ」にしたんか(須)馬鹿ア言たまへとつた一  
 度逢ふと事があつとんじやが如何してこへ来ちよるのうしらん(繼)うるりのふ  
 てこれ本郷の牛店に逢ふも不思議：これトアア淨瑠璃よの語呂がさるさうだ  
 あアライ須河一平宇治の警将といふ君がなれその物語をさりく白状志てし  
 まひたまへ(須)馬鹿いふていいうんそあいな深い譯のないうんトや(繼)さつさる  
 ら幾度馬鹿を云ながでるうまれやアまあい僕だつてさう馬鹿はあしいふもんか  
 白状しあいと歸校つてから皆人よいふう(須)いわれてたまるもんう外の奴の事  
 實トやと思ひをるから(繼)事實母相違ないトアアないか(豊)ハイお酌を致しま  
 せう(繼)フツトささり。ライ姉さん。アのない豊ちゃん須河めがノロケていかんろ  
 些と謹めといつてかさあ(豊)アスカほんとは此方の浮氣さうでまねエ(須)馬鹿

アいへ(繼)どうも馬鹿アいへが好だナニサ。お前のノロケをいつて居たろヨ(須)  
 うそトやぞく(豊)どうで然てせうさワタイのノロケなんぞと何の因果で子エ  
 あなた(繼)そりやこそ夫婦喧嘩のたまり左様ツ僕らあらんぞく。まど、興  
 乗けて繼原の頻須河に挑弄ふに須河のほとほと困果て真地目となりてい  
 ひあけする其容体ガをかじけれへお豊も共一口をそろへてさまぐよおもちや  
 になま夜の深行くもまらざりけり。

第拾回

生兵法大きな間違をしでかしま  
 味方をぶちのめを書生の腕立

却説 繼原青造の酔ふての私憤もどこへやら須河と共に酒酌かりしつ。お豊を對  
 手ふ夜深るまで彼の牛肉店の二階ありしが須河は痛く酒は酔ひてきた桐山  
 と約せし言葉も今に全く打忘れて頻に興に乗るものうら流石は時刻が後れん  
 うと學校の首尾を氣づかひつ、屢々歸りを促せども繼原はお豊をワキ使ひて。



ゲタ／＼ガラ／＼日和下駄で銀坐街頭を走るやうな奇怪な聲して笑ひながら  
 頻り須河に挑みつゝ、容易にかへりさうな景色もなし西の學者某がいわれし言  
 葉は俗人の笑ふ人を見れば、あの方にお嬉しい事があると思ふといへど、この大  
 なる間違ひあり笑ひ喜びより出るものあらで多くの自慢からであるものゝ笑ふ  
 人を誇るといふこそ寧ろ當然の事ならぬと鹿爪らしういひたりしが、げよさ  
 る諱のものゝやあらん此時繼原が面白げに須河に挑ひて打笑ふ何れも喜ばしき  
 諱あるよあらぬで須河が世間馴れざるゆゑ百舉動がハンマよして、いるよも  
 馬鹿氣て見ゆるを見て我世よなれしを心よ誇りつ口から出任せの抑揚頓挫日清  
 葛藤の時のドルの相場も宜しくといふ鹽梅よあげたりさげたり挑へども其いひ  
 かたが巧あるゆゑウツカリの須河の少しもさくらをとお豊と色だらうといひれた  
 のを結句賞典でも賞ふたやうと思ひ真面目でいひわけをする中よも自惚の原索  
 とノロケのエムブリヲ「萌芽」を含むもをかしく兎角まる中に近所の醫學校の書

生とも思ひ、連中二三人連よて少し隔ちたる向ふお坐敷へ入来れば、兼て常得  
 意の客と見えてお豊のこなたの席を外して、やがて彼方へ赴きつゝ、其詠を聞  
 くとす(書)ヲイ姉さんヲムレツで酒だ後のビフテキといふ注文だヨ(又一人)序に  
 豊ちやんおまへの愛嬌を一時間分借用だヨツ。

○(須)ヲイ繼原モウ戻らうてはあいか(繼)お豊がひつこんだつて直に歸るとい  
 ふにあんまり野暮ださう甚助を起さあいもんだ(須)エ(繼)ナニサ。うんおに焼餅  
 を起したまふるといふ事ヨ(須)甚助といふい、そんなら怒ることゝ。シン／＼ビヤ  
 が沸騰するやうに怒るといふ詠誰か(繼)ハ、ハ、ハ、マアそんな事さ實に君の校  
 中の色男だヨ小町田と匹敵するがウ(須)馬鹿いふていいかん小町田といやア如  
 何したかゝるア久しく下宿して居るなア(繼)ナニサ宅に居るんだとき(須)ナゼ宅  
 へ歸つたりあア(繼)ヲヤヲ君のまだ知らん敷あの一事件を(須)あの一事件と何  
 トヤ子エ(繼)ソラ吉原の珍事ヨ(須)吉原で如何したのじや(繼)あの一事件を知ら



ないたア迂々濶々といふ次第だ。サラバうれがしが物語らんア、ンデン〜(須)ハハハ、ソリヤ息繼ぎの酒を献まぞ(繼)ヲツト、有々、頃しも秋の八月中旬戀に心はうべたまの黒貂の袂吹返へも、風が涼しき夕涼み植半樓ののののの。ア、いけない浄瑠璃風にえなきうと思つたが即席ふハ文がでさふい。やつぱり真地目でえなすとしやう時にもう一盃くれたまへヲツト、サンクス(幸甚)エヘン〜。

○僕も子人傳手の又聞だから委しく原因も結果もしらんが其大略ハアズホルロウス(左の如し)さちやうど今月の上旬だつたらう任那が洋行とするよついで。守山のフハザアの發案とやらで向島の植半に送別會を開いたと思ひたまへ○ヲイ黙ツて居ちや不可ウン思うとかナントかいひたまへ(須)エなぜ(繼)どうも君ハ話せないなア思ひたまへと洒落りやアウン思とうといふなア定規だア子マアい、さ所が其晩ハ風雨でネト第八回の大略をハ事實ハ分附會二分よて物語れ

ハ須河ハほとりと興入りて時刻の移るも忘れ果てそらに膝を進ませつ、(須)へ、イそれハ希代ふことやなアそれから茶屋へいんでどうしたか子(繼)叔これうらが本文だテ去程ハ小町田桑爾ハ思ひがけおく我思ふ藝妓田の次に出會して、打驚くこと大方ならず(須)ハ、ハ、中々君ハ小説文をやり喋口るところが巧トやなア(繼)エートさすが思慮ある少年おれども、う、る里ハ慣ざるゆへエート、如何ハせんと氣をもみぢ、あからむ見で車と降り、イ、イ、ア、い、かん〜。やつむり真地目ではおさう(須)真地目の方がまかりやうてゑい。それから小町田ハどうしたかネ(繼)それから子、どうも車の乗ツ放して無言で逃るといふ譯ふもいくまいだもんだから小町田がネヲズ〜一所ハ来た客ハ向ツくいろ〜其粗忽を詫たさうだ(須)向ふの客といふのハ全体何もんや子(繼)たしか代言人だと敷いふ事だ。スルト向ふの客野郎ハ園部七園部ハの連中だから別々怒るべ免理由なくとも何う理屈種が生いてきたらト待ツて居た處だからたまりやし



まい難だのこんにやくだのと管を巻いて色々面倒になりかけたを田の次と辨古  
 といふ藝妓がうまく真中へ割ッてえいつて一先段落にかりかけた處へ(須)フー  
 シ其田の次たらいふ女が小町田のラアアしちよる女(須)さうさ處へ吉住  
 といふ男が、此男が小町田の競争者でネ。ホラ極森のプラザアヨ(須)ウンあいつ  
 か我輩も一度見たことがあつたやう(須)後から人力車に乗かつて子車駄天  
 の如く其場へ馳着たと想像したまへ(須)ヤアそいつの面白かつたなア(須)吉  
 住の非常にドラケンよあつて居たが頗る鋭敏な男だから忽地小町田は目を  
 つけてネ(須)小町田をシンのアのラブトやとしつちよつたの(須)已に其以前  
 不知られて居たさうだからたまらぬ忽地ジエイライシイ「やきもち」を興し来川  
 て無理に小町田を引張ッてネ茶屋の二階まであがつあさうだ(須)ヤレ〜小町  
 田は困ッたらうなア(繼)うれうらが大變だツたツさ。えいめいお知音になりぬ  
 とかヤレ奇遇だとかナンだといつて無暗酒はかし強つけて居るが段々おし

まひよア激しくなつて「ライ小町田さんとやら實は君のお浦山吹花も實もあ  
 ると申したいが花あつて實のない好男子だヨ。まだ親の脚をかちつて居るが己  
 一藝妓などを色にするとい實は花やか極まつとはなした然し花柳に名聲が高い  
 だけ一校中の評判の不印ださうだ子放蕩卒業のサルチフヒケイト「証書」とマス  
 タア色男の爵位を以て學者の尊號と交換するたア感々服々土疵の煮音蒸瀝の沙  
 汰といひぬれぬといふ。」「ヤレ承知るところに因れば近來益々御學力が君の御  
 進歩の御様子とやらで但し後の方へやこれに失敬已近々御退校イヤ御卒業  
 になるさうで誠にお楽しみをお身の上だ流石放蕩に熱心おだけお君の萬端に如才  
 がないヨ。だから田の次的戀着するヨドワアス田の的を廢業してしまつて九尺二  
 間へ引込んでア僕が家賃だを借さううあんぞと。そりやもう續々やツけたさ  
 うだ(須)非道く小町田にやられたなア。それでも小町田は黙ッちよつたうなア  
 (繼)可愛さうに斯うなツちやア仕方がないヨ向ふ三人と来て居る上に。ドラ



ケンといふ便宜がある此方ハソウバア〔まぢめ〕の一本だちだろウ(須)田の次た  
 らいふ女ハ黙ツて見ちよツたのかア(繼)そこが如何いふ呼吸であつた敷實  
 地に臨まんる解らないが想ふよぜキヤツト〔談藝妓〕も究したらうヨ何故かと  
 いふよ子己に先刻もとなした通り田の次よりも古い見の辨吉といふ藝妓が居る  
 から其姉藝妓をさしおいてあんまり口を出を譯しもうんし又一ツよア吉住  
 潔はすツり内幕を知られて居るら下手に取敢を試みた日にア。いよ〜焼  
 餅の火の手を増して小町田の身一害もあるとも毫も應援もアならあいか。あ  
 んとか漢とウ道理があツて切なき思ひ忍指亂れ苦しま心の中やデ、ンデン〜  
 (須)ハ、ハ、また淨瑠璃語の真似か君もよつ不ど山村は似て居るなア(繼)だか  
 ら君ハ天保イヤ。ぼかアんとして居ると人がいふヨ山村の義太夫ハ習ツた淨瑠璃  
 所謂本場の調子だア子供のやらのあア無茶苦茶の自得流で節ふんざア臨機應  
 變だ僕と彼とを同視するのハ月とスツボン。ウツテンバツテン龍動のニウスよ東

京の新聞日本の書生に英國のステユウアント〔學生〕須河君、繼原君ハ、ハ、ハ、  
 これやア失敬(須)君も實よく喋口るなア。それハそうと肝腎のストーリー(はあ  
 し)がどううなツてまふた。我輩が想ふになア。どうも解らんと想ふ事がある。  
 ど(繼)ナニガ(須)なぜといふて何たらいふ今一個の藝妓の事トやがなぜといつ  
 が中裁をせんじやツたかのウ(繼)イヤニ生意氣ハ先察をする手。これから其キヤ  
 ツトの傳になるんだ。マア引こんで聽て居たまへそも〜藝妓辨吉と聽えたるハ。  
 こいつ頗るのお轉婆キヤツトで随分もてあましの古大姐さ。まかるよこいつめ吉  
 住潔母多少おかぼれの氣味團子一本めしあがきと饗應して己ハ怪しむべ中だ  
 とういふんさ。しかし吉住の本心トやア例の田の次といふヤングア。キヤツト〔若  
 手の藝妓〕を是非ともオウ。ライトといはせる積で其尻母バかしついでまハツて。  
 自然辨吉をウドンじたやか。ソバントるとる底よアいろ〜お蓋があツて。い  
 らる蓋といふ字ハ蓋とよむだろウ底といつて蓋といふ暗に理由といふ意味も





糸吉  
田の  
頃  
の  
事  
也



ありき。ナントウまつといバンニング〔口あひ〕だらう。(須)エ。あんじやか話がどか  
らんやうにまつてしまふた(纏)ア、く話せまいく。所で辨吉乃方、於ては、  
チ、ンチンくブイのおんたから腰から尻尾が出たのじやアおいが焼芋大角  
をはやして常に田の的を敵と見做して仇吉もどきの悪言なんがも時々いひか  
た事があるツき。ておかしをすれどもすがはのいみおぬからぬゆへぼんやりだまつてきいてる。己  
に平生がそんなだらうらまんぢい、穴でも見つ々たあら。スツバ抜して田の次をこ  
まらせ耻をか、せてやらうと思つて無て待かまへて居たもんだから此一條の時  
なんざア天の賜とおしいた。き我時至れりと喜んで手しぱらく様子を窺つて  
ると田の次ひますく困却して手たしか辨吉に請願しく。彼お客さんがとんで  
もない。つまり濡衣を被せられなまつて困つて居らツしやるが憫然だ。あたしが  
口をだすと面倒だから大姐え、かりだが何とかいつてト依頼んだと敷たのまん  
と敷てこの所の曖昧どが兎角兩藝妓の間、於ても同時口論がこじまつたと

さ辨吉めこ、がと思つたと見え、赤い唇を引くりかへしアがつて「なんだとへ  
マヤ、く呆れもかへらあゆヨ。あの書生さんのおまへの情人だどへ。働のある藝  
妓衆の異ツたもんど子工面のい、のを鼻にかたて三味線なんざアそつちのけで。  
ベタツキ専門で客を望るの、平生腕おれておいてだけに摘喰ひの種も御前だと  
かヤレ麵包だとか何だをういつて連、嘲弄をこじめたので吉住もモウ破れるぶ  
れ斯うなつて来ちやア敵役だ田の次も耻をか、さきさきちやア意地にもいふことを  
聴かうらう。どうで手入らあいお庭の花から存分惡口のストウム〔あらじ〕をお  
こして二人を思ふさまい、めてやらうと辨吉猫と一所よなつて色氣なしの晋晋  
議、誇、醉、乗、つて喋りつけると外の野郎共も岡焼半分面白半分野治馬よあつく  
助太刀を走るイヤハヤ。一時に騒ぎだつたつて。小町田も性来疳癩持だし田の  
次も虫のある人間だらう斯うあつちやア黙ツちやア居る。田の次のズツト起上ツ  
て子あるほど此方の妾の情人です定めしお眼ざりにはありませうから妾の今う







考へだかろ不可んだ女子に好るべき性質あつて尚且亂れない人間ならぬしめ  
 て有爲な人物だらうが力めて嫌ひる、やうよして居てヤツと情慾を忍ぶやうに  
 やア到底大業のなしがたしだ東洋でもむるしツうら文武無備を良將だといふ  
 し西洋でもシバリイ〔武官制度〕成立以来の武あつて文備なきを野なりといつて  
 大に卑しんでる譯じやアないか。ゼントルメンといふこたア取も直さを文武無備  
 の人といふこととき女好れると剣呑だら威嚴を保つためは武骨にするたアあ  
 んまり自惚の極まつと話だよしんば武骨よしあつたつて大丈夫女の惚りやア  
 ハ、ハ、ハ、ハ、こりやア失敬○そんなウ井イクお〔よわい〕性根だからツイ何を  
 を愛したくなるんだ何の害を説明したいがあんまり何ふ涉るとするいあらマア  
 おあづかりとしておこうヨ腕力を研ぐ極めてい、が如此目的なら止した方が  
 い、假令武骨にして居たからツて女が惚ないともいおれなから惚れたら惚ち  
 グニヤ乎となつて有爲の志と失ふだらう底に到ツちやア我輩なんざア婦人よ

平生交際をして美婦をお茶漬として居るうらよしんむウ井イナス〔辨天〕さまを  
 見たからツてもメイイ。スチユアルト〔蘇國の美しい女王〕は惚られたからツても  
 河童のフハートとも思やアしないヨナントどうだ經驗の功こ、にありツ。ヲホン  
 …ヤア豊ちゃん。どうしたんだ尚一度位出て来ツて能トやアないか。まア、お酌  
 を願うう、ソラ須河どうだ。まづこ、目的例があるトやアないか。君ハ武骨主  
 義で居たからツて此お豊といふ一個の美人が己正に北山時雨ぬれてほしやの。  
 子エお豊さんさうだらう(豊)いやですヨ。しりませんヨ(繼)ト言おハズツト表門  
 人ハ心を興の間のヤデ、(豊)ハ、ハ、ハ、夫でも貴君どうで僕おんがリイベン  
 〔戀着〕したツて無効ですものを(繼)ヲヤ、生意氣な言語をしつて居やアがる。  
 何處の醫學校の情人ハ教へて貰ツた白状しおいとくすぐるが(豊)アラいけませ  
 んハ、ハ、ハ、ハ、トいひをからお豊ハ下へと逃てゆく須河ハ繼原ハやりこめらま  
 て酒も次第醒たと見きて(須)ヤ大變トヤ、繼原君かへらう、我輩のウヲ



ツチの己は十時半フヤ〜今夜も止つてをる(繼)當りまいさ質よいれる時分  
巻いたまゝだ。○須河の手を鳴らしてお豊と呼び時間をさけば十一時なりといふ  
須河のたちまち面色をうへてそりや大變じやトありて騒ぎで急ぎ牛肉店の拂を  
なし無暗に繼原とせりたてつゝやがて牛店をたちいでけり。

○話前戻るさても又桐山勉六の須河が外出おしたる後いそぎ寢道具を取いだ  
して床をのべ蚊帳を釣りて己は就眠らんとする折しも部屋障子を外より開き  
て入来る一個の少年あり但見年の比十四敷十五色白く鼻筋通り眼のバツチリと  
して唇紅あり唐様にいへば風流瀟洒彌子瑕の幼兒へ童賢を細末にして加へ  
たといふ容色ズツトやならぬ之をいへば秋の夜長の梅若丸またの業平のまら  
の姿尚一ツ景物ほめていへばバツキンハムの侯となりける英のジヨウジウビ  
リヤアスのボーフウド(童兒の時)も斯くやありけめと見らるゝと此とほら志  
の彈正大綱タルトル(海亀)入道とおツ月さまあまり比べかたが大業なれども鬼

一角愛くるしき兒たちよて氣象も頗活の方との事其衣服の如何よといふ一棒編  
の單物一金中の尻子帯所謂猫トやらしお結び下げてツカ〜と部屋に入来たり  
(少年)フヤ〜モウ寐たのか暗い子エ。フイ桐山居ないのか(桐)だれじやい(少  
年)僕だヨ。フイ少し依頼ふきた(桐)フ、宮賀殿何じやア(宮)フイ此問題を一題  
教へてくれんる(桐)また數學殿阿兄お教へて貰へおれぬ眠うてならんから(宮)  
阿兄の急がしいてツて教へんるら来たんだい教へて呉れヨ。いやかア。い、ヤイ  
おせへて貰へんでも外へいつて聽てくらくらい。トいひまて、荒々しく障子を閉きて  
ゆかむとする此少年の第二号は出たる宮賀匡の第一にて其名を透といふ學生お  
り桐山の声を掛て(桐)ヤイ宮賀待ちよれ今起て教へてやるワイをかいお怒らん  
でもえいもんじや(宮)それトやア早く起玉へヨ。まだ外に作文をかゝんけりや  
ならん。フイ早くヨ(桐)そう急迫をイりたちいて、サアどまど〜。宮賀の本を(宮)こ  
れだ如何しても僕よア出来ん矢張此フホウニユラ(定式)を應用してゐ、のか



(桐)馬鹿いふるそないな事して出来るかいソレ此法式トやこれでやりやア直<sup>ま</sup>出来るのこないさ容易問題がおぬしよやア獨<sup>ひそり</sup>で出来るか(宮)十二未<sup>いま</sup>と毫<sup>ちつて</sup>末<sup>ちつて</sup>を考へて見<sup>かんが</sup>るうツとのさトいひつゝ、莞爾<sup>わんじつ</sup>と笑ふ桐山の其<sup>その</sup>兒<sup>こ</sup>をながめてニコ〜と笑ひながら(桐)うまいは懶惰<sup>まじけ</sup>ては不可<sup>い</sup>ぞ(宮)十二懶惰<sup>まじけ</sup>けやアしない(桐)なまなんもんがあんぜトイラ「やつて見る」せんか(宮)ダツテ君<sup>きみ</sup>今日<sup>けふ</sup>の忙<sup>いそが</sup>しいと僕<sup>わが</sup>がつても君<sup>きみ</sup>が聴<sup>き</sup>かいて晝<sup>ひる</sup>の中<sup>うち</sup>にまるで外<sup>そと</sup>へで、居<sup>ゐ</sup>たやアない君<sup>きみ</sup>が往<sup>ゆ</sup>け〜と言<sup>い</sup>なけりやア僕<sup>わが</sup>ア王子<sup>わうじ</sup>なんぞへ往<sup>ゆ</sup>く氣<sup>き</sup>はなかつと晝<sup>ひる</sup>の中<sup>うち</sup>をウエスト「むごよくらす」したもんだからとうとう下讀<sup>したよみ</sup>の間暇<sup>ひま</sup>がなくあつちまつて兎<sup>と</sup>ても自分<sup>じぶん</sup>じやアやらりやアしない(桐)さうかそれでいおれは責任<sup>せきにん</sup>がある解<sup>わけ</sup>やアないワイ外<sup>ほか</sup>に難<sup>わか</sup>解<sup>り</sup>點<sup>てん</sup>にありやせんか(宮)ウンもう澤山<sup>たくさん</sup>とサクス〜「ありがたう〜」(桐)ヨイ〜マア待<sup>まち</sup>ヨ遊<sup>あそ</sup>んでいけヨ(宮)まだ作文<sup>さくぶん</sup>があるら遊<sup>あそ</sup>んで居<sup>ゐ</sup>る譯<sup>わけ</sup>はいかん(桐)えいワイ作文<sup>さくぶん</sup>で、でかけヨ(宮)こゝでかくと君<sup>きみ</sup>が話<sup>はなし</sup>

をするうら邪<sup>よこしま</sup>なツてか、りやアしない(桐)十二イ話<sup>はなし</sup>をするもんかいおれが甘い文<sup>うま</sup>を禁<sup>か</sup>じてやるから(宮)話<sup>はなし</sup>をせん位<sup>くらゐ</sup>おろこ、でも彼方<sup>あつち</sup>でも同<sup>おん</sup>トこツたまた来<sup>き</sup>やう失敬<sup>しつげい</sup>ツトいひ棄<sup>すて</sup>つゝ、バタ〜彼方<sup>あつち</sup>へ走<sup>はし</sup>りゆく桐山<sup>とうざん</sup>のあとと口<sup>くち</sup>あんどり(桐)中々<sup>なかなか</sup>彼奴<sup>あいつ</sup>のアクチイブ「活潑<sup>くわつぱつ</sup>」な奴<sup>やつ</sup>やと獨<sup>ひそ</sup>り口<sup>くち</sup>の中<sup>うち</sup>でつぶやきながらマツチをとりいだして紙卷<sup>かみまき</sup>煙艸<sup>えんじゆ</sup>をすひつけつゝ何<sup>なに</sup>やら暫<sup>しば</sup>し思<sup>し</sup>案<sup>あん</sup>見<sup>けん</sup>折<sup>せ</sup>から響<sup>ひび</sup>く上野<sup>うの</sup>の鐘<sup>かね</sup>ポーン……ポーン。

○えや深渡<sup>ふかわた</sup>る秋<sup>あき</sup>の夜<sup>よ</sup>に月<sup>つき</sup>のあれども雨<sup>あま</sup>催<sup>もよほ</sup>ひ浮雲<sup>うきぐも</sup>多<sup>おほ</sup>き空<sup>そら</sup>景<sup>けい</sup>色<sup>しき</sup>暗<sup>く</sup>さの結句<sup>けつご</sup>たよりどと時<sup>とき</sup>得<sup>え</sup>見<sup>けん</sup>ある二個<sup>ふたり</sup>の少年<sup>せうねん</sup>私塾<sup>しじやく</sup>を囲<sup>かこ</sup>ふ板屏<sup>いたへい</sup>をばそつと乘越<sup>のりこ</sup>え校内<sup>かうない</sup>の庭<sup>には</sup>へひらりと飛<sup>と</sup>下<sup>くだ</sup>りつゝ、塾舎<sup>じやくしゃ</sup>をさしぐるんとする此方<sup>こなた</sup>は窺<sup>うかが</sup>ふ一個<sup>ひとつ</sup>の少年<sup>せうねん</sup>たちまち木陰<sup>こかげ</sup>を走りいで、泥賊<sup>どろぞく</sup>までト呼<sup>よ</sup>びとむれば彼方<sup>あつち</sup>の二個<sup>ふたり</sup>の吃驚<sup>びっくり</sup>仰<sup>あや</sup>天中<sup>てんちゆう</sup>にも一個<sup>ひとつ</sup>の身<sup>み</sup>を蹴<sup>ひる</sup>へしてさばやく傍<sup>かたへ</sup>の木<sup>き</sup>の蔭<sup>かげ</sup>へ入<sup>い</sup>るよと見る間<sup>ま</sup>は逃足<sup>にげあし</sup>早くいづこともなくのがれさりぬ残<sup>のこ</sup>る一個<sup>ひとつ</sup>の狼狽<sup>ろうばい</sup>して逃<sup>にげ</sup>んどまるを逃<sup>にげ</sup>しもやうを走<sup>はし</sup>りかゝりし此方<sup>こなた</sup>の少年<sup>せうねん</sup>



